高槻市文化財調査報告書　第17冊

新　池

新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書

平成5年3月

高槻市教育委員会

1．空中写真　新池遺跡と太田茶臼山古墳

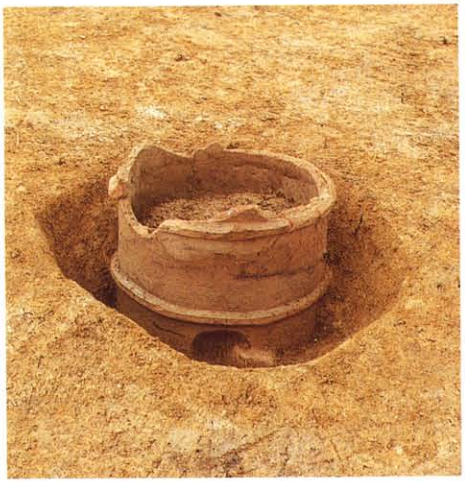
2．空中写真　新池遺跡の埴輪窯群と工房群（西から）

3．A群窯（南西から）

4．3号工房跡（南から）

5．1号工房 SK1

6．1号工房 SK18



7．3号工房 SK19

8．8号住居 カマド

9．谷部全景（南東から）

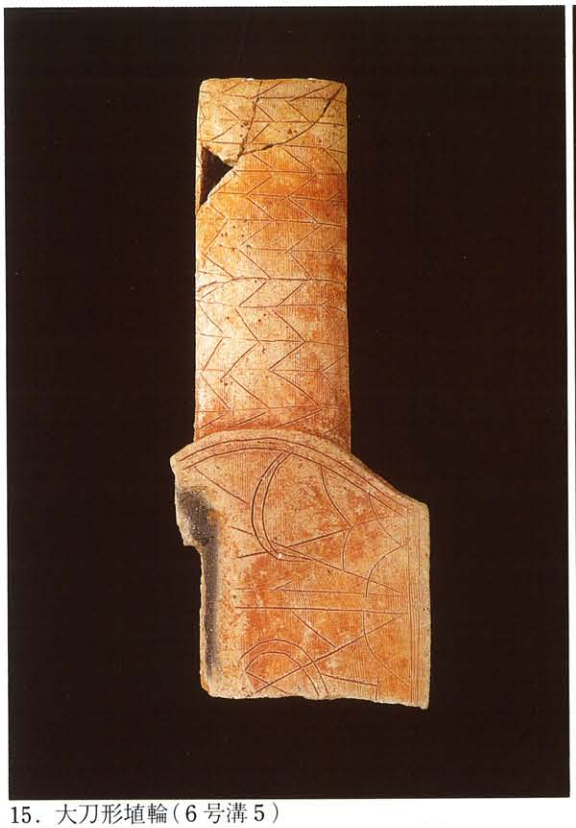
10．地山層（段丘下位の堆積層）

11．地山層（段丘中位の堆積層）

12．地山層（段丘上位の堆積層）

13．古墳時代中期の埴輪

14．古墳時代後期の埴輪



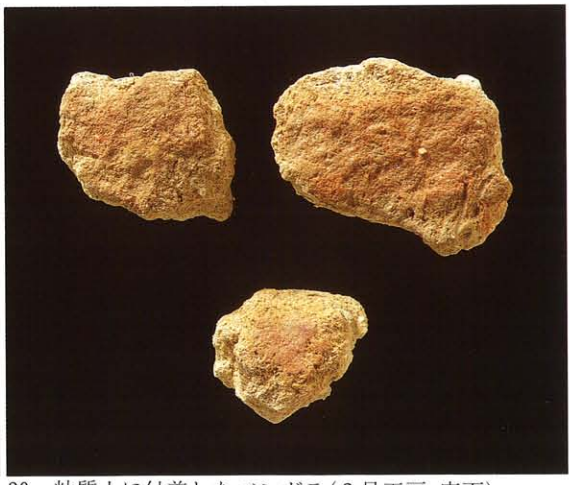
15．大刀形埴輪（6号溝5）

16．同左 裏面

17．家形埴輪（2号窯 121）

18．家形埴輪（2号窯 122）

19．ベンガラの塗り刷毛痕（排水溝 12）



20．粘質土に付着したベンガラ（3号工房 床面）

21．中型円筒埴輪（3号窯 10）

22．同左 裏面

23．大刀形埴輪（2号窯 147） 靫形埴輪（A群窯灰原 32.包含層 51） 24．中型円筒埴輪（3号窯 69）
25．中型円筒埴輪（3号窯 34） 26．大型円筒埴輪（2号窯 4） 27．大型円筒埴輪（2号窯 4′）

28．1号窯出土の岩石類

29．赤変した頁岩（1号窯）

30．復原武人埴輪（焼成前）

31．復原武人埴輪（焼成後）

序　文

古来より悠久の歴史をきざんできた三島野には、先人の遺産がじつに多くのこされています。そのなかにあって、継体大王がみずから陵墓をさだめた三島の藍野陵は郷土のすぐれた文化財として、いまにその雄姿をとどめております。古代の変革期にあって、継体の革新的な政治手腕はいまなお高く評価されているものですが、かの大王が若き日々をこの三島ですごしたことは、『日本書紀』の叙述に照らしても、想像に難くないところであります。

さて、高槻市教育委員会では昭和63年の９月からおよそ20カ月の期間を費やして新池遺跡の発掘調査を実施し、わが国でも屈指の埴輪製作遺構を検出したところであります。成果の一々は本文にゆずるといたしましても、この新池遺跡の窯で焼かれた埴輪が現継体陵である太田茶臼山古墳や史跡今城塚古墳に供給されていた事実が判明したことは、たんに三島の歴史のベールがはがされたというだけでなく、日本の古代史を解きあかすうえでも、大きな収穫であったと信じております。

高槻市では、この重要な遺跡を報告することはもとより、こうした貴重な遺構の保存に対しましては、江村利雄市長を先頭に、市議会とともに、総力をあげて努力したところであります。その結果、阪急電鉄株式会社のご厚情により、埴輪製作遺構がさる平成３年７月20日付で、国指定史跡として保存されることになりました。高槻市といたしましては、新池遺跡の整備と公開は、この報告書とあわせ、今後の高槻市のあらたな文化財行政の出発点と考えており、現在も着々と整備工事がすすめられています。きたる平成７年の春には、新池遺跡が装いもあらたによみがえるものと確信いたしております。

調査の実施ならびに本書の作成にあたりましては、文化庁ならびに大阪府教育委員会のご指導を得るとともに、多くの研究者や市民の方々からご支援、ご協力をいただきました。また遺跡の保存・整備に際しましては、関係各機関、関係各位から多大なご助力を賜りました。この場を借りて心より感謝申し上げる次第であります。

平成５年３月31日

高槻市教育委員会
教育長　藪　重彦

例　　言

1．本書は、阪急電鉄株式会社が開発する土室住宅地造成工事に先立って発掘した新池埴輪製作遺跡(高槻市上土室１丁目所在)の調査報告書である。

2．発掘調査は大阪府教育委員会の指導のもとに、高槻市教育委員会が実施し、高槻市立埋蔵文化財調査センター技術吏員森田克行を担当者として、昭和63年９月15日から平成２年５月31日までおこなった。なお現地調査にあたっては、同センター技術吏員高橋公一(昭和63年９月～平成元年３月)と文化財専門員北原治(平成元年４月～平成２年５月)が、これを補佐した。

3．調査の実施ならびに出土遺物の整理には、高槻市文化財保護審議会委員原口正三、同センター所長冨成哲也の両氏から指導をうけたのをはじめ、下記の方々の協力を得た。

荒尾　英子、上田　弥一、馬越　久美、恵谷　英俊、大塚　　隆　、大船　孝弘、小川　隆久、加藤　典子、鐘ケ江一朗、木曽　　広　、清田　悦子、楠瀬　久恵、後藤　勇子、小林　信之、佐藤喜久子、佐藤　幸央、澤田恵美子、白銀　良子、高谷喜久代、武村　雅一、　辻　　美紀、長尾　雅子、中村　剛彰、橋本　久和、　林 由香子、古木　寿子、宮崎　康雄、八十　健次、山本　敏幸（五十音順)

4．写真撮影は遺構を文化財専門員中村公一、遺物を同清水良真がおこなった。

5．本書の執筆は、第１章、第２章、第３章第１節、第２節Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ、第３節、第４節、第４章第２節を森田がおこない、第３章第２節Ⅳを北原治、同Ⅵを大船孝弘、第４章第１節Ⅰを三辻利一氏、Ⅱを寒川旭氏、Ⅲを那須孝悌氏、Ⅳを松江実千代氏、Ⅴを林昭三氏、Ⅵを広岡公夫・森定尚・田中豊・中村延子の各氏、Ⅶを藁科哲男氏にそれぞれお願いした。

6．本書で表記する標高はＴ.Ｐ.を使用している。また、遺跡の基準割り付け線は国土座標を援用し、調査用原点(0･0)は(Ｘ－127470、Ｙ－37950)に相当する。

7．本書の編集および作成は森田がおこなった。

8．調査中は、じつに多くの方々が来跡され、種々の助言をいただた。日誌抄に芳名を掲げさせていただいたが、なお遺漏も多いこととおもわれます。また報告書の作成にあたっては下記の方々および機関から指導･教示を得ました。この場を借りて、心より感謝申し上げる次第です。

秋元　陽光、安　　在晧、伊賀　高弘、石井　清司、石野　博信、泉　　武　、一瀬　和夫、入江　正則、上田　　睦　、上野　邦一、江浦　　洋　、奥井　哲秀、置田　雅昭、笠井　敏光、梶山彦太郎、堅田　　直　、鐘方　正樹、神谷　正弘、鴨志田篤二、川上　　貢　、河原　純之、木村　泰彦、合田　幸美、児玉　　泰　、坂口　　一　、佐原　　眞　、沢田　正昭、寒川　　旭　、塩谷　　修　、島田　孝雄、白石太一郎、白神　典之、鈴木　一男、関川　尚功、積山　　洋　、宋　　桂鉉、高瀬　要一、高橋　克壽、田口　一郎、田代　克己、田中　広明、田中　　琢　、塚田　良道、都出比呂志、徳田　誠志、中島　和彦、中島　皆夫、那須　孝悌、西口　陽一、西谷　　正　、野上　丈助、濱田　延充、濱名　徳順、濱野　俊一、早川　和子、　林　　昭三、林　　博通、春成　秀爾、広岡　公夫、福岡　澄男、藤沢　一夫、藤田　憲司、藤原　　学　、町田　　章　、松江実千代、松本　敏三、水野　正好、三辻　利一、宮川　禎一、宮田　　毅　、宮本長二郎、免山　　篤　、森岡　秀人、山崎　　武　、吉水　真彦、若狭　　徹　、和田　　萃　、和田　晴吾、文化庁、宮内庁、奈良国立文化財研究所、国立歴史民俗博物館、大阪府教育委員会、茨木市教育委員会、(財)大阪文化財センター

目　次

第１章　新池埴輪製作遺跡の位置と環境

第１節　三島の地勢と新池遺跡の位置 …… 1
第２節　先史時代の三島　－新池遺跡成立前史－ …… 3
第３節　古墳時代の三島と新池遺跡 …… 13

第２章　調査経過

第１節　調査にいたる経過 …… 17
第２節　調査の経過 …… 20

第３章　遺構と遺物

第１節　遺物の分類 …… 29
第２節　段丘部の調査 …… 35
Ⅰ　埴輪窯 …… 35
ⅰ）Ａ群窯 …… 35
ⅱ）Ｂ群窯 …… 97
ⅲ）Ｃ群窯 …… 102
Ⅱ　埴輪工房 …… 119
Ⅲ　工人集落 …… 152
Ⅳ　新池古墳 …… 205
Ⅴ　開析谷 …… 213
Ⅵ　包含層の石器 …… 218
第３節　谷部の調査 …… 226
Ⅰ　土坑・落ち込み …… 228
Ⅱ　沼沢地・自然流路 …… 232
Ⅲ　井戸 …… 250
Ⅳ　包含層の遺物 …… 265
第４節　律令期集落の調査 …… 270

第４章　考　　察

第１節　自然科学的考察 …… 283
Ⅰ　新池遺跡出土遺物の胎土分析 …… 283
Ⅱ　新池遺跡の地すべり跡 …… 308
Ⅲ　新池遺跡の地山層について …… 311
Ⅳ　新池遺跡周辺における古植生とその変遷 …… 314
Ⅴ　新池遺跡等出土の木質遺物の樹種について …… 333
Ⅵ　新池遺跡埴輪窯の考古地磁気測定 …… 335
Ⅶ　新池遺跡出土鉄滓の蛍光Ｘ線分析法およびメスバウアー分光法による定性分析結果 …… 341
第２節　遺構･遺物の考察 …… 343
Ⅰ　Ａ群窯について …… 343
Ⅱ　新池窯におけるベンガラの調達について …… 354
Ⅲ　埴輪生産遺構の変遷 …… 360
Ⅳ　新池遺跡の推移 …… 379
おわりに …… 382

図　版　目　次

口　絵　1　空中写真　新池遺跡と太田茶臼山古墳
口　絵　2　空中写真　新池遺跡の埴輪窯群と工房群（西から）
口　絵　3　Ａ群窯（南西から）
口　絵　4　３号工房跡（南から）
口　絵　5　１号工房ＳＫ１
口　絵　6　１号工房ＳＫ18
口　絵　7　３号工房ＳＫ19
口　絵　8　８号住居カマド
口　絵　9　谷部全景（南東から）
口　絵　10　地山層（段丘下位の堆積層）
口　絵　11　地山層（段丘中位の堆積層）
口　絵　12　地山層（段丘上位の堆積層）
口　絵　13　古墳時代中期の埴輪
口　絵　14　古墳時代後期の埴輪
口　絵　15　大刀形埴輪（６号溝５）
口　絵　16　同左 裏面
口　絵　17　家形埴輪（２号窯 121）
口　絵　18　家形埴輪（２号窯 122）
口　絵　19　ベンガラの塗り刷毛痕（排水溝 12）
口　絵　20　粘質土に付着したベンガラ（３号工房 床面）
口　絵　21　中型円筒埴輪（３号窯 10）
口　絵　22　同左 裏面
口　絵　23　大刀形埴輪（２号窯 147）靫形埴輪（Ａ群窯灰原 32、包含層 51）
口　絵　24　中型円筒埴輪（３号窯 69）
口　絵　25　中型円筒埴輪（３号窯 34）
口　絵　26　大型円筒埴輪（２号窯 4）
口　絵　27　大型円筒埴輪（２号窯 4′）
口　絵　28　１号窯出土の岩石類
口　絵　29　赤変した頁岩（１号窯）
口　絵　30　復原武人埴輪（焼成前）
口　絵　31　復原武人埴輪（焼成後）

PLATE　1　ａ．新池埴輪製作遺跡の位置（昭和24年：空中写真）
　　ｂ．新池埴輪製作遺跡とその周辺（昭和35年：空中写真）
PLATE　2　新池遺跡の空中写真（調査前）
PLATE　3　遺構全景（空中写真）
PLATE　4　埴輪窯群・埴輪工房群
PLATE　5　Ａ群窯　全景（南西から）右から１号窯・２号窯・３号窯
PLATE　6　ａ．1b号窯　崩落状態
　　ｂ．1b号窯　遺物出土状態
PLATE　7　ａ．1a号窯　遺物出土状態
　　ｂ．1a号窯　完掘状態
PLATE　8　ａ．２号窯　崩落状態
　　ｂ．２号窯　遺物出土状態

PLATE 9 a．２号窯　完掘状態
b．２号窯　地滑り跡（天井崩落状態）
c．２号窯　地滑り跡（天井材除去後）
d．２号窯　地滑り跡（東から）
PLATE 10 a．３号窯　遺物出土状態
b．３号窯　完掘状態
PLATE 11 a．１号・２号窯　地滑り跡（西から）
b．排水溝（西溝）
c．排水溝（東溝）
PLATE 12 a．Ｂ群窯（南から）
b．Ｃ群窯（北から）
c．５号窯（断面）
d．９号窯（煙出し部断面）
PLATE 13 a．18号窯　灰原（北から）
b．18号窯　灰原（東から）
PLATE 14 a．工房群　全景（東南から）
b．工房群　全景（北東から）
PLATE 15 a．１号工房　全景（南から）
b．１号工房　全景（北から）
PLATE 16 a．１号工房　北半部 遺物出土状態（東から）
b．１号工房　北西部 遺物出土状態（南から）
PLATE 17 １号工房の土坑　１.SK1　２.SK4　３.SK6　４.SK10　５・６.SK18
７.SK8　８.SK19
PLATE 18 １号工房の土坑･周溝　１.北周溝 土師器24　２.SK17　３.北周溝 埴輪４
４.北周溝 埴輪５　５・６.SK3　７・８.SK8
PLATE 19 a．２号工房　全景（南から）
b．２号工房　全景（北から）
PLATE 20 ２号工房の柱穴・土坑　１.主柱４　２.主柱１　３.SK2　４.SK5
５.SK1　６.主柱９　７.北周溝 土器群　８.SK９
PLATE 21 a．３号工房　全景（南から）
b．３号工房　全景（北から）
PLATE 22 ３号工房の柱穴・土坑・周溝　１.主柱10　２.主柱３　３.SK11
４.SK４　５.北周溝 埴輪出土状態　６.SK19　７.SK５
PLATE 23 a．工人集落　全景（東から）
b．１号住居　全景（南から）
PLATE 24 a．２号住居　全景（南から）
b．２号住居　カマド検出状態（東から）
PLATE 25 a．３号住居　全景・３号土坑（南から）
b．４号住居　全景（南から）
PLATE 26 a．５号・６号住居　全景
b．７号住居　全景
c．８号住居　全景（いずれも南から）
PLATE 27 a．７号住居　カマド（南から）
b．８号住居　カマド（南から）
c．９号住居　全景（南から）
d．10号･11号･12号住居　全景（東から）
PLATE 28 a．13号住居　全景（南から）
b．14号住居　全景（南から）

c．14号住居　カマド検出状態
PLATE 29 a．15号住居　全景（南から）
b．１号溝　土器溜（南から）
c．11号土坑（西から）
PLATE 30 a．新池古墳　全景（南から）
b．石室
c．石室（棺台除去後）
PLATE 31 a．開析谷　全景（南西から）
b．開析谷　木棺出土状態（北から）
PLATE 32 a．谷部　全景（北西から）
b．谷部　全景（南西から）
PLATE 33 a．12号土坑（東南から）
b．13号土坑（北から）
c．14号土坑（南から）
d．15号土坑（東から）
e．１号井戸　全景
f．１号井戸（東から）
PLATE 34 a．建物群　近景（南群・西南から）
b．３号建物　全景（西から）
PLATE 35 a．17号土坑（南から）
b．２号土器棺（西から）
PLATE 36 a．14号建物　全景（東から）
b．20号建物　全景（西から）
PLATE 37 a．３号井戸
b．18号土坑（南から）
PLATE 38 a．建物群　近景（北群・東から）
b．水汲み場　大甕検出状態
c．水汲み場　復原状況（北東から）
PLATE 39 A群窯　1a号窯 円筒埴輪
PLATE 40 A群窯　1a号窯 円筒埴輪 朝顔形埴輪
PLATE 41 A群窯　1a号窯 円筒埴輪 朝顔形埴輪　２号窯 円筒埴輪
PLATE 42 A群窯　２号窯 円筒埴輪
PLATE 43 A群窯　２号窯 円筒埴輪 朝顔形埴輪　３号窯 円筒埴輪
PLATE 44 A群窯　３号窯 円筒埴輪
PLATE 45 A群窯　３号窯 円筒埴輪
PLATE 46 A群窯　３号窯 円筒埴輪 朝顔形埴輪
PLATE 47 A群窯　排水溝（西溝）円筒埴輪 朝顔形埴輪
PLATE 48 A群窯　排水溝（東溝）円筒埴輪　1b号窯 土師器 鉢 甕
２号窯 土師器 壷　包含層 土師器 甕 鉢
PLATE 49 a．A群窯　1a号窯 円筒埴輪
b．A群窯　1a号窯 円筒埴輪
PLATE 50 a．A群窯　1a号窯 円筒埴輪
b．A群窯　1a号窯 朝顔形埴輪
PLATE 51 a．A群窯　1a号窯 ヘラ記号 形象埴輪 家 その他
b．A群窯　1b号窯 円筒埴輪 朝顔形埴輪
PLATE 52 a．A群窯　２号窯 円筒埴輪
b．A群窯　２号窯 円筒埴輪
PLATE 53 a．A群窯　２号窯 円筒埴輪

b．A群窯　2号窯 円筒埴輪
PLATE 54 a．A群窯　2号窯 円筒埴輪
b．A群窯　2号窯 円筒埴輪
PLATE 55 a．A群窯　2号窯 円筒埴輪
b．A群窯　2号窯 朝顔形埴輪
PLATE 56 a．A群窯　2号窯 ヘラ記号 形象埴輪
b．A群窯　2号窯 ヘラ記号 形象埴輪 家 盾 その他
PLATE 57 a．A群窯　2号窯 形象埴輪 家
b．A群窯　2号窯 形象埴輪 家 盾 靫 蓋 その他
PLATE 58 a．A群窯　2号窯 形象埴輪 靫 大刀
b．A群窯　2号窯 形象埴輪 草摺
PLATE 59 a．A群窯　3号窯 円筒埴輪
b．A群窯　3号窯 円筒埴輪
PLATE 60 a．A群窯　3号窯 円筒埴輪
b．A群窯　3号窯 円筒埴輪
PLATE 61 a．A群窯　3号窯 円筒埴輪
b．A群窯　3号窯 円筒埴輪
PLATE 62 a．A群窯　3号窯 朝顔形埴輪
b．A群窯　3号窯 ヘラ記号 形象埴輪 家 大刀 蓋 その他
PLATE 63 a．A群窯　1a号窯 土師器 高坏 丹塗土器　1b号窯 土師器 壷
2号窯 土師器 壷 高坏 甕 口縁部　3号窯 土師器 高坏 甕
b．A群窯　3号窯　円筒埴輪 タガ　b′ 同上 裏面
c．A群窯　1号窯 岩石 天井材　2号窯 壁材 天井材　3号窯 天井材
PLATE 64 a．A群窯　片面のみ風化が顕著な埴輪片
b．同上 裏面
PLATE 65 a．A群窯　排水溝（西溝）円筒埴輪 朝顔形埴輪 形象埴輪
（東溝）円筒埴輪 朝顔形埴輪 ヘラ記号 土師器 甕
b．A群窯　排水溝（西溝）円筒埴輪　（東溝）円筒埴輪
PLATE 66 a．A群窯　1号土坑 円筒埴輪
b．A群窯　1号土坑 円筒埴輪 壷形埴輪 朝顔形埴輪 形象埴輪 草摺 靫
ピット1 円筒埴輪 朝顔形埴輪　ピット2 円筒埴輪 朝顔形埴輪
ピット4 円筒埴輪　ピット8 円筒埴輪
PLATE 67 a．A群窯　灰原 円筒埴輪 朝顔形埴輪 ヘラ記号
b．A群窯　灰原 円筒埴輪 朝顔形埴輪
PLATE 68 a．A群窯　灰原 形象埴輪 靫 大刀 冑 草摺 蓋 その他 土師器 壷 高坏
b．A群窯　包含層 円筒埴輪 朝顔形埴輪
PLATE 69 a．A群窯　包含層 朝顔形埴輪
b．A群窯　包含層 ヘラ記号 形象埴輪 草摺 蓋 その他
PLATE 70 a．A群窯　包含層 形象埴輪 家 盾 靫 冑 その他
b．布目痕のある円筒埴輪　3号窯　17号窯
c．B群窯　6号・7号窯 円筒埴輪
PLATE 71 a．B群窯　4号～7号窯 円筒埴輪 朝顔形埴輪 形象埴輪 蓋 人物
b．B群窯　6号～8号窯 円筒埴輪 ヘラ記号 形象埴輪 蓋
PLATE 72 C群窯　13号・14号窯 形象埴輪 人物
PLATE 73 a．C群窯　13号・14号窯 形象埴輪 家
b．C群窯　17号窯 円筒埴輪　18号窯 円筒埴輪
PLATE 74 a．C群窯　9号窯 円筒埴輪 ヘラ記号
b．C群窯　9号窯 円筒埴輪 朝顔形埴輪 ヘラ記号 形象埴輪 盾 その他

b．7b号溝 ヘラ記号 形象埴輪 家 盾 靫 蓋 その他
PLATE 127 a．7b号溝 形象埴輪 盾 靫 蓋 その他 土師器 鉢 高坏 縄文土器
b．８号溝 円筒埴輪
PLATE 128 a．８号溝 円筒埴輪
b．８号溝 ヘラ記号 形象埴輪 家 盾 甲冑 大刀 その他
土師器 鉢 高坏 甕 縄文土器
PLATE 129 a．５号溝 円筒埴輪　包含層 円筒埴輪 焼土塊
b．５号溝 朝顔形埴輪　包含層 朝顔形埴輪
PLATE 130 a．５号溝 土師器 壷 高坏 甕　１号落ち込み 土師器 甕
包含層 須恵器 坏身 土師器 壷 甕
b．６号溝 円筒埴輪 形象埴輪 盾 蓋 土師器 高坏 甕　沼沢池 土師器 甕
包含層 ヘラ記号 形象埴輪 盾 靫 動物 移動式カマド
PLATE 131 a．包含層 ヘラ記号 形象埴輪 家 靫 蓋 その他　Ａ群窯　包含層 形象埴輪 盾
b．包含層 ヘラ記号 形象埴輪 盾 靫 草摺 蓋 人物 その他 須恵器 甕
丹塗土器 弥生土器 鉢 移動式カマド　Ａ群窯　包含層 土師器 甕 壷
PLATE 132 開析谷 円筒埴輪　律令期集落 新羅土器 大甕 塼
PLATE 133 a．確認調査 円筒埴輪 ヘラ記号 形象埴輪 草摺 頁岩
b．確認調査 形象埴輪 家 盾 鞆 蓋 人物
PLATE 134 新池遺跡 ヘラ記号 刺突痕　今城塚古墳 ヘラ記号
PLATE 135 太田茶臼山古墳 円筒埴輪 朝顔形埴輪 形象埴輪 家
PLATE 136 花粉化石(1)
PLATE 137 花粉化石(2)
PLATE 138 花粉化石(3)
PLATE 139 花粉化石(4)
PLATE 140 木材の樹種(1)
PLATE 141 木材の樹種(2)

図　面　目　次

図　1　三島地方の遺跡分布図 …… 2
図　2　三島平野の旧石器時代遺跡分布図 …… 4
図　3　三島平野の縄文時代遺跡分布図 …… 7
図　4　三島平野の弥生時代遺跡分布図 …… 9
図　5　アメリカ式石鏃 …… 11
図　6　三島平野の古墳時代遺跡分布図 …… 13
図　7　現況図および確認調査トレンチ位置図 …… 17
図　8　各トレンチ出土の円筒埴輪類１～10 …… 18
図　9　各トレンチ出土のヘラ記号・形象埴輪類11～22 …… 19
図　10　調査区割図 …… 21
図　11　円筒埴輪模式図 …… 29
図　12　中型Ⅰ類円筒埴輪の分類 …… 30
図　13　円筒埴輪口縁部分類図 …… 30
図　14　Ｂ種ヨコハケの細分 …… 30
図　15　円筒埴輪タガ分類図 …… 31
図　16　朝顔形埴輪口縁部分類図 …… 31
図　17　Ａ群窯　平面図・断面図 …… 35
図　18　１号窯　平面図 …… 36
図　19　１号窯　縦断面図 …… 37
図　20　１号窯　横断面図 …… 38
図　21　1a号窯　円筒埴輪1･2 …… 40
図　22　1a号窯　円筒埴輪3～5･8～10 …… 41
図　23　1a号窯　円筒埴輪6･7･11～22 …… 42
図　24　1a号窯　円筒埴輪23～40 …… 44
図　25　1a号窯　朝顔形埴輪41～43 …… 45
図　26　1a号窯　朝顔形埴輪44～55 …… 46
図　27　1a号窯　ヘラ記号56～60　形象埴輪　家61　その他62～67 …… 46
図　28　1b号窯　円筒埴輪68～78　朝顔形埴輪79～83 …… 47
図　29　1a号窯　土師器　高坏86　丹塗土器89･90　1b号窯　土師器　壷84　鉢85　甕87･88 …… 48
図　30　２号窯　平面図・縦断面図 …… 51
図　31　２号窯　横断面図 …… 52
図　32　２号窯　円筒埴輪1～3 …… 53
図　33　２号窯　円筒埴輪4 …… 54
図　34　２号窯　円筒埴輪5～19 …… 55
図　35　２号窯　円筒埴輪20～32 …… 56
図　36　２号窯　円筒埴輪33～50 …… 57
図　37　２号窯　円筒埴輪51～62 …… 58
図　38　２号窯　円筒埴輪63～73 …… 59
図　39　２号窯　円筒埴輪74～86 …… 60
図　40　２号窯　朝顔形埴輪87 …… 60
図　41　２号窯　朝顔形埴輪88～105 …… 61
図　42　２号窯　ヘラ記号106～120 …… 62
図　43　２号窯　形象埴輪　家121～131 …… 63

図 44 家形埴輪Ⅰ類文様帯復原図 …… 64
図 45 2号窯 形象埴輪 盾132～137 靫138～146 大刀147 …… 65
図 46 2号窯 形象埴輪 草摺148～163 蓋164・165 その他166～170 …… 66
図 47 草摺形埴輪文様復原図 …… 67
図 48 2号窯 土師器 壷171～173 高坏174～176 甕177 口縁部178 …… 67
図 49 3号窯 平面図・縦断面図 …… 69
図 50 3号窯 横断面図 …… 70
図 51 3号窯 円筒埴輪1・2 …… 71
図 52 3号窯 円筒埴輪3～13 …… 72
図 53 3号窯 円筒埴輪14～28 …… 73
図 54 3号窯 円筒埴輪29・30 …… 74
図 55 3号窯 円筒埴輪31～38 …… 75
図 56 3号窯 円筒埴輪39～55 …… 76
図 57 3号窯 円筒埴輪 タガ56～61 …… 77
図 58 3号窯 円筒埴輪62～67 …… 77
図 59 3号窯 円筒埴輪68～83 …… 78
図 60 3号窯 円筒埴輪84～89 …… 79
図 61 3号窯 朝顔形埴輪90～93 …… 80
図 62 3号窯 朝顔形埴輪94～113 …… 81
図 63 3号窯 ヘラ記号114～121 形象埴輪 家122・123 大刀124 蓋125～128 その他129～132 …… 82
図 64 3号窯 土師器 高坏133～136 甕137 …… 83
図 65 排水溝 …… 84
図 66 1号土坑 …… 85
図 67 排水溝(西溝) 円筒埴輪1～11 …… 86
図 68 排水溝(西溝) 朝顔形埴輪12～14 …… 87
図 69 排水溝(西溝) 形象埴輪15・16 …… 87
図 70 排水溝(東溝) 円筒埴輪17～24 朝顔形埴輪25 …… 88
図 71 排水溝(東溝) ヘラ記号26 …… 88
図 72 1号土坑 円筒埴輪1～24 壷形埴輪25 朝顔形埴輪26・27 形象埴輪 草摺28 靫29
ピット1 円筒埴輪30 朝顔形埴輪31 ピット2 円筒埴輪32・33 朝顔形埴輪34
ピット4 円筒埴輪35 …… 89
図 73 灰原 円筒埴輪1～16 朝顔形埴輪17～28 …… 91
図 74 灰原 ヘラ記号29 形象埴輪 靫30～32 大刀33・34 冑35 草摺36 蓋37～41 その他42～45 …… 92
図 75 排水溝(東溝) 土師器 甕27 灰原 土師器 壷46・47 高坏48 …… 92
図 76 包含層 円筒埴輪1～17 朝顔形埴輪18～32 …… 94
図 77 包含層 ヘラ記号33～40 形象埴輪 家41～46 盾47～50 靫51～54 …… 95
図 78 包含層 形象埴輪 冑55 草摺56～64 蓋65～69 その他70～75 …… 96
図 79 包含層 土師器 甕76 鉢77 弥生土器 甕78 壷79 …… 97
図 80 B群窯・C群窯 位置図 …… 98
図 81 5号窯・8号窯 …… 99
図 82 4号～8号窯 円筒埴輪1～14・23～26 朝顔形埴輪15～17 …… 100
図 83 4号～8号窯 ヘラ記号18 形象埴輪 蓋19～21 その他22 …… 101
図 84 9号窯 煙出し部 …… 102
図 85 18号窯 平面図・縦断面図(確認調査) …… 103
図 86 18号窯 横断面図 …… 104
図 87 18号窯 埴輪溜 …… 106
図 88 9号窯 円筒埴輪1～12 朝顔形埴輪13・14 …… 107
図 89 9号窯 ヘラ記号15・16 形象埴輪 盾17～19 その他20 …… 108

図 90 10号～16号窯 円筒埴輪1～15 朝顔形埴輪16 …… 109
図 91 10号～16号窯 ヘラ記号17・18 形象埴輪 家19～21 …… 110
図 92 10号～16号窯 形象埴輪 盾22～31 蓋32 大刀33・34 人物35～37 動物38・39 その他40・41 …… 111
図 93 17号窯 円筒埴輪1～26 …… 113
図 94 17号窯 円筒埴輪27～32 …… 114
図 95 17号窯 ヘラ記号33 形象埴輪 家34・35 盾36～51 …… 114
図 96 18号窯 円筒埴輪1 …… 116
図 97 18号窯 円筒埴輪2～4 …… 117
図 98 18号窯 土師器 甕5 …… 118
図 99 工房群 位置図 …… 119
図 100 1号工房 平面図 …… 120
図 101 1号工房 縦断面図 …… 121
図 102 1号工房 土坑 …… 122
図 103 1号工房 土坑・周溝 …… 123
図 104 1号工房 円筒埴輪1～5 …… 125
図 105 1号工房 円筒埴輪6～19 朝顔形埴輪20・21 …… 126
図 106 1号工房 須恵器 甕22・23 …… 127
図 107 1号工房 土師器 高坏24～31 甕32～41 …… 128
図 108 1号工房 鉄製品43 …… 128
図 109 2号工房 平面図 …… 129
図 110 2号工房 断面図 …… 130
図 111 2号工房 土坑・周溝 …… 131
図 112 2号工房 円筒埴輪1～8 …… 133
図 113 2号工房 円筒埴輪9～26 朝顔形埴輪27～29 壷形埴輪30 …… 134
図 114 2号工房 ヘラ記号31 形象埴輪 盾32 蓋33～41 …… 135
図 115 2号工房 形象埴輪 蓋42～53 その他54～56 …… 136
図 116 2号工房 形象埴輪 蓋(42～53)復原図 …… 136
図 117 2号工房 土師器 高坏57～59 甕60～66 …… 137
図 118 2号工房 鉄製品67～69 …… 138
図 119 3号工房 平面図 …… 138
図 120 3号工房 断面図 …… 139
図 121 3号工房 土坑・周溝 …… 141
図 122 3号工房 円筒埴輪1～6 …… 142
図 123 3号工房 円筒埴輪7～27 …… 143
図 124 3号工房 形象埴輪 蓋28・29 …… 143
図 125 3号工房 須恵器 甕30 土師器 壷31 高坏32 甕33～44 …… 144
図 126 3号工房 粘土塊45 …… 145
図 127 3号工房 鉄製品46～49 …… 146
図 128 3号工房 排水溝 円筒埴輪50 形象埴輪 蓋51 …… 146
図 129 包含層 a群 円筒埴輪1～7 …… 147
図 130 包含層 a群 形象埴輪 蓋8～14 …… 147
図 131 包含層 a群 土師器 壷15 鉢16 …… 147
図 132 包含層 b群 円筒埴輪17～29 …… 148
図 133 包含層 b群 ヘラ記号30・31 形象埴輪 蓋32 …… 149
図 134 包含層 c群 円筒埴輪33～45・48～53 …… 150
図 135 包含層 c群 形象埴輪 盾46・55～58 蓋47・60 ヘラ記号(動物画)54 その他59・61 …… 151
図 136 工人集落 位置図 …… 152
図 137 1号住居 平面図・断面図 …… 154

図 138　1号住居 東溝 遺物出土状態 …… 154
図 139　1号住居 須恵器 坏蓋1・2 坏身3～7 高坏蓋8 甕9
土師器 鉢10 高坏11～14 甕15 円筒埴輪16 …… 155
図 140　2号住居 平面図・断面図 …… 156
図 141　2号住居 カマド(上)・周溝北西部(下) …… 157
図 142　2号住居 須恵器 瑕1 土師器 高坏2～12 甕13・14 埴輪15 …… 158
図 143　2号住居 滑石製品16 …… 159
図 144　2号住居 砥石17～19 …… 159
図 145　3号住居 平面図・断面図 …… 160
図 146　3号住居 土師器 鉢1 高坏2～6 甕7・8 円筒埴輪9 …… 160
図 147　4号住居 平面図・断面図 …… 161
図 148　4号住居 ピット1・2(上)・カマド(下) …… 162
図 149　4号住居 須恵器 坏身1・2 壷3 瑕4 土師器 壷5・6 高坏7・8 甕9～12 …… 163
図 150　5号・6号住居 平面図・断面図 …… 164
図 151　5号住居 須恵器 坏蓋1 坏身2～5 高坏蓋6 瑕7 甕8
土師器 高坏9～12 甕13・14 円筒埴輪15・16
6号住居 土師器 高坏18・19 …… 165
図 152　5号住居 砥石17 …… 165
図 153　7号住居 平面図・断面図 …… 166
図 154　7号住居 カマド …… 166
図 155　7号住居 土師器 高坏1 甕2・3 甑4・5 …… 167
図 156　8号住居 平面図・断面図 …… 168
図 157　8号住居 北周溝東半(上)・カマド(中)・北周溝西半(下) …… 169
図 158　8号住居 須恵器 坏蓋1・2 坏身3・4 壷5 土師器 鉢6 高坏7～11 甕12・13 甑14
皿状土製品15 円筒埴輪16
住居内土坑 土師器 高坏17 甕18～21 …… 170
図 159　9号住居 平面図・断面図 …… 172
図 160　9号住居 須恵器 坏蓋1 壷2 土師器 高坏3・4 甕5～10 …… 172
図 161　10号住居 平面図・断面図 …… 173
図 162　11号・12号住居 平面図・断面図 …… 173
図 163　12号住居 カマド(左)・西周溝(右) …… 174
図 164　12号住居 土師器 高坏1・2 甕3～7 …… 174
図 165　13号住居 平面図・断面図 …… 175
図 166　14号住居 平面図・断面図 …… 176
図 167　14号住居 カマド・土坑 …… 176
図 168　14号住居 土師器 高坏1～8 甕9・10 円筒埴輪11 …… 177
図 169　15号住居 平面図・断面図 …… 178
図 170　1号溝 土器溜 平面図・断面図 …… 179
図 171　1号溝 須恵器 坏蓋1～11 坏身12～15 高坏蓋16 瑕17 土師器 壷18～24 …… 181
図 172　1号溝 土師器 高坏25～49 …… 182
図 173　1号溝 土師器 高坏50～72 …… 183
図 174　1号溝 土師器 甕73～83 甑84～89 …… 184
図 175　1号溝 円筒埴輪90～96 …… 185
図 176　1号溝 砥石97 …… 185
図 177　1号溝 半環状形石製品98 …… 185
図 178　2号溝 平面図・断面図 …… 186
図 179　2号溝 須恵器 坏蓋1～10 坏身11～18 壷19 瑕20 甕21 …… 187
図 180　2号溝 土師器 壷22・23 鉢24 高坏25～34 甕35～39 甑40・41 …… 188

図 181　3号溝 平面図・断面図 …… 189
図 182　3号溝 須恵器 坏身1 甕2・3 土師器 高坏4～10 甕11・12 底部13 …… 190
図 183　4号溝(左)・2号土坑(右) 平面図・断面図 …… 191
図 184　4号溝 須恵器 坏蓋1　2号土坑 須恵器 坏身1～4 瑳5 土師器 鉢6 高坏7・8 甕9 …… 191
図 185　3号土坑 平面図・断面図 …… 192
図 186　4号・5号土坑 平面図・断面図 …… 192
図 187　3号土坑 須恵器 坏蓋1 土師器 高坏2～4
4号土坑 須恵器 坏蓋1 坏身2 甕3・4 土師器 高坏5～13 甕14～16
円筒埴輪17 朝顔形埴輪18
5号土坑 須恵器 坏身1 …… 193
図 188　3号土坑 砥石5 …… 194
図 189　6号・7号・8号・9号・10号土坑 平面図・断面図 …… 195
図 190　6号土坑 須恵器 坏蓋1 坏身2・3 土師器 高坏4～12 甕13～15
7号土坑 須恵器 坏蓋1　8号土坑 須恵器 坏身1
9号土坑 須恵器 坏蓋1・2 坏身3 瑳4 甕5 土師器 高坏6　10号土坑 須恵器 椀1 …… 196
図 191　6号土坑 鉄滓16 …… 197
図 192　10号土坑 砥石2 …… 198
図 193　11号土坑 平面図・断面図 …… 199
図 194　11号土坑 須恵器 高坏1 土師器 壷2 高坏3～5 甕6・7 …… 199
図 195　包含層 須恵器 坏蓋1～5 坏身6～8 甕9 甑10 …… 201
図 196　包含層 土師器 壷11 高坏12～15 甕16 甑17 …… 202
図 197　包含層 円筒埴輪18～25 朝顔形埴輪26 …… 203
図 198　包含層 ヘラ記号27・28 形象埴輪 草摺29 その他30 …… 203
図 199　包含層 鐸形土製品31 …… 204
図 200　包含層 砥石32・33 …… 204
図 201　新池古墳 平面図 …… 205
図 202　新池古墳 石室上面図 …… 206
図 203　新池古墳 石室平面図・立面図 …… 207
図 204　新池古墳 土層断面図 …… 208
図 205　新池古墳 周溝 須恵器 坏蓋1・2 坏身3 壷4 …… 209
図 206　新池古墳 石室内遺物出土状態 …… 210
図 207　新池古墳 石室 須恵器 高坏5 提瓶6 …… 210
図 208　新池古墳 鉄製品 刀子7～10 刀装具11 鉄鏃12～21 釘22 鋳造鉄斧25 …… 211
図 209　開析谷 位置図 …… 213
図 210　開析谷 横断面図 …… 214
図 211　開析谷 木棺出土状態 平面図・縦断面図 …… 214
図 212　開析谷 木棺 蓋材1～6 方形板9 …… 215
図 213　開析谷 木棺 底側板7・8 …… 216
図 214　開析谷 円筒埴輪10 …… 217
図 215　包含層 旧石器時代のナイフ形石器1～10 縦長剥片11～15 …… 219
図 216　包含層 旧石器時代の翼状剥片16～19 翼状剥片石核20・21 剥片23・24 …… 221
図 217　包含層 旧石器時代の叩き石25～27 …… 222
図 218　包含層 縄文時代の石鏃1～15 削器17 弥生時代の石鏃16 …… 224
図 219　谷部 位置図 …… 226
図 220　谷部 南壁・自然流路断面図 …… 227
図 221　土坑 平面図・断面図 …… 228
図 222　12号土坑 土師器 甕1　16号土坑 土師器 壷1 …… 229
図 223　1号落ち込み 土師器 壷1・2 高坏3 甕4 …… 231

図 224　沼沢池 土師器 甕1・2 …… 232
図 225　5号溝 円筒埴輪1・2 朝顔形埴輪3～5 …… 233
図 226　5号溝 土師器 壷6・7 高坏8～17 甕18～21 …… 234
図 227　6号溝 ヘラ記号1 形象埴輪 盾2 蓋3・4 大刀5 …… 236
図 228　6号溝 土師器 高坏6～8 甕9・10 …… 237
図 229　7a号溝 円筒埴輪1～6・16・17 朝顔形埴輪7 …… 239
図 230　7a号溝 形象埴輪 盾8・9 靫10・11 甲冑12 人物13・14 その他15 …… 240
図 231　7a号溝 須恵器 甕18 土師器 壷19・20 高坏21～34 …… 241
図 232　7a号溝 土師器 甕35～40 …… 242
図 233　7b号溝 円筒埴輪1～9 朝顔形埴輪10～13 …… 244
図 234　7b号溝 ヘラ記号14・15 形象埴輪 家16～19 盾20～25・41・42 靫26～28
蓋29～32・43 その他33・34・44 …… 245
図 235　7b号溝 円筒埴輪35～40 …… 246
図 236　7b号溝 須恵器 坏蓋45・46 坏身47 土師器 壷48 鉢49 高坏50～60 甕61～63
縄文土器64 …… 247
図 237　7b号溝 移動式カマド65・66　包含層 移動式カマド50・51 …… 248
図 238　1号井戸 平面図・立面図・断面図 …… 250
図 239　1号井戸 円筒埴輪1 …… 251
図 240　1号井戸 円筒埴輪1 展開模式図 …… 252
図 241　1号井戸 円筒埴輪2 …… 253
図 242　8号溝 埴輪溜 遺物出土状態・断面図 …… 255
図 243　8号溝 円筒埴輪1～16 …… 256
図 244　8号溝 円筒埴輪17～26 …… 257
図 245　8号溝 円筒埴輪27～30 …… 258
図 246　8号溝 朝顔形埴輪31 …… 258
図 247　8号溝 ヘラ記号32～34 形象埴輪 家35 盾38・39 甲冑40 大刀41 その他42～44 …… 259
図 248　8号溝 形象埴輪 盾36・37 …… 261
図 249　8号溝 須恵器 坏蓋45 甕46 土師器 鉢47 高坏48～50 甕51～53 縄文土器54 …… 264
図 250　包含層 円筒埴輪1～8 朝顔形埴輪9～11 …… 265
図 251　包含層 ヘラ記号12～16 形象埴輪 家17 盾18～20 靫21～23 草摺24・25
蓋26～28 人物29～31 動物32 その他33～35 …… 266
図 252　包含層 須恵器 坏身37 甕38 土師器 壷39～42 高坏43 甕44・45
丹塗土器46 弥生土器47 縄文土器 鉢48・49 …… 268
図 253　律令期集落 遺構図 …… 271
図 254　3号建物 平面図・断面図 …… 272
図 255　2号井戸 平面図・断面図 …… 272
図 256　17号土坑 平面図・断面図 …… 273
図 257　1号土器棺 平面図・断面図 …… 274
図 258　2号土器棺 平面図・断面図 …… 274
図 259　14号建物 平面図・断面図 …… 275
図 260　20号建物 平面図・断面図 …… 275
図 261　16号・17号建物 平面図・断面図 …… 276
図 262　3号井戸 平面図・断面図 …… 276
図 263　3号井戸 遺物出土状態 …… 277
図 264　18号土坑 平面図・断面図 …… 277
図 265　29号・30号建物 平面図・断面図 …… 278
図 266　水汲み場 大甕・塼出土状態 …… 278
図 267　包含層 南群　新羅土器 長頸壷1 …… 279

図 268　水汲み場 塼3 …… 279
図 269　水汲み場 須恵器 大甕2 …… 280
図 270　新池遺跡出土埴輪のRb－Sr分布図 …… 284
図 271　太田茶臼山古墳、新池遺跡(窯・工房)出土埴輪の新池群への対応 …… 285
図 272　新池群と土師ノ里・誉田白鳥群の相互識別 …… 286
図 273　１号～３号工房出土粘土のRb－Sr分布図 …… 287
図 274　工房出土粘土・地山土の新池群への対応（K,Ca,Rb,Sr因子使用） …… 287
図 275　地山土の堆積状況 …… 288
図 276　地山土のRb－Sr分布図 …… 288
図 277　地山で採取した粘土・シルト・砂・砂礫のRb－Sr分布図 …… 288
図 278　地山土のK,Ca因子の変動 …… 289
図 279　地山土のRb,Sr因子の変動 …… 289
図 280　太田茶臼山古墳出土埴輪のRb－Sr分布図 …… 290
図 281　太田茶臼山古墳出土埴輪の産地推定（K,Ca,Rb,Sr因子使用） …… 290
図 282　工人集落出土須恵器のRb－Sr分布図 …… 297
図 283　有馬条里遺跡と房谷遺跡出土土師器のRb－Sr分布図 …… 299
図 284　新屋敷東遺跡出土土師器のRb－Sr分布図 …… 299
図 285　喜沢海道間遺跡５号住居出土土師器のRb－Sr分布図 …… 299
図 286　長谷遺跡と新池遺跡出土土師器のRb－Sr分布図 …… 299
図 287　新池遺跡出土鬼高式土器の産地推定（K,Ca,Rb,Sr因子使用） …… 299
図 288　大阪陶邑群と望星里群の相互識別（K,Ca,Rb,Sr因子使用） …… 303
図 289　礼安里５号墳出土硬質土器のRb－Sr分布図 …… 304
図 290　陝川苧蒲出土硬質土器のRb－Sr分布図 …… 304
図 291　杜邱洞出土硬質土器のRb－Sr分布図 …… 304
図 292　大阪平野周辺の地形と活断層 …… 308
図 293　新池遺跡周辺の地形 …… 309
図 294　新池遺跡の地すべり跡 …… 309
図 295　新池遺跡埴輪窯の地すべり跡断面図 …… 310
図 296　新池遺跡および緑ガ丘 位置図 …… 314
図 297　新池遺跡 試料採取地点 …… 314
図 298　谷部 沼沢地 7a号溝 7b号溝の試料採取層準 …… 315
図 299　段丘部 開析谷 セクションの試料採取層準 …… 315
図 300　谷部 沼沢地の花粉ダイアグラム …… 321
図 301　谷部 7a号溝の花粉ダイアグラム …… 323
図 302　谷部 7b号溝の花粉ダイアグラム …… 323
図 303　開析谷 セクションの花粉ダイアグラム …… 325
図 304　緑ガ丘の花粉ダイアグラム …… 329
図 305　西南日本の過去2000年間の考古地磁気永年変化と新池遺跡埴輪窯跡、
工房跡の考古地磁気測定結果 …… 339
図 306　新池遺跡出土の鉄滓№１のメスバウアースペクトル …… 342
図 307　A群窯 出土埴輪の遺構間接合 …… 344
図 308　１号窯 大型円筒埴輪の出土状態 …… 349
図 309　２号窯 形象埴輪の出土状態 …… 349
図 310　３号窯 円筒埴輪13(○印) 30(黒塗)の出土状態 …… 350
図 311　A群窯 裏向きで検出した埴輪類（黒塗の部分） …… 351
図 312　A群窯 片面のみ風化が顕著な埴輪片 １号窯1 ２号窯2～10 ３号窯11 …… 352
図 313　３号窯 灰色埴輪の分布状態 …… 353
図 314　１号窯 岩石の分布状態 …… 355

図 315　１号～３号工房の土坑Ｉ類の規模 …… 364
図 316　タイプ別竪穴住居の分布 …… 366
図 317　工人集落出土土器の割合(遺構分) …… 369
図 318　太田茶臼山古墳(1) 円筒埴輪1～13 朝顔形埴輪14～16 形象埴輪 家17 …… 373
図 319　太田茶臼山古墳(2) 円筒埴輪1・2 …… 374
図 320　今城塚古墳出土円筒埴輪のヘラ記号 …… 376

表　目　次

表　1　三島地方の旧石器時代主要遺跡一覧 …… 3
表　2　三島地方出土の縄文土器型式別一覧 …… 8
表　3　三島平野の弥生遺跡一覧 …… 10
表　4　調査区別遺構一覧 …… 21
表　5　新池遺跡出土土師器主要器種一覧表(古墳時代 前期～中期) …… 33
表　6　１号窯出土の岩石一覧表 …… 49
表　7　Ｂ群埴輪窯の規模一覧表 …… 97
表　8　Ｃ群埴輪窯の規模一覧表 …… 102
表　9　工人集落 竪穴住居一覧表 …… 153
表 10　律令期集落 掘立柱建物跡一覧表 …… 270
表 11　埴輪の分析値 …… 291
表 12　粘土の分析値 …… 293
表 13　地山土の分析値 …… 295
表 14　太田茶臼山古墳出土埴輪の分析値 …… 295
表 15　新池遺跡工人集落出土須恵器、1号窯出土岩石の分析値 …… 297
表 16　鬼高式土器ほか土師器の分析値 …… 300
表 17　新羅土器の分析値 …… 302
表 18　礼安里５号墳ほか硬質土器分析値 …… 305
表 19　各母集団からのマハラノビスの汎距離の二乗値（K, Ca, Rb, Sr因子を使用） …… 306
表 20　谷部 沼沢地の産出頻度の低い花粉化石 …… 322
表 21　谷部 7a号溝の産出頻度の低い花粉化石 …… 324
表 22　谷部 7b号溝の産出頻度の低い花粉化石 …… 324
表 23　開析谷 セクションの産出頻度の低い花粉化石 …… 326
表 24　緑ガ丘の産出頻度の低い花粉化石 …… 330
表 25　新池遺跡ほかの樹種一覧 …… 334
表 26　新池遺跡1号窯の磁化測定結果 …… 337
表 27　新池遺跡2号窯の磁化測定結果 …… 337
表 28　新池遺跡3号窯の磁化測定結果 …… 338
表 29　新池遺跡1号工房 SK19の磁化測定結果 …… 338
表 30　新池遺跡2号工房 SK29の磁化測定結果 …… 338
表 31　新池遺跡3号工房 SK31の磁化測定結果 …… 338
表 32　新池遺跡 埴輪窯および工房内土坑の考古地磁気測定結果 …… 339
表 33　新池遺跡出土の鉄滓の定性分析結果 …… 342
表 34　メスバウアースペクトルのピーク位置、異性体シフト、四極子分裂および同定結果 …… 342
表 35　Ａ群窯出土埴輪のおもな属性 …… 346
表 36　窯の様相 …… 348

表 37 埴輪片の出土状態(床面) …… 351
表 38 1号窯出土岩石集計表 …… 355
表 39 岩石の赤変化の状況 …… 356
表 40 岩石の化学組成 …… 357
表 41 各埴輪窯群の比較 …… 361
表 42 工房一覧表 …… 363
表 43 工房群出土埴輪のおもな属性 …… 365
表 44 工人集落出土土器集計表 …… 368
表 45 A期・B期埴輪生産遺構の組み合わせ …… 371
表 46 新池遺跡の推移 …… 380
表 47 A群窯埴輪集計表 …… 383
表 48 埴輪観察表 …… 386

別 添 図 面

付 図 新池埴輪製作遺跡遺構全体図 …… 巻末

第１章　新池埴輪製作遺跡の位置と環境

第１節　三島の地勢と新池遺跡の位置

第２節　先史時代の三島　－新池遺跡成立前史－

第３節　古墳時代の三島と新池遺跡

第１章　新池埴輪製作遺跡の位置と環境

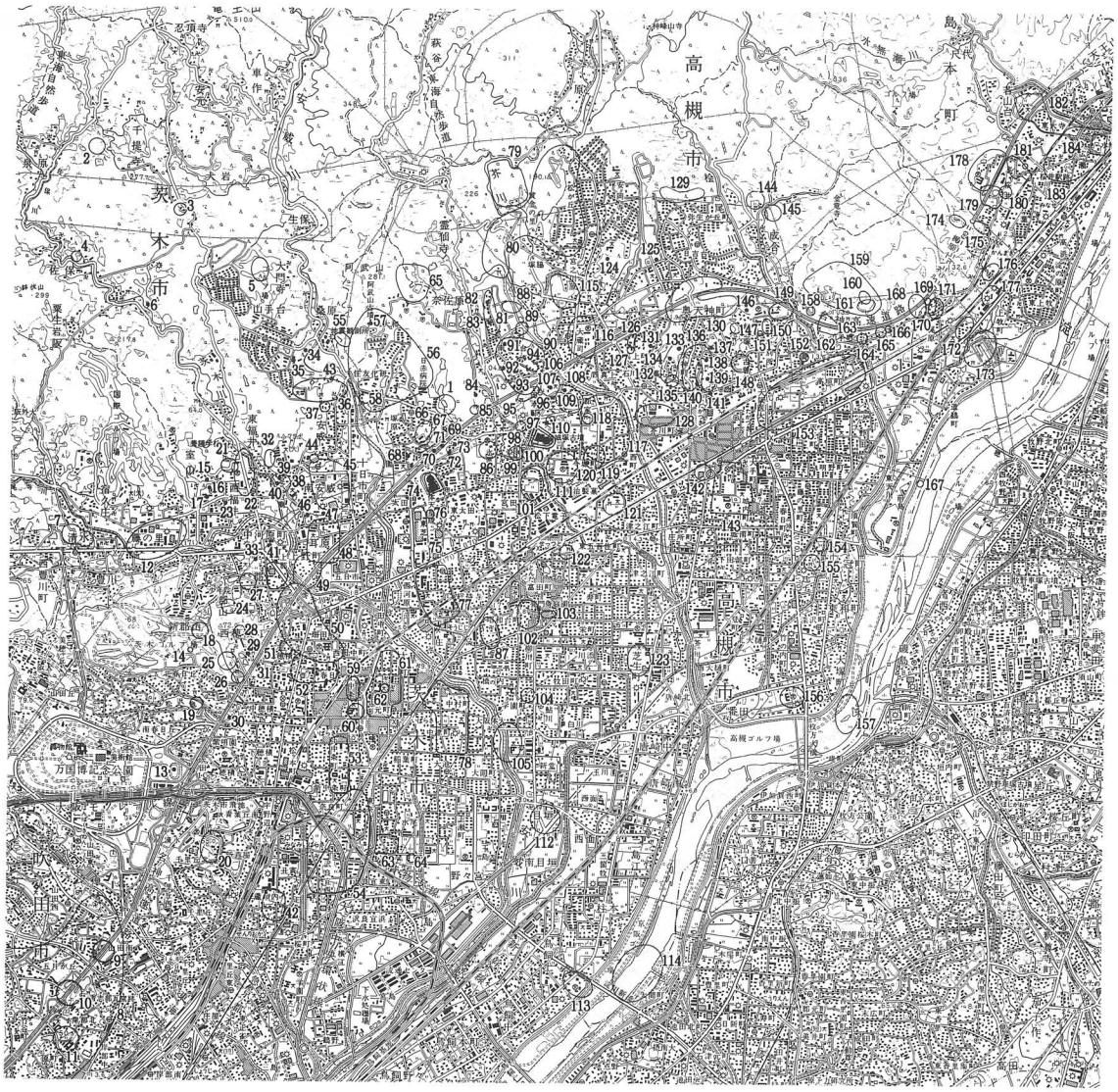
第１節　三島の地勢と新池遺跡の位置

新池埴輪製作遺跡(以下では新池遺跡と表記する)は大阪府の北東部、三島地方のほぼ中央部に位置している。「三島」の呼称は直接的には明治29年の新郡区編成時の「三島郡」によっているが、もともとは律令時代の嶋上・嶋下の両郡を胚胎した「三嶋郡(評)」に由来する。三島の範囲を現在の行政区分で示せば、摂津市、茨木市、高槻市(樫田地区を除く)、島本町の全域そして吹田市、箕面市の一部が含まれることになる。四至をかぎるのは、西が千里山丘陵、東が天王山の麓、そして南は淀川であるが、北については北摂山地の山間で京都府と接するところまでがその領域になっている(図1・PLATE 1a)。

三島の地勢は中央部を東西につらぬく真上(まかみ)断層帯によって北側の山間部と南側の平野部に二分され、極端な北高南低の地形になっている。具体的には北半部の大半が古生代の丹波層群からなる標高約150m～700mの北摂山地で占められ、その南側には標高約30m～200mの大阪層群で形成された丘陵(千里山丘陵、奈佐原・南平台丘陵、高槻丘陵)が東西にならんでとりついている。真上断層は三島の西部では北摂山地と千里山丘陵のあいだにあって山地と丘陵を分断しているが、東部では丘陵部の南縁をたち切るかたちでとおることから、平野部との落差がきわだち、その境はかなり顕著である。

南半部の平野はおもに段丘と沖積地からなっている。段丘ではとくに奈佐原・南平台丘陵の麓からひろがる標高約10m～30m、面積約750haの低位段丘(富田台地)の発達がめだち、中位段丘については丘陵の縁辺や開析谷の周囲に小規模なものが認められる程度である。また南半部の大半を占める標高約３m～10mの沖積平野は、北摂山地から流下するいくつもの中小河川(佐保川、安威(あい)川、女瀬(にょぜ)川、芥川、桧尾川、水無瀬(みなせ)川)によってかたちづくられた沃野になっている。その形勢は、北側が丘陵のあいだにクサビ状の谷底平野と中・小の扇状地からなるのに対し、南側は大阪平野の一画をなす淀川低地の広大な低湿地がひろがっている。ただ淀川北岸における豊島郡とのあいだには自然地形による明確な境界はみられず、千里山丘陵の麓から南につきだしている吹田砂堆のわずかな高まりがその西限になる。三島の沃野を概算すれば、およそ100km^{2}にもなる。

新池遺跡は高槻市の土室(はむろ)地区にあって、ちょうど奈佐原丘陵の西側に形成された小規模な谷とその東側にある東西120m・南北240mの中位段丘上に展開している。遺跡の範囲は約40,000m^{2}で、標高は47～62mである。終戦後の一時期、段丘面の大半が畑地として開墾され、縦横



1 **史跡今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡**　2 泉原遺跡　3 国見遺跡　4 庄ノ本遺跡　5 大門寺古墳群　6 クルス山中世墳墓　7 宿久庄西遺跡
8 釈迦ケ池窯跡群　9 史跡七尾瓦窯跡　10 史跡吉志部瓦窯跡　11 吉志部遺跡　12 宿久庄遺跡　13 山田銅鐸出土地　14 茨木ゴルフ場内窯跡　15 紫金山古墳
16 青松塚古墳　17 南塚古墳　18 地蔵池南遺跡　19 松沢池遺跡　20 新芦屋遺跡　21 新屋古墳群　22 西福井遺跡　23 海北塚古墳　24 郡山古墳群　25 弁天山遺跡
26 見付山遺跡　27 郡山遺跡　28 上穂積山遺跡　29 上穂積神社西古墳　30 上寺山古墳　31 見付山古墳　32 真龍寺古墳群　33 茶臼塚古墳　34 初田１号墳
35 初田２号墳　36 安威古墳群　37 安威寺跡　38 将軍山古墳群　39 将軍山古墳（１号墳）　40 将軍山古墳（２号墳）　41 中河原遺跡　42 常楽寺跡　43 長ケ淵古墳群
44 大日寺跡　45 安威遺跡　46 鼻摺古墳（耳原方形墳）　47 耳原古墳　48 耳原遺跡　49 五日市遺跡　50 郡・倍賀遺跡　51 穂積廃寺　52 春日遺跡　53 中条遺跡
54 東奈良遺跡　55 桑原古墳群　56 塚原古墳群　57 **史跡阿武山古墳**　58 塚原遺跡　59 上中条遺跡　60 駅前遺跡　61 茨木遺跡　62 茨木城跡　63 玉串遺跡
64 西方浄土寺跡　65 片ケ谷古墳群　66 上土室遺跡　67 土室遺跡　68 石山古墳　69 番山古墳　70 二子山古墳　71 土保山古墳　72 高槻古墳　73 石塚古墳
74 **継体天皇陵**（太田茶臼山古墳）　75 太田遺跡　76 太田廃寺　77 総持寺下層遺跡　78 牟礼遺跡　79 芥川城跡　80 塚脇古墳群　81 墓谷古墳群　82 弁天山Ｄ４号墳
83 弁天山Ｄ２号墳　84 闘鶏山古墳　85 氷室瓦器散布地　86 ツゲノ遺跡・ツゲノ古墳群　87 中城遺跡　88 唐井谷古墳群　89 尼ケ谷古墳群　90 弁天山古墳群
91 弁天山Ｃ１号墳　92 弁天山Ｂ１号墳　93 弁天山Ａ１号墳　94 郡家古墳群　95 岡本山古墓群　96 郡家車塚古墳　97 前塚古墳　98 上氷室遺跡　99 氷室遺跡
100 **史跡今城塚古墳**　101 宮田遺跡　102 富田遺跡　103 教行寺遺跡　104 鮎川遺跡　105 溝咋遺跡　106 上野遺跡　107 御坊山古墳　108 郡家本町遺跡
109 芥川廃寺瓦窯跡　110 狐塚古墳群　111 郡家今城遺跡　112 目垣遺跡　113 柱本南遺跡　114 柱本遺跡　115 宮ノ川原遺跡　116 大蔵寺遺跡
117 **史跡嶋上郡衙跡**（郡家川西遺跡）　118 **史跡嶋上郡衙跡附寺跡**（芥川廃寺）　119 川西古墳群　120 一本木古墳　121 津ノ江南遺跡　122 東五百住遺跡
123 芝生遺跡　124 安岡寺古墳　125 芝谷遺跡　126 真上古墳群　127 真上東遺跡　128 芥川遺跡　129 成合琴堂窯跡　130 古曽部・芝谷遺跡　131 真上安祥寺古墳
132 慈願寺山遺跡　133 真上古墳　134 慈願寺山古墳　135 慈願寺山古墳群　136 天神山遺跡　137 伊勢寺古墳　138 中将塚古墳　139 宿弥塚古墳
140 天神山銅鐸出土地　141 昼神車塚古墳　142 上田部遺跡　143 高槻城・高槻城下層遺跡　144 悉檀寺跡　145 成合遺跡　146 羅王山古墳　147 宮山遺物散布地
148 古曽部南遺跡　149 紅茸山遺跡・紅茸山古墳群　150 奥坂古墳群　151 古曽部焼窯跡　152 安満北遺跡　153 安満遺跡　154 天川遺跡　155 中寺遺跡
156 大塚西遺跡　157 大塚遺跡　158 安満山遺物散布地　159 安満山古墳群　160 萩ノ庄古墳群　161 萩ノ庄遺跡　162 磐手杜古墳群　163 法照寺古墳
164 法照寺瓦窯跡　165 丸山古墳群　166 萩ノ庄瓦窯跡　167 高槻城石垣根石発見地　168 梶原古墳群　169 梶原瓦窯跡　170 梶原寺跡　171 梶原寺下層遺跡
172 梶原南遺跡　173 上牧遺跡　174 神内古墳群　175 源吾山古墳群　176 神内遺跡　177 梶原遺跡　178 桜井御所跡　179 越谷遺跡　180 御所池瓦窯跡
181 桜井遺跡　182 水無瀬庄跡　183 広瀬遺跡　184 水無瀬離宮跡

図１　三島地方の遺跡分布図　　国土地理院発行（京都西南部・大阪東北部）　１：100000

に用水路が設けられたために、遺構の多くが削平・寸断されていたのは残念なことであった。調査直前の現況写真(PLATE 2)にかすかにみえる方形区画はその名残である。遺跡からの眺望は南西側に大きくひらけており、南は三島平野の西半部から淀川をこえて生駒山や河内平野がみとおされ、やや西寄りには千里丘陵のむこうに大阪湾がのぞまれる。またすぐちかくでは眼下に太田茶臼山古墳(口絵1)がとらえられ、西には阿武山から麓の塚原にくだる弓なりの稜線がみられる。ただ東側については、奈佐原丘陵がせまっているために視界はとざされ、東南の方向に土室の集落をみとめるだけである(PLATE 1b)。

第2節　先史時代の三島　－新池遺跡成立前史－

旧石器時代の三島地方には、明確な遺構をともなう4カ所のキャンプ地をはじめ、東端の山崎西遺跡から西南端の吉志部遺跡にいたるまでじつに40カ所にもおよぶ遺物散布地があり、府下のなかでもひときわ良好な遺跡群が展開する地域として認知されている。遺跡の大半は段丘と丘陵部に分布しているが、まれには大塚西遺跡で発見された翼状剥片のように低湿地の地下深くに埋もれているものもある。なお、これまでに発見された資料はいずれも姶良Tn火山灰降下以後のもので、後期旧石器時代でも、その後半期に属すナイフ形石器文化の所産であり、最終末の細石器の類は明確でない。

表1は三島の旧石器資料のなかから、比較的まとまっている石器群について、石材・器種別に一覧したものである。このなかの郡家今城遺跡A地点・C地点、津之江南遺跡、郡家川西遺跡H地点は発掘調査によって得られた資料で、その他は採集資料である。その一つ一つについては報告や資料紹介にゆずるとして、これらはいずれも二上山のサヌカイトの剥片・砕片をかなり含むことから、素材となる石材を搬入し、石器を製作していた遺跡と考えられている。しか

遺跡名	サヌカイト													チャート						頁岩	瑪瑙	ホルンフェルス
	国府型ナイフ	翼状剥片	同石核	横長ナイフ	横長剥片	縦長ナイフ	縦長剥片	石核	舟底形石器	剥片砕片	掻器	彫器	削器	縦長ナイフ	縦長剥片	掻器	彫器	石核	礫群	掻器	縦長剥片	石核
1．郡家今城遺跡C	76	67	11	1						◎	9	1			7	1	3		◎	1		
2．郡家今城遺跡A	14	63	6							◎									◎			
3．津之江南遺跡C	1①			5		1		2		◎									◎			
4．継体陵北遺跡	3	5	1							○												
5．郡家本町遺跡(表面採集)	2②	2		10	2	2			1	○	1				1							
6．郡家川西遺跡H									5	◎	2								◎			
7．塚原遺跡A	3		1	13				1③		◎	7	1	1	1				1			1	1
8．塚原遺跡B		3		2	2		1			○	4		4		1							

表1　三島地方の旧石器時代主要遺跡一覧　①切り出し状　②小形　③縦剥　◎多量　○少量

も発掘調査した資料のすべてに生活遺構とみられる礫群がともなっているのは重要で、いずれもキャンプ地と推定されるものである。おそらく表１に示した剥片・砕片を含む採集資料についても、キャンプ地とみてよいものであろう。そしてこれらの遺跡がいずれも段丘面やその縁辺部に立地していることは、とりもなおさずキャンプ設営のための平坦地の確保や水飲み場がすぐちかくに得られるなど、生活に便利なところであったからにほかならない。また一方では分布図(図２)にも示しているように、丘陵部から平野部にかけて単独で出土する石器も数多くみられる。これなどは狩猟に際して人の手から放たれたものと考えられ、キャンプ地をベースに三島の山野をかけめぐっていた旧石器人たちの姿がおもい浮かんでくる。

三島の旧石器時代のキャンプ地のなかでもっとも古く位置づけられるのは、郡家今城遺跡Ｃ地点、同遺跡Ａ地点、津之江南遺跡Ｃ地点、継体陵北遺跡で、いずれも瀬戸内技法によってつくられたナイフ形石器を主体とする国府文化期に属している。なかでも郡家今城遺跡Ｃ地点の資料は、近畿地方ではじめてキャンプ地の実態を明らかにしたもので、高く評価されている。

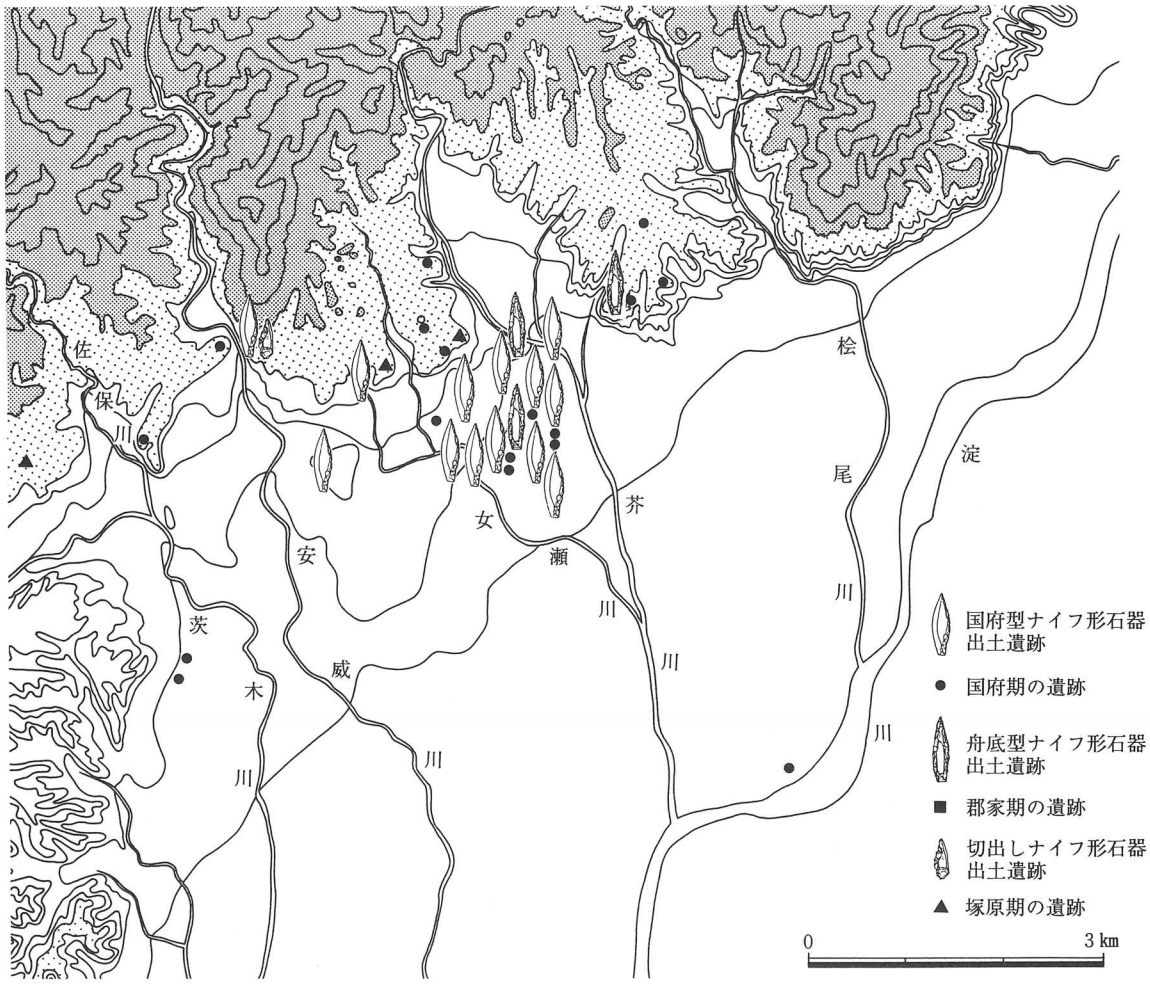


図２　三島平野の旧石器時代遺跡分布図

調査によれば、20数カ所の礫群・石器群が石器と剥片の接合状態やその組成から８つのグループにまとめられ、８家族が仮住していたと結論づけられている。また国府型ナイフ形石器を鏃と考える機能論や掻器の在り方に着目した居住形態の分析など、旧石器研究の新たな視点が数多くみられる。さらに近畿地方に産しない硬質頁岩でつくられた掻器の発見は、北陸地方との交流の証しとみられるもので、国府文化のひろがりを追究するうえでも、大きな成果になっている。なお津之江南遺跡Ｃ地点については、ナイフ形石器の形態と瀬戸内技法によらない接合資料の存在から、これを国府文化直後の資料とみる見解と、調査者がこの「接合資料」を単に不良な石核から素材となる剥片を得ようとした例外に過ぎないとして、あくまでも国府文化期のなかに押し止めようとする考えとのあいだに、際立った意見の違いがみられる。ただ真正な瀬戸内技法がサヌカイトを専用する技法とみる限りにおいては、表に示すように、郡家今城遺跡Ｃ地点やＡ地点にみられる国府型ナイフ・翼状剥片・同石核のみで構成される典型的な組み合わせと、津之江南遺跡Ｃ地点にみられる横長剥片を素材とするナイフが加わってくる段階とでは、少なくとも型式学的な組成の異同を認めないわけにはいかない。

国府期にひきつづくものとして、三島では郡家(文化)期が試考されている。基本資料は郡家本町遺跡の採集品であるが、やや小形の国府型ナイフ数点のほかは、いずれも単なる横長剥片を素材とする中形のナイフであり、主体となる利器の製作技法・形態があきらかに変化している。またナイフ形石器文化の終末期に盛行する切出しナイフ形石器がともなっていない点も、郡家期の時期的な位置づけを安定させており、おおむね妥当な見解と考えられる。今後発掘調査によって資料が補完されれば、当該期の実態もより明確になってくるとおもわれる。ところでこの郡家期の石器群には、剥片の両側縁を調整加工してつくった舟底型石器が並記され、その併存が説かれている。もとより採集資料であるため確実性を欠くが、同時期とみられる藤井寺市国府遺跡第６地点や岡山県宮田山遺跡などの例をみると、共存していた可能性は高い。しかしながら一方では、郡家川西遺跡Ｈ地点の石器群のように、主たる利器が尖頭器状に仕上げた舟底型石器のみで、いわゆるナイフ形石器を保有しない集団の存在も考えられる。このことはまた中形のナイフと舟底型石器が同じ機能を有していたことを示唆するものでもある。これまで両者とも瀬戸内技法が崩壊する過程で派生したものとされているが、集団ごとに、どの程度の割合で選択するかによって、それが独占的になったり、一方に偏った状況としてあらわれたものとみられる。とはいうものの、分布のうえではナイフ優勢の資料が圧倒的に多く、瀬戸内技法の型式変化の主系譜が横長剥片を素材とするナイフ形石器であったことは事実であろう。

三島のナイフ形石器の終末期は塚原遺跡Ａ地点採集の石器群によって代表され、塚原(文化)期と呼んでいる。Ａ地点の資料は、あきらかに先行する国府型ナイフを除けば、主たる利器は横長ナイフと小形の切出しナイフである。こうした組成は吹田市吉志部遺跡の主要な部分とも

触れ合っており、これに弁天山や宿久庄などの切出しナイフの単独出土資料を加味すれば、この時期の遺跡は、国府期や郡家期と同様、ほぼ三島全域で認められることになる。この切出しナイフは技法的には郡家期の横長ナイフの延長線上で出現したと理解されるもので、なによりも伴出している横長ナイフがその事実をものがたっている。舟底型石器については切出しナイフと伴出した例はなく、すでに消滅していたのであろう。また塚原遺跡からは掻器の出土が目立ち、その頻用は塚原期の特徴のひとつとして早くから指摘されてきたところであるが、塚原遺跡以外での資料が分明でない現段階では、キャンプ地の実態は、国府期などと比べても、いまひとつ明らかでない。さらに三島では国府期・郡家期を通じ、一貫してサヌカイトを汎用していたのに、塚原遺跡ではそれ以外の石材(チャートなど)でもナイフ形石器をつくっており、利器の小形化とともに、塚原期にいたって瀬戸内技法の真髄が完全に破綻したことを如実に示している。

縄文時代の三島地方には早期から晩期までの土器が認められるものの、遺跡の動向を充分にうかがい知れるといった状況ではない。また石器についても、有舌尖頭器や石鏃が各地で採集されているほかは、石棒や石皿などの石製品はきわめて貧弱である。ましてや土偶・土面などの土製品は皆無であり、研究の遅滞は否めない。表2は以前に作成した三島の縄文土器の集成表に、その後に発掘された資料などを加え補正したものである。早期から中期までは発見された遺跡数も少なく、土器もごく散発的にしかみられない。後期・晩期になると資料は幾分か充実し、なかには当時の生活ぶりがうかがえる遺跡も認められるが、集落の規模や形態を復原するにはほど遠いといった状況である。以下、時期別に素描しておこう(図3・表2)。

草創期・早期では、淀川の自然堤防上にある大塚遺跡から発見された早期末葉の東海系条痕土器が唯一の土器資料である。資料的にはむしろ段丘や丘陵ないしその縁辺部で発見される有舌尖頭器の在り方が注意をひく。三島ではこれまでに15点の有舌尖頭器が発見されていて、吉志部遺跡の9点を除けば、いずれも単独で出土している。吉志部遺跡の資料も一括して出土したのではなく、形態にかなりばらつきがあり、単発的な資料が長期間にわたって累積したものとみられる。これらの有舌尖頭器は基本的に狩猟場に遺棄されたものと考えられ、そこでの住居跡の検出などは望めないだろう。集落の追究は将来における隆線文土器の発見などに期すべき課題となる。

前・中期の資料も少ない。前期では淀川の自然堤防上に位置する大塚遺跡と柱本遺跡で北白川下層式、沖積地にある東奈良遺跡で大歳山式の土器が得られている。このなかで北白川下層式には河内からの搬入土器がふくまれていて、土器の出土状態なども定住を示すようなものではなかった。集落の検出という点では、やはり段丘上での一次資料の獲得が不可欠であろう。中期になるといくらか資料が増え、遺跡も前期のように沖積地に点在するものに加えて、塚穴

遺跡や天神山遺跡など平野奥部の丘陵縁辺部でも認められるようになってくる。土器は船元式・里木式がめだち、あと咲畑式の鉢片と若干の北白川C式が知られている。この時期の土器は中期末の北白川C式以外はほとんどが搬入品である。船元式・里木式については寝屋川市讃良川遺跡や大阪市森ノ宮遺跡などの状況を考慮すれば、瀬戸内の人々の生活圏が近畿地方におよぶ過程でもたらされたと推定するのが妥当なようだ。それに対して、咲畑式は東海地方との往還のなかで持ち込まれたものと考えられる。また芥川遺跡で出土した一群の北白川C式は、後期前半にこの集落が発展する足掛かりとなるもので、三島のなかで遺跡の動向が具体的にうかがえる数少ない資料となる。

後期になると遺跡はさらに増え、三島平野全体にみられるようになる。まず注目されるのは、宮田遺跡のように安定的な段丘上に明確な遺構をともなう集落が確認されることで、その背景には三島に定住しようとした人々の存在が考えられる。こうしたことは、宮田遺跡以上の規模と中身を有する芥川遺跡が中期から引き続き発展していることによっても裏付けられる。かつ

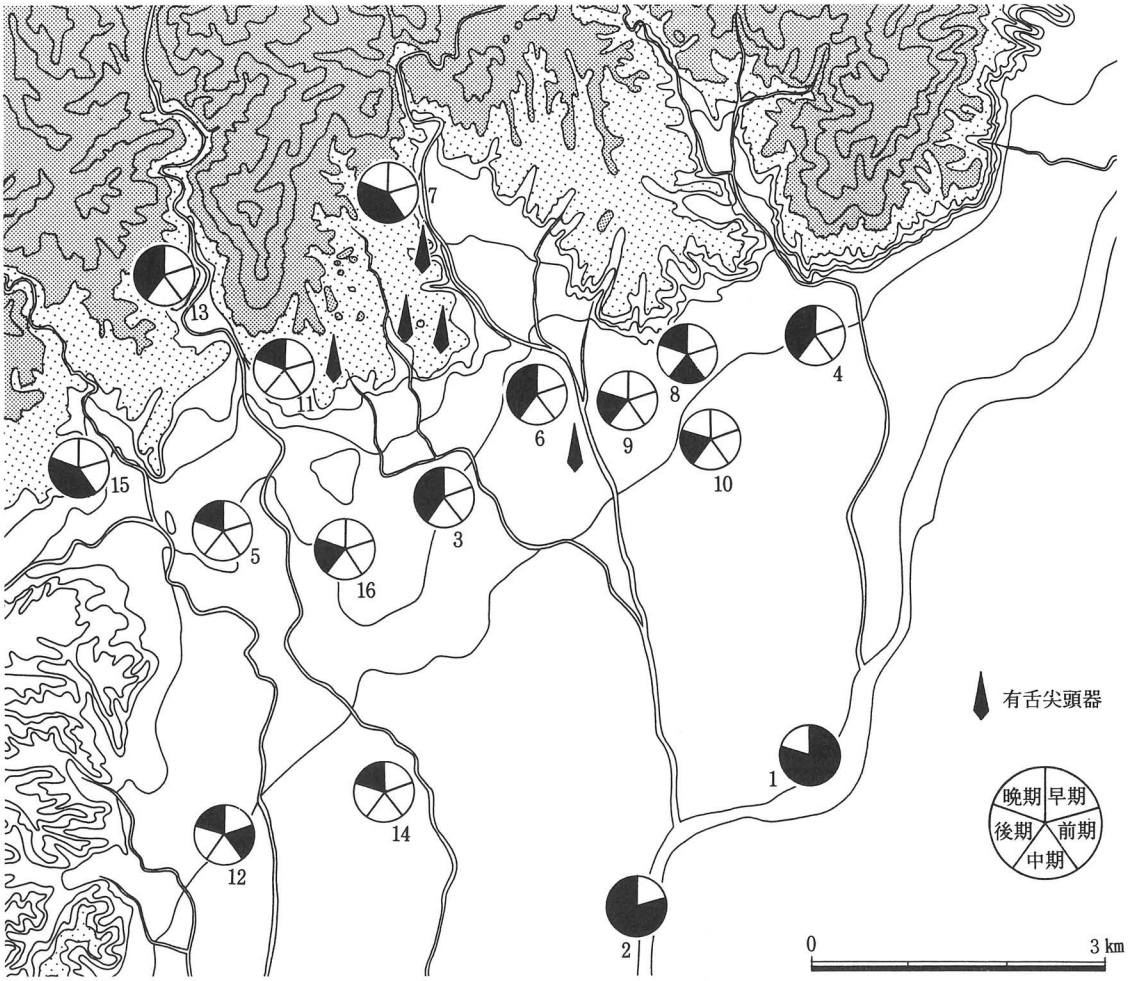


図3　三島平野の縄文時代遺跡分布図

て北白川上層式３期における遺跡数の増加と生駒西麓産土器の大量流入の意義づけとして、後期前半にアク抜き技術をともなう植物採集や定住村落の形態などの東日本の文化要素が十分消化され安定的な状況がうまれたものと判断した。しかしその後に発見された芥川遺跡の豊富な資料はその時期がいま少しさかのぼることを示している。また後期終末の宮滝式土器も、点数こそ少ないが、３カ所の遺跡で認められる。いずれも生駒西麓産のもので、この時期には恒常的に搬入されていたとみられる。

晩期にはかなりの遺跡が認められるものの、終末期の長原式を除けば、後期の分布の状況と大差はない。ただ遺跡の消長ということでは、段丘上における滋賀里Ⅲ式期での耳原遺跡と郡家川西遺跡の勃興が目立ち、以後に定住化していく可能性が高い。船橋式ないし長原式については、弥生時代前期に並行することは自明であり、三島での籾痕資料は安満遺跡で出土した長原式期の深鉢に認められている。ところで本来の長原式が生駒西麓産の土器のみによって成り立つ型式とするならば、三島産の２条の刻目突帯文土器の大半は長原式併行期の所産となる。その結果、前段に位置する船橋期の遺跡数２～３カ所と長原式期の遺跡数９カ所とくらべると、長原期に集落がいかに増加し、しかも三島平野一円に展開していることが判明する。このことは、とりもなおさず三島における稲作文化の波及期がこの時期(弥生土器で言えば摂津Ⅰ－１様式)にあたることを示している。さらに地元産の土器に占める生駒西麓産土器の搬入状況を

遺跡名	早期	前期	中期	後期	晩期	立地	標高(m)
1. 大 塚	東海系条痕土器	**北白川下層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ**		北白川上層3期～一乗寺	**長原**	自然堤防	1～3
2. 柱 本		北白川下層Ⅱc・Ⅲ	船元Ⅱ・咲畑	北白川上層1・2・3期 一乗寺K・**元住吉山Ⅱ・宮滝**	滋賀里Ⅰ・**Ⅳ**	自然堤防	0～2
3. 宮 田				**北白川上層3期(新)・宮滝**	**長原**	低位段丘	18～20
4. 安 満				北白川上層３期	滋賀里・**長原**	扇 状 地	8～15
5. 耳 原					滋賀里Ⅲ・**船橋・長原**	低位段丘	21～23
6. 郡家川西				宮滝	**滋賀里Ⅲa 長原**	低位段丘	15～18
7. 塚 穴			船元Ⅰ・Ⅱ	**北白川上層1～2期**		丘陵縁辺	43～45
8. 天神山			船元		**長原**	丘陵縁辺	20～25
9. 芥 川			北白川C	**北白川上層1期**		沖 積 地	12～13
10. 上田部				**北白川上層２～３期**		沖 積 地	6～7
11. 塚 原					**長原**	台 地	50～60
12. 東奈良		大歳山			浮線文土器	沖 積 地	6～8
13. 初 田				＋		台 地	60～63
14. 牟 礼					**滋賀里Ⅲ・Ⅳ・船橋・長原**	沖 積 地	5～7
15. 西福井			＋	＋		丘陵縁地	35～40
16. 太 田				＋		沖 積 地	15～20
17. 護国寺下層			里木Ⅱ～Ⅳ			沖 積 地	4～5
18. 七尾下層					**船橋～長原**	丘陵縁辺	15～16

表２　三島地方出土の縄文土器型式別一覧（森田1990に加筆）　　ゴチック体は生駒西麓産土器を含む。

分析すると、三島の縄文遺跡としては通有の20％前後の比率を示す安満遺跡や宮田遺跡と60％以上をしめる耳原遺跡の２つの類型が認められた。こうした現象は稲作を受容するに際して、安満遺跡などでは弥生土器を使用するあらたな集団(弥生人集団)が開田を推進したのに対し、耳原遺跡では河内地域周辺で展開していた旧来のシステムをフルに活用して、縄文人集団自身が農耕集落への脱皮を指向したとみることも可能である。

三島の弥生遺跡は40カ所以上にのぼり、縄文遺跡を圧倒している(図４、表３)。この地域では、東部の桧尾川の扇状地にある安満と西部の茨木川右岸の低地にある東奈良の農耕集落の成立を期して、はじめて本格的な弥生文化が到来したといえる。それは縄文時代にはみられなかった環濠と用水路の掘削に象徴され、さらには広域な水田の開発が加わっている。安満遺跡では、当初はそれほど規模も大きくなく、せいぜい１本の用水路を基軸にした水田経営をおこなう程度であったのが、その後のＩ－３様式期になるとはじめて居住区のまわりに環濠を掘削し、外辺部に墓域が形成されるなど、集落が急速に大きくなっている。その背景には、周囲の縄文人

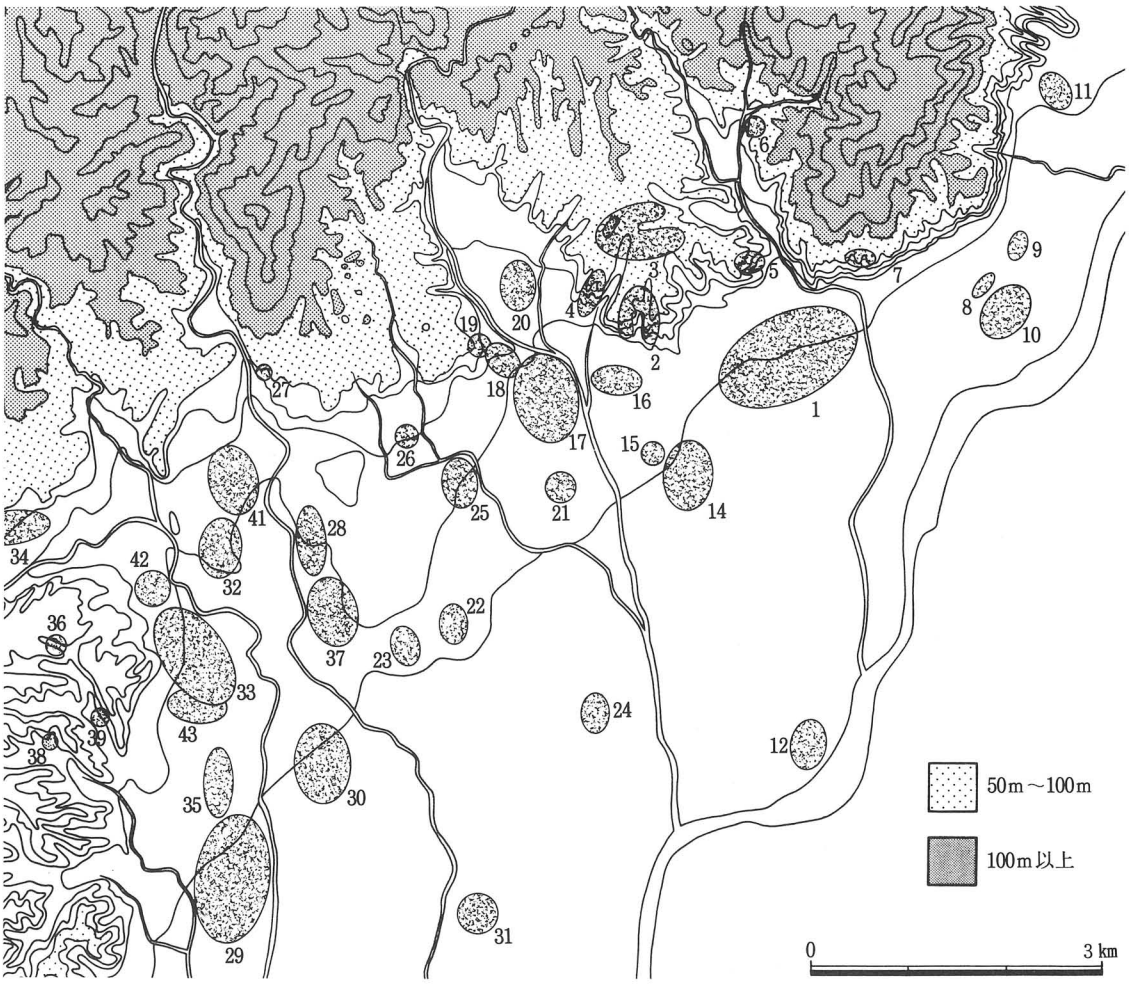


図４　三島平野の弥生時代遺跡分布図

が積極的に農耕にかかわることによって、かれらがそれまで保持してきた領域を互いに享受したものと考えられる。また東奈良遺跡で発見されている方形周溝墓群は、この段階ですでに安定的な農耕集落が営まれていたことを示している。現在、前期にさかのぼる遺跡は芝生、上田部、大蔵司、目垣、郡・倍賀など三島平野一円で16カ所を数えるが、拠点集落の指標となる環濠が確認されているのは安満と東奈良だけである。今後それぞれの遺跡での調査がすすめば、環濠を検出する可能性も高いとおもわれるが、この２大遺跡が東西の両極として三島の弥生社会をリードしていったのは間違いない。

中期になっても、安満・東奈良の集落はますます巨大化していく。安満ではⅡ・Ⅲ様式期だけで、優に100基をこえる方形周溝墓を検出しており、東奈良でも外辺部の数カ所で周溝墓群を形成している。そして一方では、塚原、天神山のよう

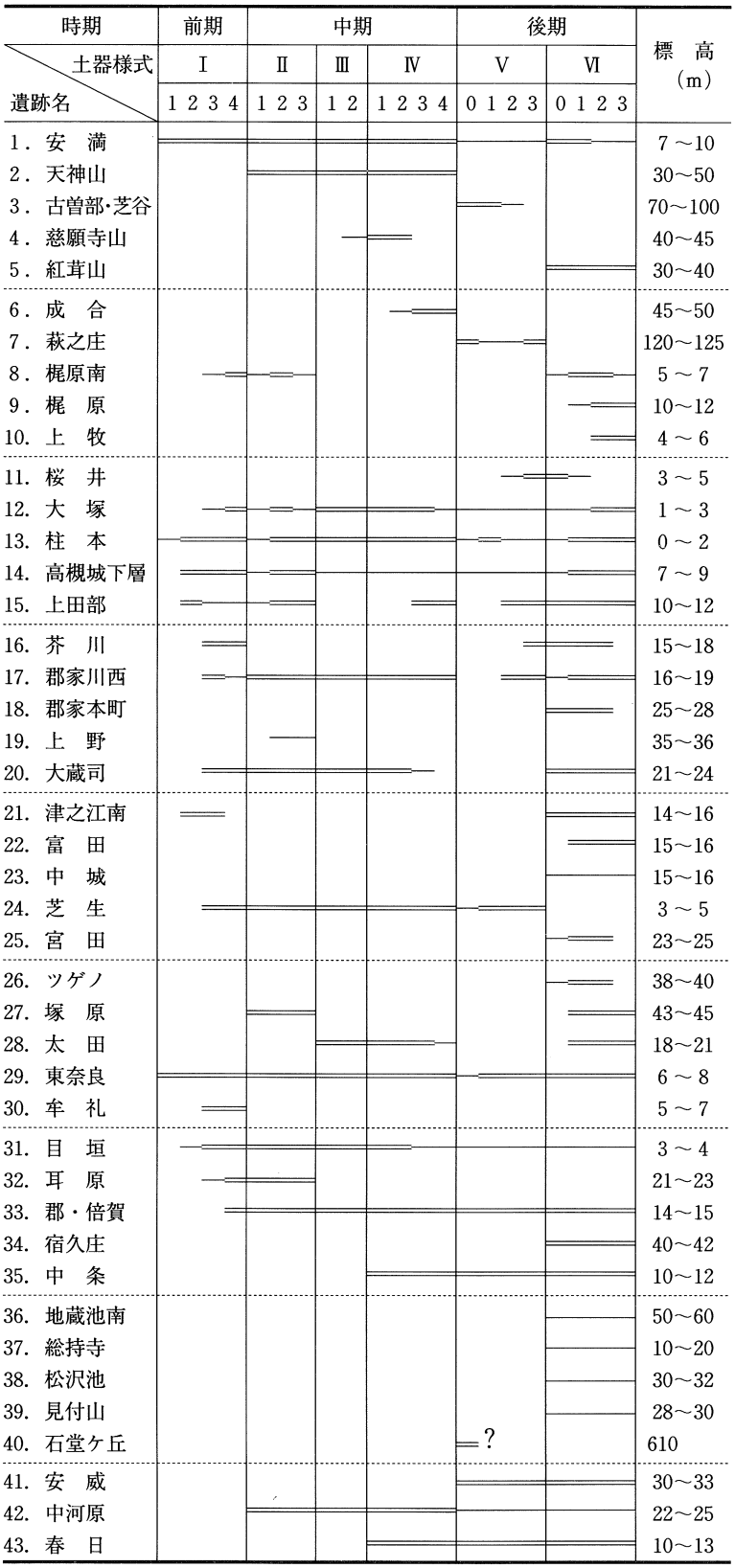


表３　三島平野の弥生遺跡一覧（土器様式は『弥生土器の様式と編年・近畿編Ⅱ』による）

に集落が高台へも進出するようになり、当初のような低湿地への占地だけでなく、段丘部や丘陵部での開発が目立ってくる。これらは平野部での遺跡数の増加ともあいまって、三島の弥生社会が安定的に発展していったことをうかがわせ、郡家川西や郡・倍賀のように環濠をめぐらす集落も漸増してくる。こうしたことは土器の様相からも知ることができ、北摂型広口壷・摂津型水差・摂津型Aの甕・複合櫛描文など三島独特の様態や施文法を共有する事実によっても裏付けられる。この時期、三島の弥生集落は淀川を媒体とする物資流通の基地として対外的な供給センターの役割を担っており、東奈良遺跡での銅鐸や銅戈の製作、安満遺跡での石包丁づくりはその最たるもので、目垣遺跡の玉作りなどもその延長線上で理解できるのであろう。なかでも淀川縁にある芝生から出土したアメリカ式石鏃は、物流の要衝として存在した三島の位置をもっとも象徴的にしめす遺物といえよう(図5)。

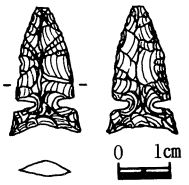


図5　アメリカ式石鏃

後期になると、安満は急速に衰退するのに対し、東奈良はなおその勢力を保持しつづけるなど、それまで軌を一にして発展してきた両者の動向に変化がみられるようになる。その原因はいまただちに明らかにならないが、この時期に到来した真正な鉄器文化への対応のちがいであったとみるのが妥当なようだ。すなわち鉄製刃先をもつあらたな農耕具の獲得によって、周辺に広大な空閑地をもつ東奈良では近隣地に水田をひらくことができたのに対し、安満では小河川である桧尾川が形成した扇状地の先端に位置していたため、すでに可耕地が限界に達し、鉄製農耕具を活用する場がなかったのであろう。そして安満の衰退にさらに拍車をかけたのが、石包丁の原材である近江高島産粘板岩や石鏃・石剣の原材である二上山産サヌカイトの流通システムの崩壊とみられる。三島におけるこの2大拠点集落の盛衰はこの地域での勢力の不均衡をもたらしたようで、安満の周辺では、背後の丘陵部に古曽部・芝谷の一大高地性環濠集落が突如として出現し、同時に安満の東方山間部にも萩ノ庄の見張り場が設けられるなど、安満をとりまく環境がにわかに緊張してくる状況が知られるのである。昭和28年以降の4次にわたる調査によって、古曽部・芝谷遺跡では山を切り拓くための鉄斧や武器としての鉄鏃がめだつものの、石器や土器の在り方は安満とよく似ており、いまだ近江系の土器もかなりみられる。一方東奈良の西側には千里丘陵が展開しているが、そこには大規模な高地性集落は認められていない。このことは逆説的に安満と古曽部・芝谷が一連の集落群として密接に結び付いていたことをうかがわせる。

やがて後期も後半になると、古曽部・芝谷から東側の尾根をくだったところにある紅茸山があらたに拓かれ、あるいはまた安満へ舞い戻るなどして、古曽部・芝谷の集落が終息する。そしてこの動きに呼応するかのようにして、郡家川西・芥川・大蔵司など芥川縁辺の集落が活況を呈するようになってくる。なかでも郡家川西は段丘の礫土をつらぬく用水路を縦横にめぐらし

ていて、可耕地を飛躍的に増大させている。段丘上での水田址の検出はなかなか困難だが、この時期からのちの古墳時代の初期にかけての短期間に、100基をこす竪穴住居がいくつかのブロックに分かれて集中的に発見されているのは集落の繁栄ぶりを映しだしているのだろう。最近の調査によると、この居住区の中心域から750mも隔たったところで、庄内式期の群集土壙墓が検出されていて、集落の範囲がきわめて広大であったと推測されるようになってきた。後期後半から庄内式期の東奈良は集落内を貫流する幅７mの用水路の開削や大規模な土壙墓群の存在から、依然として命脈を保っているのがわかるが、集落全体の規模については郡家川西にとおく及ぶものではない。東奈良周辺の遺跡の動向をみると、旧茨木川上流にある宿久庄の進出があたらしい動きである。そのほかでは前期から連綿とつづく郡・倍賀集落の後期の実態が気になるところで、今後の調査の進捗をみまもりたい遺跡である。

参考文献

大船孝弘　1983「44 大阪府 郡家今城遺跡」『探訪 先土器の遺跡』

奥井哲秀ほか　1981『東奈良 発掘調査概報 Ⅱ』東奈良遺跡調査会

小林健太郎　1977「Ⅰ高槻市の自然環境」『高槻市史』第１巻 高槻市

田代克己ほか　1979『東奈良 発掘調査概報 Ⅰ』東奈良遺跡調査会

辻本充彦　1977「三島地方採集の石器」『大阪文化誌』第3巻第2号（財）大阪文化財センター

都出比呂志ほか　1975『島本町史(本文編)』島本町

橋本久和　1992「芥川遺跡の調査」『平成２年度 高槻市文化財年報』高槻市教育委員会

濱野俊一　1993「郡・倍賀遺跡」『平成４年度発掘調査概報』茨木市教育委員会

原口正三　1977「Ⅱ考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』第１巻 高槻市

藤原学ほか　1981『昭和55年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報』吹田市教育委員会

1982『昭和56年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報』吹田市教育委員会

1985『昭和59年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報』吹田市教育委員会

1989『昭和63年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報』吹田市教育委員会

1991『平成２年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報』吹田市教育委員会

森　浩一ほか　1978『大阪府史』第１巻（古代編Ⅰ）大阪府

1991『大阪府史』別巻第１巻(古代編Ⅰ)補遺 大阪府

森田克行　1980「郡家川西遺跡」『シンポジウム二上山旧石器遺跡をめぐる諸問題』帝塚山大学考古学研究室

1988「複合櫛描文」『弥生文化の研究10』

1989「１ 大阪府 安満遺跡」『探訪 弥生の遺跡』畿内・東日本編

1989「三島地方の縄文土器」『昭和61・62年度 高槻市文化財年報』高槻市教育委員会

1990「７摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ

第３節　古墳時代の三島と新池遺跡

三島では前期から後期にいたるまで、大小とりまぜて約350基の古墳が確認されている(図６)。これらは水系ごとにいくつかのグループにまとめられるが、前期の中心的な勢力となるのは、弥生時代の末期に急速に伸長してきた郡家川西の集落を基盤とする首長墓群である。南平台丘陵上に展開する弁天山古墳群がそれで、最古期のＡ１号墳、Ｂ１号墳からＣ１号墳を経て、やがて丘陵裾部の郡家車塚古墳、平野部にある前塚古墳にいたっている。前期から中期前半にかけてのこの一連の首長系譜は、三島で唯一確認できる純粋な縦系列の造墓痕跡である。三島西半部では、前期に紫金山古墳・将軍山古墳・安威１号墳がそれぞれ水系を異にする丘陵上に相前後してつくられるが、その造営母体となる集落は明確でない。紫金山古墳が宿久庄、安威１号墳が安威の集落であった可能性は充分考えられるとしても、これらの古墳が個別分散的に存在していたことは否めない。そしてなによりも不可解なのは、東奈良を母体とする前期古墳が見当たらないことである。やはりここでも上流側にある郡・倍賀の在り方が問題となってこよう。

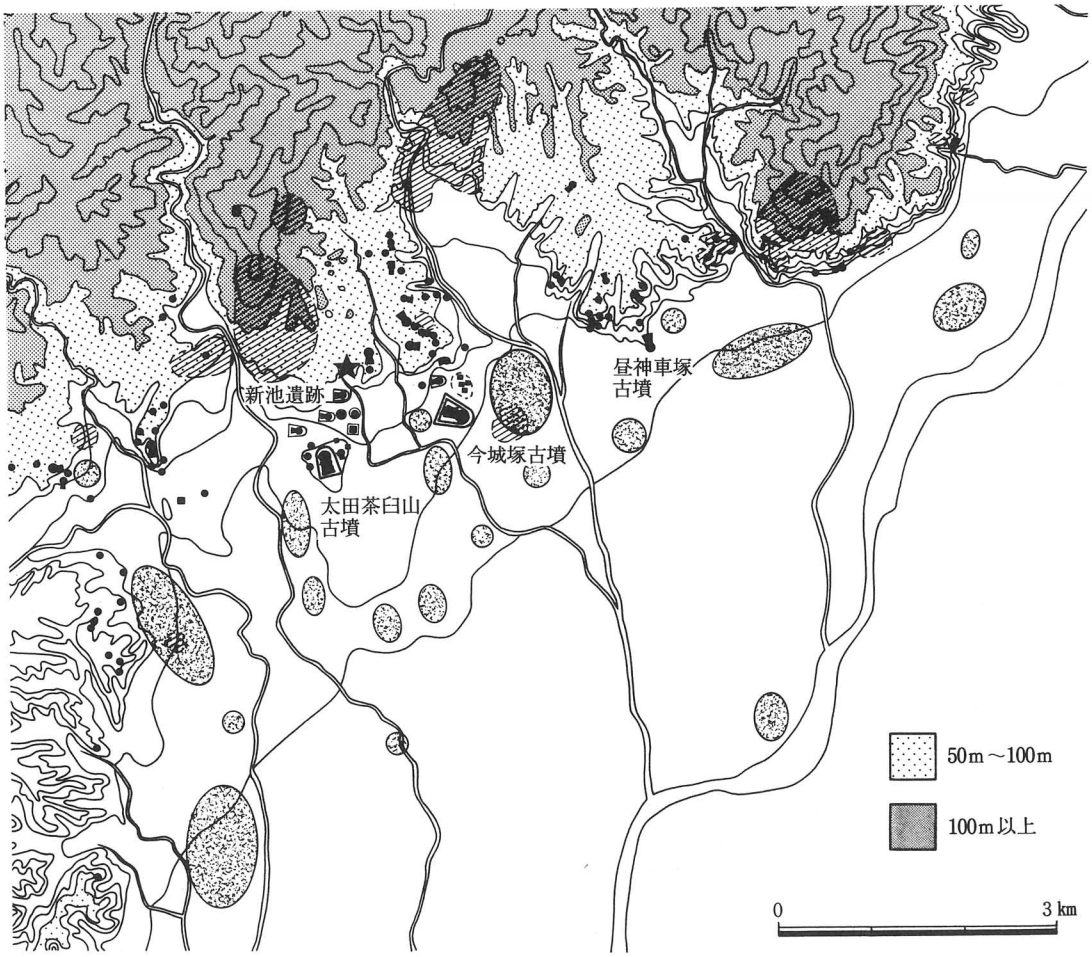


図６　三島平野の古墳時代遺跡分布図

また桧尾川以東地域では、萩之庄１号墳が萩之庄の高地性集落に重なって営まれている。この地域は山麓から淀川までのあいだにわずかな平野しかなく、安定した農耕基盤がのぞめないところから、被葬者は淀川の水運にもかかわっていた人物になるのであろう。

中期の主要な古墳群としては、奈佐原丘陵の奥部に築かれた墓谷古墳群や尼ケ谷古墳群がある。これらはすぐ東の眼下にひろがる服部平野を支配していた首長墓群とみられ、平野の中央部には弥生時代以来の大蔵司をはじめ、あらたに宮ノ川原の集落が営まれている。またこの時期には三島古墳群を主導するもうひとつのグループとして、石山古墳・土保山古墳・番山古墳などの土室の古墳群がある。いずれも中・小規模のもので、西側にある安威川にむかって緩やかに傾斜する段丘面に立地している。これは段丘西麓にある太田や右岸にある安威の集落とのかかわりも視野に入れなければならないことを意味している。ところでこの時期に突如として全長226mの太田茶臼山古墳(現継体陵)が、土室の南東部にある段丘最高所に築造される。三島古墳群での前期から中期にかけての首長墓の推移、とりわけ土室地区の古墳の変遷をみると、きわめて唐突なできごとである。三島の首長が急速に力をつけたともおもわれず、三島を超越する勢力をもった人物がここに墓所をさだめたものであろう。太田茶臼山古墳の造営後しばらくは大規模な古墳はつくられず、後期をむかえる。

後期ではまっ先に全長190mの今城塚古墳をあげなければならない。今城塚が真実の継体陵であるとする議論には、もはや多言を要しないだろう。条里制の研究を主とする所在地論をはじめ、古墳の築造企画論、さらには近年深化した埴輪の研究成果など、その学問的位置付けは将来にわたって揺らぐことはない。すなわち、今城塚が530年前後に築造された前方後円墳という考古学的事実が獲得されているのである。このころに昼神車塚古墳と南塚古墳が前後してつくられる。昼神車塚古墳は狩猟のようすをあらわした埴輪群、南塚古墳は横穴式石室に２基の石棺をもち、多くの馬具を出土したことで、ともに早くから著名である。三島の群集墳には新屋・長ケ淵・塚原・片ケ谷・塚脇・安満山・梶原などがあり、おおむね６世紀中頃以降の造営である。最近調査された梶原１号墳からは家形石棺とともに馬具が出土しており、そのなかでも希少な双葉剣菱形杏葉は、若狭の古墳との関連が想起される貴重な遺物である。前期の萩之庄古墳とのかかわりが今後の追究課題となろう。また塚脇Ｆ１号墳では墳丘中に積石をほどこした珍しい構築法がみられ、群中でも古相を呈すといわれている。さらに群内西南部に位置する塚穴グループでは、全面的な調査の結果、継起的な造墓活動のあったことが解明されている。とりわけ塚穴４号墳からは、播磨地方でつくられた凝灰質砂岩製の家形石棺が出土し、以前から判っていた塚脇12号墳の石棺とともに、この地域と播磨とのつながりが想定できるようになった。群集墳のほかでは、竜山石製と二上山凝灰岩製の石棺をあわせもつ耳原古墳や緑泥片岩製の石棺を検出した海北塚古墳、さらにはカマド塚の上寺山古墳があり、７世紀の終末期になる

と石室に塼敷きをほどこした初田１号墳、鎌足墓として追究されている阿武山古墳など、個性的な古墳が点在している。

以上に主要な古墳を点描したが、三島にはこれらをはじめとして、大小とりまぜて約350基の古墳がつくられている。そのなかで埴輪をもつ古墳は、最古期と終末期をのぞいた、ほぼ全期間をつうじて認められ、これまでに埴輪を有することが判明しているのはおよそ100基にも達している。この割合は他地域と比べてみてもかなり高いものとおもわれ、とりわけ窖窯で焼成された、いわゆる無黒斑の埴輪の供給率は相当なもので、直径10数ｍの円墳にも多様な形象埴輪が並べられていることもしばしばである。今回報告する新池遺跡では18基の埴輪窯をはじめ、数多くの埴輪生産関連遺構を検出しており、こうした古墳への埴輪の供給基地となっていたことが判明してきている。その実態は後項に譲るとしても、新池窯の埴輪が大王陵とされる今城塚古墳や三島最大の前方後円墳である太田茶臼山古墳へ供給されているといった分析結果とその事実は、今後の古墳時代の研究に益するところが大きいと信じている。

参考文献

茨木市教育委員会　1990『わがまち茨木－古墳編－』

北原治ほか　1993『塚穴古墳群』高槻市教育委員会

高槻市教育委員会　1991「今城塚古墳」、「阿武山古墳」、「新池遺跡」、「塚原古墳群」カラー版遺跡ガイド2･3･5･6

1993「弁天山古墳群」、「塚脇古墳群」、カラー版遺跡ガイド9･10

原口正三　1977「Ⅱ考古学からみた原始･古代の高槻」『高槻市史』第１巻 高槻市

名神高速道路内遺跡調査会　1991「梶原１号墳の調査」現地説明会資料

森田克行　1985「地域における編年 摂津」『季刊考古学』第10号

第２章　調査経過

第１節　調査にいたる経過

第２節　調査の経過

第２章　調査経過

第１節　調査にいたる経過

新池遺跡の発見は昭和27年の２月にさかのぼる。三島在住の考古学研究者である免山篤氏が遺跡踏査で土室に立ち寄ったさいに、新池の東岸に埴輪の窯跡があるらしいという情報を住民から教示されたのがその端緒となった。その後、田代克己氏や大阪府立島上高等学校地歴部などがおこなった分布調査などによって多くの埴輪片が採取されることになり、地元では遺跡の存在が次第に周知されるにいたった。そして昭和46年には免山篤氏によって、遺跡発見の経緯や出土遺物の紹介が専門誌に報告され、学界にもひろく知られるようになった。そのときの報

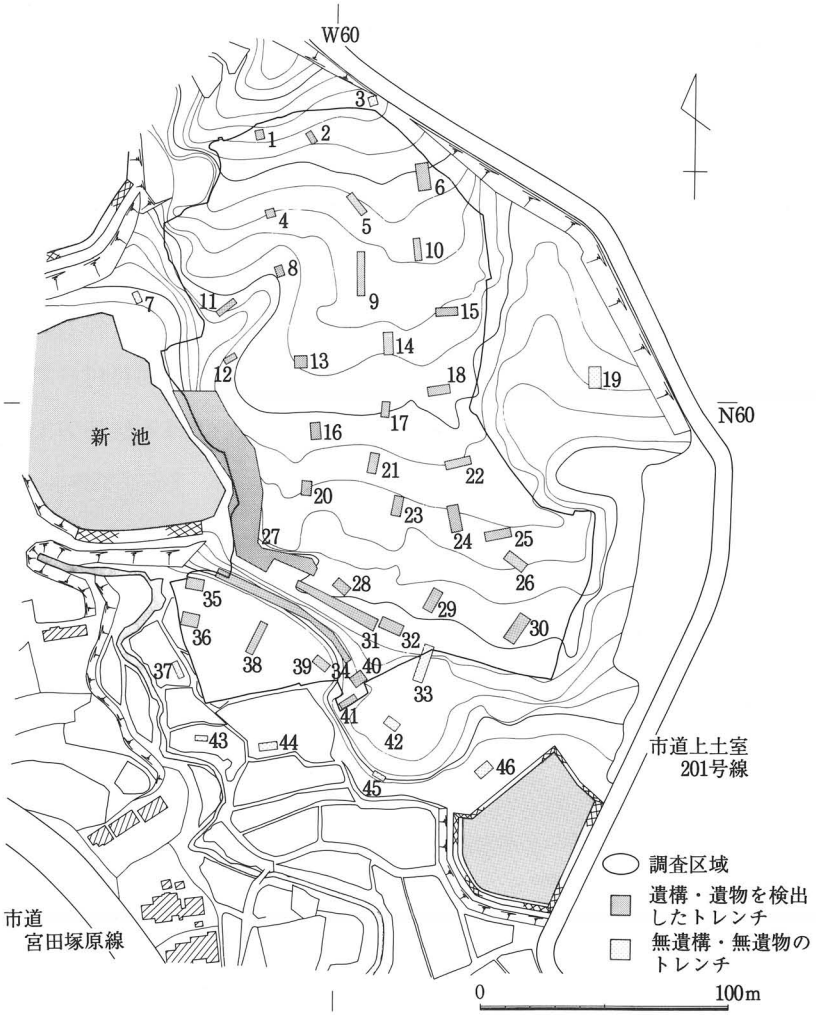


図７　現況図および確認調査トレンチ位置図

告では、数種類の円筒埴輪の紹介をはじめ、盾形や動物などの形象埴輪も図示され、窯跡がかなりの規模であることを推定している。また同時に採集した７・８世紀の須恵器や土師器もあわせて報告し、『日本書紀』に記されている「摂津国三島郡埴廬」を土室にあてようとする説を紹介しながら、ここに律令期の集落の存在をも予見している。その後しばらくの間は、周辺地域での開発もなく、新池遺跡は現状凍結の状態で推移し、その間に『高槻市史』などで断片的にとりあげることはあっても、その実態の究明はなお将来のこととされてきた。

こうした経過のなかで昭和62年の６月に、阪急電鉄株式会社より「土室住宅地」開発にともなう埋蔵文化財調査について、事前に協議したい旨の依頼がなされてきた。高槻市教育委員会では開発地が埴輪窯跡がある「新池」の東岸部だけでなく、その東側にひろがる段丘および東辺の谷部までを含む49,900m²の広大な面積であるこから、とりあえず確認調査を実施し、その結果をまってあらためて協議することが妥当と判断した。確認調査は同年の10月５日からおこない、開発地全域に、46カ所のトレンチを設定した(図７)。調査の結果、新池東岸部（開発地西辺部）に設けたトレンチ27で10余基の埴輪窯を確認したのをはじめ、段丘西南部のトレンチ31で１基の埴輪窯、また段丘東南部のトレンチ30で古墳時代中期の竪穴住居、おなじく北半部のトレンチ14・６などで奈良時代の掘立柱建物を検出するなど、各時代の遺構・遺物が広い範囲にわたって検出され、きわめて良好な遺跡であることが予測された。とりわけ埴輪類は中期から後期までの資料(図８・９、PLATE133、注)が多種・多様に検出された。また遺構・遺物がまったくみられない東辺の谷部については調査対象地から除くこととし、それを差し引いた約27,000m²について全面調査の必要があるとの結論に達し、その旨を同年11月26日付けで開発者に通知した。そのなかで、とくに西辺部で検出した10余基の埴輪窯については近畿地方でも有数の古代窯業

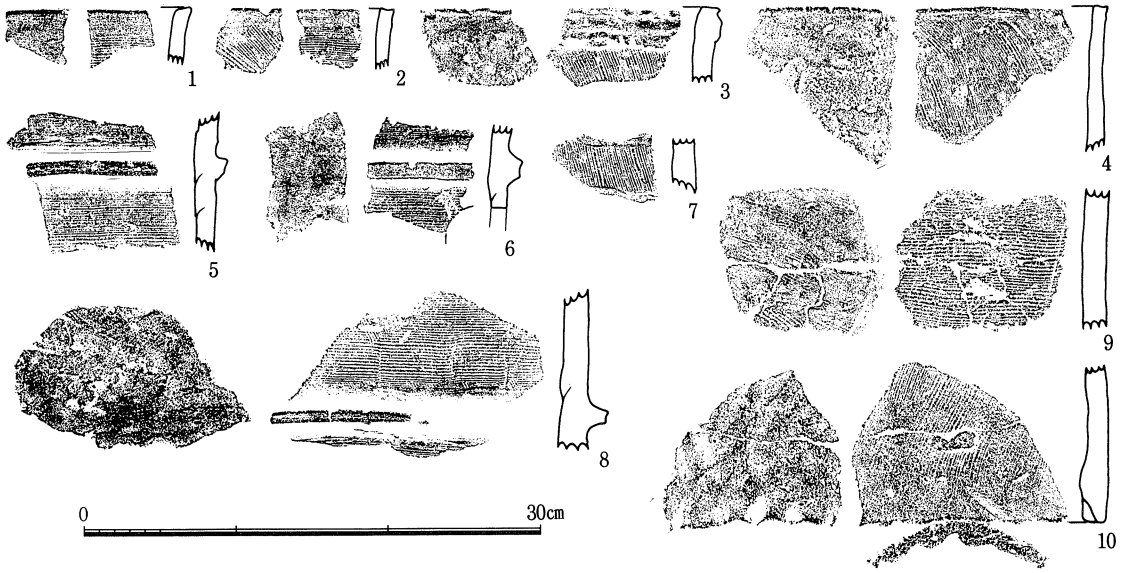


図８　各トレンチ出土の円筒埴輪類１～10

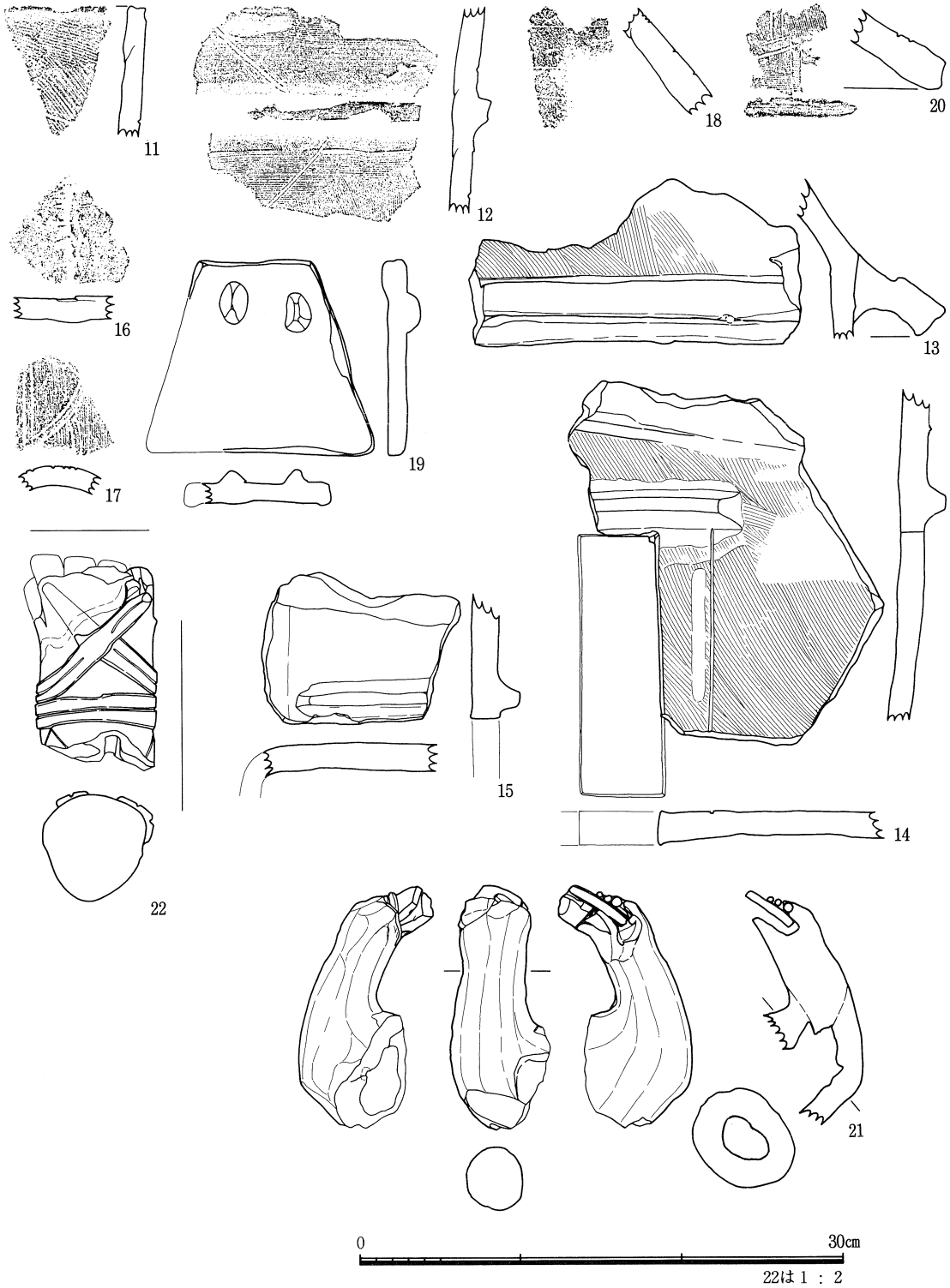


図9　各トレンチ出土のヘラ記号・形象埴輪類11～22

遺跡であり、その保存について一定の理解をもとめた。その後協議をかさねるなかで、教育委員会と開発者双方の了解事項として、新池沿いの埴輪窯の保存を前提とする調査体制をとることになった。この協議内容をうけて、阪急電鉄株式会社は同年12月18日付けで当該地の発掘届を提出。その後、文化庁ならびに大阪府教育委員会から事前調査を実施するよう指導があり、高槻市教育委員会では昭和63年２月29日付けで調査の実施を開発者に通知した。

昭和63年８月９日、高槻市教育委員会は文化庁ならびに大阪府教育委員会に発掘通知書を提出するとともに、阪急電鉄株式会社と同年８月15日付けで覚書を締結し、調査に取り掛かることとなった。

注

検出した埴輪は円筒(**1**～**12**)、形象の家(**13**～**15**)、盾(**16**・**17**)、草摺(**18**)、鞆(**19**)、蓋(**20**)、人物(**21**・**22**)がある。

これらは下記の文献および今回の新池遺跡の調査成果から、**1**・**2**・**5**・**6**・**8**・**9**・**12**・**18**・**19**がⅣ期、**3**・**4**・**7**・**10**・**11**・**13**～**17**・**20**～**22**がⅤ期と考えられる。

川西宏幸1987「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号

松本百合子1992「一ケ塚古墳の鞆形埴輪」『葦火』41号 (財)大阪市文化財協会

第２節　調査の経過

現地調査は昭和63年９月12日からおこなった。開発地が段丘部とすぐ西隣の谷部におよび広大なものになるため、全体を大きく３つに区割りすることとし、段丘東南部の9,390m²をⅠ区、段丘西南部および東南谷部の9,650m²をⅡ区、段丘北半部の8,660m²をⅢ区とした。調査はⅠ区より順次実施したが、実際には図10に示すように、それぞれを適宜区分しておこなった。

Ⅰ区の調査では南西部のⅠＡ区から着手し、徐々に北側のⅠＢ区、ⅠＣ区へとすすめていった。おもにⅠＢ区では古墳時代の集落、またⅠＢ区からⅠＣ区にかけて律令時代の集落を検出した。前者の遺構群には通常みることのない埴輪片がかなり出土したことから、埴輪生産にかかわる集落と判断されるものであった。後者については住居・倉・井戸・墓をセットで検出するとともに、一片の新羅土器が得られ、この集落が『欽明紀』に記された「三島郡埴廬」に相当する蓋然性が極めて高くなってきた。こうした調査成果を踏まえて、Ⅰ区の調査の目処がたった時点で平成元年３月26日に１回目の現地説明会を開催した。

Ⅱ区では南西部の谷部(ⅡＡ区)と斜面地(ⅡＢ区)の調査からはじめ、東部にあたる段丘上面(ⅡＣ区)、北西部斜面地(ⅡＤ区)へと順次進行していった。おもな遺構はⅡ区全域から埴輪窯・

工房などの埴輪生産ないしそれに関連する遺構群、およびⅡC区で検出した新池古墳ならびにⅠ区に引き続いて検出した律令時代の集落である。さらにⅡA区では古墳時代前期の沼地と古墳時代中期から奈良時代にかけての多くの流路を調査し、かつての自然景観の変化が具体的におえるといった資料を得ることができた。

これらのなかでもとくに埴輪生産遺構は、後述するように、5世紀中頃から6世紀中頃にかけての埴輪窯が時期ごとにまとまって検出され、しかも往時の埴輪生産の実態が復原できるといった良好な遺構群であった。この調査成果は平成元年12月3日におこなった2回目の現地説明会で一般に公開したところである。

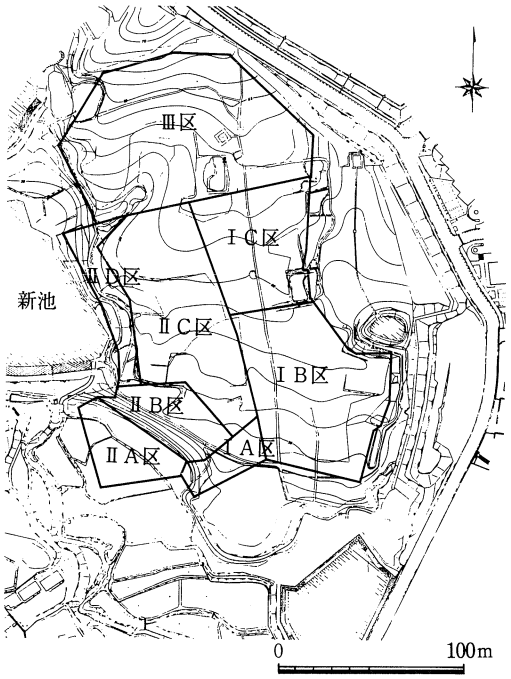


図10　調査区割図

Ⅲ区の調査は西半部(ⅢA区)と東半部(ⅢB区)に2分しておこなった。遺構は少なくて、ⅢA区南辺にある大きな谷とⅢB区の律令時代の残余の部分を検出したにとどまっている。谷の調査では遺棄された古墳時代の木棺と律令時代の水汲み場の遺構が特筆され、それぞれは新池

	調査区	古墳時代	律令時代
段丘部	ⅠA		土器溜
	ⅠB	工人集落（1号～15号住居） 1号～4号溝　2号～11号土坑	南群建物跡（1号～11号建物） 17号土坑ほか
	ⅠC		中央群建物跡（12号～17号建物） 3号井戸　土坑ほか
谷部	ⅡA	12号～16号土坑　1号落ち込み 沼沢地　5～7a号溝　1号井戸 8号溝	7b号溝（上層）
段丘部	ⅡB	A群窯（1号～3号窯）土坑ほか	
	ⅡC	B群窯（4～8号窯） 工房群（1号～3号工房） 新池古墳	中央群建物跡（18号～25号建物） 2号井戸　18･19号土坑 焼土坑ほか
	ⅡD	C群窯（9号～18号窯）	土坑ほか
	ⅢA	木棺	水汲み場
	ⅢB		北群建物跡（26号～31号建物） 土坑ほか

表4　調査区別遺構一覧

古墳ならびに律令時代の集落を考えるうえで貴重な資料になっている。そしてⅢ区の調査途上において、新池遺跡の大要がほぼ判明したことから、平成２年３月24日には新池遺跡発掘調査報告会『よみがえるハニワのふる里』を開催した。その後、現地調査は５月30日までにすべての作業を完了し、同月31日には現場を撤収し調査を終了した。

表４は検出したおもな遺構を調査区ごとに列挙したもので、日誌抄とあわせれば調査の進捗状況がうかがい知れる。今回の調査で検出した遺構は古墳時代から中世、遺物は旧石器から近世にまでおよんでおり、調査区ごとの記述ではかなり煩雑なものとなるので、報告に際しては相互に関連する遺構・遺物群を一括してとりあげることにした。

なお調査の進捗につれて、埴輪窯18基や大規模工房３基など当初の予測を大きく越える重要な埴輪生産関連遺構がつぎつぎと発見されたことから、高槻市教育委員会では平成元年12月13日付けで、文化庁ならびに大阪府教育委員会に報告するとともに、同月21日には江村利雄市長が文化庁をおとずれ、遺構の保存について協議したところ、あらたに検出した遺構の重要性は理解できるので、開発者との協議を十分図るよう指示があった。この指示にもとづいて平成２年１月11日付けで開発者に対し、保存区域の見直しについて協議したい旨を通知し、同月11日にはじめての協議をおこなって以降、しばしば調整する機会をもち、話を詰めていったところである。その結果、埴輪窯18基と工房３基および新池古墳の保存方についての協議がまとまり、同年６月26日付けで史跡指定の同意が依頼されることとなった。そして同年７月17日に史跡指定申請書を提出し、11月16日には文化財保護審議会において「史跡今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡」としての指定答申がだされ、翌平成３年７月20日付で告示されたものである。

以下にこれまでに報告・紹介のあった新池遺跡関係の文献を一覧しておく。

免山　篤1971「大阪府高槻市土室の埴輪窯址」『古代学研究』第62号 古代学研究会

原口正三1973「15 新池窯跡」『高槻市史』第６巻 高槻市

森田克行1989「土室遺跡群の発掘調査について(その1)」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第19回)資料』大阪文化財センター

1989「新池遺跡埴輪窯の調査」『大阪の埴輪窯』大阪文化財センター

1989「土室遺跡群の発掘調査について(その2)」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第21回)資料』大阪文化財センター

1990「3.新池遺跡」『古墳時代の研究』2

1990「埴輪づくりの村」『図説大阪府の歴史』

1990「大阪府高槻市新池遺跡の調査」『考古学研究』第37巻第1号 考古学研究会

1991「新池埴輪製作遺跡」「考古学ジャーナル』No.331

1991「35 大阪府高槻市新池遺跡」『日本考古学年報 42』 日本考古学協会

1992「No.18 新池遺跡」『古墳時代の竈を考える』第一分冊 埋蔵文化財研究会
和田萃・和田晴吾・森田克行1989『新池遺跡』(新池遺跡発掘調査報告会) 高槻市文化財調査概要XV
文化庁文化財保護部1990「今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡」(史跡の追加指定及び名称変更)
『月刊文化財』327号
原秀禎・山崎武・森田克行ほか1993「埴輪製造所遺跡の検討」『古代を考える』54 古代を考える会

新池遺跡調査日誌抄

昭和63年

9月12日(月)～17日(土)　Ⅰ区の除草作業。13日より重機で表土の除去作業をはじめる。西端部で土器溜を検出。

9月19日(月)～24日(土)　ベルトコンベアーを投入。Ⅰ区西部(ⅠA区)で引き続き遺構検出作業。

9月26日(月)～10月1日(土)　ⅠA区の全景の写真撮影および東部(ⅠB区)遺構検出作業。

10月3日(月)～8日(土)　土器溜の土層断面図作成およびⅠB区遺構検出作業。

10月10日(月)～15日(土)　ⅠB区で竪穴住居2基(1・2号住居)や近世の土坑を検出。竪穴住居から須恵器の坏(ON46・TK208型式)が出土。

10月17日(月)～22日(土)　ⅠB区でさらに数基の竪穴住居と数多くの柱穴を確認。住居群の間に5世紀代の溝状遺構や土坑を確認。これ以後、各遺構の平面図・断面図を順次作図。

10月24日(月)～29日(土)　Ⅰ区北端まで重機による表土除去作業を完了する。3号住居を検出。溝状遺構のなかに円筒埴輪片を含む土器溜を検出。同遺構埋土から石鏃(縄文)出土[以後散見される]。27日、ⅠB区の包含層より新羅土器(長頸壷)出土。

10月31日(月)～11月5日(土)　ⅠA区の落ち込みの写真撮影。ⅠB区で引き続き4・5・6・7号住居を検出。竪穴住居は4本の主柱をもつ通有のもの以外に屋内に柱穴をもたないものがある。当該区に住居群の存在を確認する。

11月7日(月)～12日(土)　ⅠB区で引き続き8・9・10・11・12号住居ならびに点在する土坑を検出。住居にはカマドをもつものが相当みられる。また方形の柱穴の幾つかが掘立柱建物跡としてまとまってくる。時期的には7世紀後半から8世紀と考えられる。12日、奈良教育大学に新羅土器の胎土分析依頼。

11月14日(月)～19日(土)　各住居を順次写真撮影する。掘立柱建物跡(1・2・3・4号建物)を認定する。17日、福岡澄男氏来跡。

11月21日(月)～26日(土)　ⅠB区で引き続き13・14号住居を検出。サヌカイトの剥片(旧石器)が出土[以後散見される]。26日、鐸形土製品が出土。

11月28日(月)～12月3日(土)　ⅠB区南半部の清掃・29・30日、写真撮影。ⅠB区西部の柱穴集中部で、倉3棟分を検出。

12月５日(月)～10日(土)　15号住居を検出。9･10･11号建物を認定。ＩＡ区とＩＢ区の境にある近世の大溝を掘削する。６日、江浦洋・市本芳三･合田幸美･清水篤氏来跡。８日、石野博信氏来跡。

12月12日(月)～17日(土)　ＩＢ区北半部で引き続き掘立柱建物跡を検出。祭祀土坑(17号土坑)の調査。

12月19日(月)～24日(土)　ＩＡ･ＩＢ区のコンター測量をはじめる。５・６・７・8号建物を認定。ＩＣ区の遺構検出作業に着手する。

12月26日(月)　年末の休止期間を前に資材整理と現場管理にあたる。

12月27日(火)～昭和64･平成元年1月8日(日)　年末年始のため現場作業休止。

１月９日(月)～14日(土)　ＩＣ区南半部の遺構検出作業。焼土坑を認める。

１月17日(火)～21日(土)　ＩＢ区各遺構の遺物取り上げ作業。ＩＣ区12号建物を検出。

１月23日(月)～28日(土)　ＩＣ区南西部で遺構検出作業。西寄りで素掘りの井戸(３号井戸)と排水溝を検出。25日、原口正三氏来跡。

１月30日(月)～２月４日(土)　ＩＣ区南東部で遺構検出作業。近代の落ち込みを検出。ＩＢ区北半部の清掃。４日、ＩＢ区北半部の写真撮影。

２月６日(月)～10日(金)　ＩＣ区北西部で遺構検出作業。14号建物を検出。６日～８日、ＩＢ区北半部の写真撮影。

２月13日(月)～17日(金)　ＩＣ区中央部で遺構検出作業。近代の大溝を検出。15日、池畑耕一氏来跡。

２月20日(月)～25日(土)　ＩＣ区中央部で遺構検出作業。13･15号建物および奈良～平安時代の溝を検出。21日、山崎信二、堀江門也、中西靖人氏来跡。25日、山中一郎･高橋克壽氏来跡。

２月27日(月)～３月３日(金)　ＩＣ区北端部および東北部で遺構検出作業。16号建物を検出。

３月６日(月)～11日(土)　引き続きＩＣ区東北部で遺構検出作業。17号建物を検出。８日、宮川禎一氏来跡。

３月13日(月)～17日(金)　Ｉ区全景写真の撮影準備と清掃作業。17日、空中写真撮影。

３月20日(月)～25日(土)　ＩＣ区遺物取り上げ作業。22日よりⅡ区(南西調査区)の調査にとりかかる。ⅡＢ区(西南斜面部)の南端より重機で表土を除去する。24日、記者発表。

３月26日(日)　午後１時より第１回現地説明会開催。藤沢一夫氏をはじめ一般参加者850名。

３月27日(月)～31日(金)　Ｉ区の調査終了。ⅡＢ区では試掘調査で検出した埴輪窯を含め、都合３基の埴輪窯(１・２・３号窯[Ａ群窯])を確認。いずれもⅣ期。28日、入江正則氏来跡。

４月３日(月)～７日(金)　Ａ群窯の掘り下げ作業をはじめる。ⅡＡ区(谷部)の北西部より重機で表土を除去する。７日、禰宜田佳男氏来跡。

４月10日(月)～14日(金)　ⅡＢ区北半部の遺構検出作業。Ａ群窯にともなう排水溝(西溝)を確認。Ａ群窯の調査と併行して実測作業を順次すすめる。

４月17日(月)～22日(土)　ⅡＡ区の遺構検出作業。ⅡＢ区１号窯の窯体手前側半分に炭が充満し、その下

方に焼土面が認められる。

4月24日(月)～28日(金)　引き続きⅡA区の遺構検出作業。中央セクションの写真撮影と解体作業。25日、宮脇薫氏、26日、西口陽一氏。28日、高橋克壽氏来跡。

5月1日(月)～13日(土)　ⅡA区の北寄りで自然流路(7b号溝)を検出。埋土下層から6世紀～7世紀前半の遺物が出土。ⅡB区のA群窯前庭部で柱穴を検出。

5月15日(月)～19日(金)　ⅡA区の北寄りで円筒埴輪(V期)を転用した井戸(1号井戸)を検出。ⅡB区の1号窯と2号窯の焚口はなにかの事由で滑落していると判断される。

5月22日(月)～27日(土)　ⅡA区でさらに自然流路(7a号溝・8号溝)を検出。

5月29日(月)～6月3日(土)　ⅡA区の西寄りで石組土坑(14・15号土坑)を検出。29日、西谷正氏来跡。30日、上田睦氏来跡。1日、A群窯調査途上の写真撮影。3日、旧ソヴィエト科学アカデミー一行(デレビャンコ団長以下5名、随行5名)、石井清司・早川和子氏、3日、戸原和人氏来跡。

6月5日(月)～10日(土)　ⅡA区の南半部の遺構検出作業。12号・13号土坑を検出。

6月12日(月)～17日(土)　引き続きⅡA区の南半部の遺構検出作業。古墳時代の沼沢地を検出。17日、白神典之・池峰龍彦氏ほか1名来跡。

6月18日(日)～24日(土)　ⅡB区の南半部の遺構検出作業。A群窯排水溝(東溝)を検出。19日、松本敏三氏、置田雅昭氏来跡。

6月26日(月)～7月1日(土)　ⅡA・ⅡB区の清掃および写真撮影。1日、空中写真撮影。

7月3日(月)～8日(土)　ⅡC区(丘陵部)南端より重機で表土を除去する。3日より5日間、追手門大学博物館学実習生(5名)が参加。

7月10日(月)～14日(金)　ⅡC区の南端部から遺構検出作業をはじめる。奈良時代の落ち込みや近世の溝を検出。

7月17日(月)～22日(土)　ⅡA区の1号井戸写真撮影後、埴輪(井戸枠)を取り上げる。ⅡB区1号窯完掘。ⅡC区の重機による表土除去作業と併行して、ⅡD区(西側斜面部)の表土を除去する。21日、松江実千代氏来跡。

7月24日(月)～29日(土)　ⅡB区2号窯完掘。24、25日、松江実千代氏来跡。ⅡA区各遺構の花粉分析資料を採取する。26日、入江正則・亀島重則・積山洋・一瀬和夫・笠井敏光・田代克己・奥井哲秀・森岡秀人の各氏、来跡。27日、原口正三氏来跡。

7月31日(月)～8月5日(土)　ⅡC区で大形竪穴住居(2号工房)を検出。柱組は2間×2間で、各柱穴には2本ずつの柱痕跡が認められる。

8月7日(月)～12日(土)　ⅡA区の調査完了。8日、6号溝から大刀形埴輪出土。ⅡC区で19号建物を検出。10日、中村享史氏来跡。

8月13日(日)～16日(水)　盆休みのため、現場作業休止。

8月17日(木)～26日(土)　ⅡB区3号窯および排水溝を完掘。A群窯全景写真撮影。ⅡC区の北寄りでさらに大形の工房(3号工房)を検出。22日、都出比呂志氏、24日、辻本武氏ほか5名、26日、寒川旭氏来跡。

8月28日(月)～9月1日(金)　ⅡC区の3号工房で、はじめて円筒埴輪を用いた粘土ピットを確認する。また3号工房の北西部で削平された円墳(新池古墳)を検出。また南寄りでも大形の工房(1号工房)を検出。29日、富田好久・藤永正明、新田康二の各氏来跡。

9月4日(月)～9日(土)　ⅡC区北部の遺構検出作業。1号工房でも粘土ピットを検出、また周溝からも円筒埴輪やまとまった量の粘土が出土する。6日、箕面市立第3中学校地歴部、9日、宮脇薫・市本芳三氏来跡。

9月11日(月)～15日(金)　新池古墳の周溝および主体部の調査。主体部は横穴式石室。工房は3基とも、2号工房と同じ柱組であることが判明。

9月18日(月)～22日(金)　ⅡC区東南部で遺構検出作業。周溝をめぐらして四方に柱穴を配した墓(蔵骨器)および素掘りの井戸(2号井戸)を検出。東北部では3間×7間の大形の掘立柱建物(20号建物)を検出。

9月25日(月)～30日(土)　1号・2号工房の写真撮影をする。文化財啓発映画の収録。福岡澄男・村上年生氏来跡。

10月2日(月)～7日(土)　3号工房および工房群の全景写真撮影。引き続き各工房の実測作業にはいる。

10月9日(月)～14日(土)　ⅡC区東部の遺構検出作業。散在する方形焼土坑や蔵骨器を調査。9日、寒川旭氏来跡。

10月16日(月)～20日(金)　引き続きⅡC区東部の遺構検出作業。新池古墳の石室調査。17日、和田萃・児玉泰氏、18日、寒川旭氏、19日、河原純之・橋本澄夫・佐藤一夫氏、20日、全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会研修会一行来跡。

10月23日(月)～28日(土)　ⅡC区北東部の遺構検出作業およびⅡC区全景撮影。

10月30日(月)～11月11日(土)　ⅡD区の遺構検出作業。10基の埴輪窯(C群窯・Ⅴ期)の輪郭をつかむ。30日、原口正三氏、1日、早川和子氏、10日、上野邦一氏、11日、免山篤氏、町田章氏、シャルロット氏、堀江門也氏来跡。

11月12日(日)～18日(土)　ⅡB区A群窯の埴輪取り上げ後の写真撮影をする。引き続きⅡD区の遺構検出作業。南半部でⅣ期の埴輪窯(B群窯)を検出する。また北端部で開析谷の開口部末端を検出する。記録映画の収録。14日、宮脇薫氏、16日、石野博信・林日佐子氏、泉武氏、伊賀高弘氏、中井貞夫氏来跡。

11月20日(月)～25日(土)　ⅡD区南半部の埴輪窯が5基(B群窯)と確定し、新池遺跡の埴輪窯が全部で18基であることが確認される。25日、ⅡB・C・D区全域の空中写真撮影をおこなう。Ⅲ区の草刈りをはじめる。記録映画の収録。20日、勝部明生氏来跡。22日、西谷正氏、石井清司氏来跡。

11月27日(月)～12月2日(土)　ⅡC区北端部の遺構検出作業。29日、30日、記者発表。2日、井藤徹・石神

怡・瀬川健・泉本知秀氏、宮川徙、三宅俊隆、工藤雅樹の各氏および奈良大学学生一行来跡。

12月３日(日)　午後１時より第２回現地説明会開催。奥村清一郎氏をはじめ、一般参加者1120名。

12月４日(月)～８日(金)　ⅡＤ区の開析谷の下層で埴輪群を検出。記録映画の収録。４日、上田宏範氏、和田晴吾氏、川上貢氏、林博通氏、岩崎誠・小田桐淳・中島皆夫氏、奥田哲通氏来跡。

12月11日(月)～15日(金)　Ⅱ区のコンター測量をはじめる。重機でⅢ区の南西部から表土を除去しはじめる。11日、丸山竜平氏来跡。12日、高槻市教育委員、市議会議員団視察。15日、塩谷修氏、藤原学・西本安秀氏、京都大学考古学研究会一行来跡。

12月18日(月)～23日(土)　引き続きⅢ区の遺構検出作業。ⅡＣ区の各遺構の遺物取り上げ作業。18日、植野浩三氏、20日丸山潔・丹治康明・千種浩の各氏来跡。

12月25日(月)～28日(木)　Ⅲ区北部で若干の土坑や落ち込みを検出。埴輪群の写真撮影。年末の休止期間を前に資材整理と現場管理にあたる。喜谷美宣・宮本郁雄・森田稔の各氏来跡。

12月29日(金)～平成２年１月５日(金)　年末年始のため現場作業休止。

１月６日(土)～13日(土)　Ⅲ区北東部で土坑や柱穴、溝を検出。引き続き開析谷を掘削。記録映画の収録。12日、宇津木秀甫氏、出原恵三氏、13日、野口尚志氏、岸本道昭・木下亘氏来跡。

１月16日(火)～19日(金)　Ⅲ区北東部で掘立柱建物(26・27号建物)を検出。Ⅲ区の実測作業を順次おこなう。16日、吉水真彦・児玉泰の各氏来跡。

１月22日(月)～27日(土)　Ⅱ区のコンター測量終了。Ａ群窯ならびに工房群の地磁気測定作業をおこなう。埴輪群の遺物の取り上げ。23日、宮本長二郎氏、24日、藤田憲司氏ほか２名、26日、広岡公夫氏来跡。

１月29日(月)～２月２日(金)　Ⅱ区の埴輪群の遺物の取り上げを完了。Ⅲ区では重機による開析谷埋土上層部分の掘削を完了する。

２月５日(月)～10日(土)　引き続きⅢ区北東部で遺構検出作業。28・29・30号建物を検出。開析谷の下層で木器群と多数の甕片を検出。７日、三島地区教育委員視察。早川和子氏来跡。

２月13日(火)～16日(金)　降雨により開析谷の大セクションが崩壊。大半を修復作業に費やす。

２月19日(月)～24日(金)　引き続きⅢ区東北部で遺構検出作業。ⅡＣ区工房跡の粘土のサンプリング作業をはじめる。

２月26日(月)～３月３日(土)　Ⅲ区東部で遺構検出作業および開析谷の調査。開析谷の木器は遺棄された木棺材と推定される。26日、高槻市社会教育委員一行視察。

３月５日(月)～10日(土)　引き続きⅢ区東部の遺構検出作業および開析谷の調査。開析谷の甕片は一個体の大形甕にまとまり、ちかくに湧水点があることから、現位置で水甕として据えられていたものと判明。木器群の写真撮影。

３月12日(月)～16日(金)　引き続きⅢ区東部の遺構検出作業および開析谷の調査。湧水量のデータをとりはじめる。

3月19日(月)～24日(土)　Ⅲ区東南部の遺構検出作業および開析谷の調査。24日、笠井敏光氏来跡。24日午後1時より、新池遺跡発掘調査報告会開催。石井清司氏ほか一般参加者270名。於高槻市役所。

3月26日(月)～31日(土)　引き続きⅢ区東南部の遺構検出作業。東部で31号建物を検出。26日、塚田良道氏来跡。

4月2日(月)～6日(金)　引き続きⅢ区東南部の遺構検出作業。

4月9日(月)～14日(土)　ⅡC区工房群の遺物除去後の写真撮影をおこなう。

4月16日(月)～21日(土)　Ⅲ区開析谷の東端部の調査および排土作業。

4月22日(日)～28日(土)　Ⅲ区全域の清掃作業および空中写真撮影。

5月1日(火)～12日(土)　Ⅱ区のA群窯・B群窯・C群窯・工房群および新池古墳などの保存遺構を土嚢やシートで保全する。

5月14日(月)～18日(金)　Ⅲ区の残余の実測作業およびコンター測量をはじめる。

5月21日(月)～26日(土)　開析谷の湧水点に大甕を復原設置し写真撮影する。開析谷を断ち割りしたトレンチを設け、花粉分析資料を採取するととも地山の状況を調査する。Ⅱ区の保存遺構を厚さ約20cmの川砂で被覆する。26日、松江実千代氏来跡。

5月28日(月)～30日(水)　開析谷のトレンチで花粉分析資料を採取する。Ⅱ区の保存遺構はさらに盛土し、後日の整備に期す。30日、那須孝悌氏来跡。

5月31日(木)　すべての現場作業を終了し、調査資料および資材を撤収する。

第３章　遺構と遺物

第１節　遺物の分類

第２節　段丘部の調査

Ⅰ　埴輪窯

ⅰ）Ａ群窯　１号窯～３号窯 排水溝　１号土坑 ピット群 灰原 包含層

ⅱ）Ｂ群窯　４号窯～８号窯

ⅲ）Ｃ群窯　９号窯～18号窯

Ⅱ　埴輪工房　１号工房～３号工房 包含層

Ⅲ　工人集落　１号住居～15号住居　１号溝～４号溝

２号土坑～11号土坑　包含層

Ⅳ　新池古墳

Ⅴ　開析谷

Ⅵ　包含層の石器

第３節　谷部の調査

Ⅰ　土坑・落ち込み　12号土坑～16号土坑　１号落ち込み

Ⅱ　沼沢・自然流路 沼沢地　５号溝～７号溝

Ⅲ　井戸　１号井戸　８号溝

Ⅳ　包含層の遺物

第４節　律令期集落の調査

第３章　遺構と遺物

第１節　遺物の分類

今回の新池遺跡の調査では古墳時代から中世にいたる各種の遺構を検出（付　図）したのをはじめ、遺物は旧石器時代から近世におよんでいる。本章では古墳時代の遺構と遺物を中心に報告し、律令期の遺構・遺物については概述している。報告の手順としては、それぞれの遺構群の把握を一義的にとらえるために、調査区ごとに記述をすすめる。そして遺構群を構成する個別遺構の報告を主眼としながら、あわせて遺物を紹介することにした。

報告する古墳時代の遺構は段丘部（PLATE 3･4、口絵２）で検出した埴輪窯Ａ群（窯３基・排水溝・土坑１基・ピット群・灰原）、Ｂ群（窯５基）、Ｃ群（窯10基・灰原）、工房（竪穴式工房３基）、工人集落（竪穴住居15基・溝３条・土坑10基）、新池古墳、開析谷、そして谷部（PLATE 32、口絵９）で検出した土坑群（土坑５基・落ち込み１基）、沼地、自然流路（３条）、井戸（井戸１基・排水溝１条）である。時期的には前期から後期までの遺構があるが、中心となるのは中期から後期にいたる埴輪生産遺構群である。

遺物は、原則として埴輪、須恵器、土師器、土製品、石製品、鉄製品、その他の順で報告する。埴輪はまずⅣ期とⅤ期(1)に大別し、円筒、朝顔形、形象の序列にしたがって記述する。

Ⅳ期では完形品が少ないため、それぞれの部位について説明を加えたのち、いくつかの個別品を概述する。円筒（図11）についてはおおむね口径50cm以上を大型、50cm未満で30cm以上を中型、30cm未満を小型として区分した。大型は全形をうかがうものがないことから、口径60cm以上を大型Ⅰ類、60cm未満で50cm以上を大型Ⅱ類とした。中型については、口径35cm未満で口縁部が高く、タガをまばらにほどこすやや特異なものをⅡ類として分別し、その他の大半のものをⅠ類とする。またⅠ類は４本タガのものをⅠa類、５本タガのものをⅠb類とし、

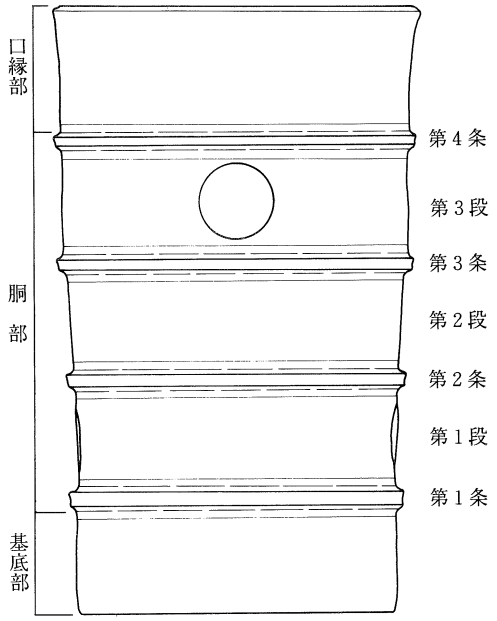


図11　円筒埴輪模式図

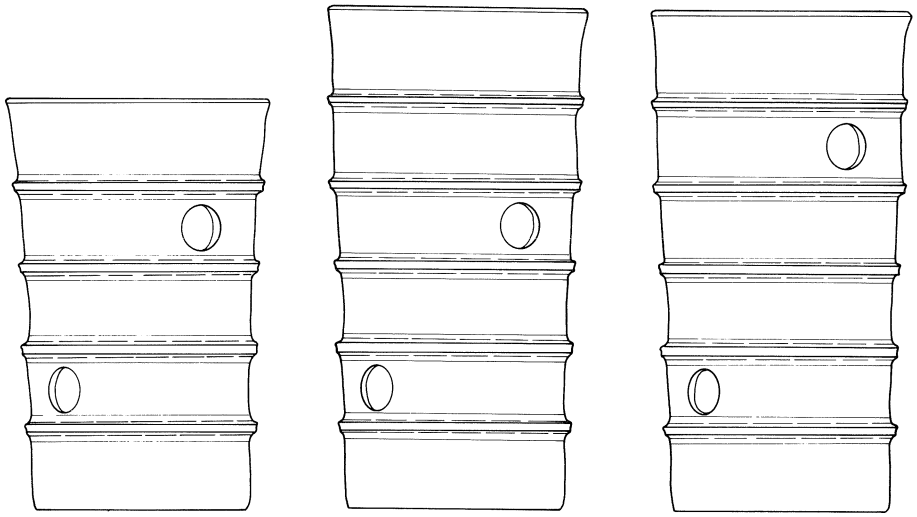


図12　中型Ⅰ類円筒埴輪の分類

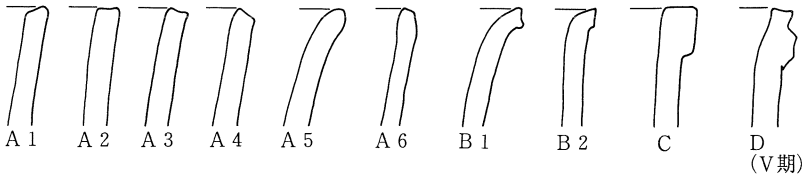


図13　円筒埴輪口縁部分類図

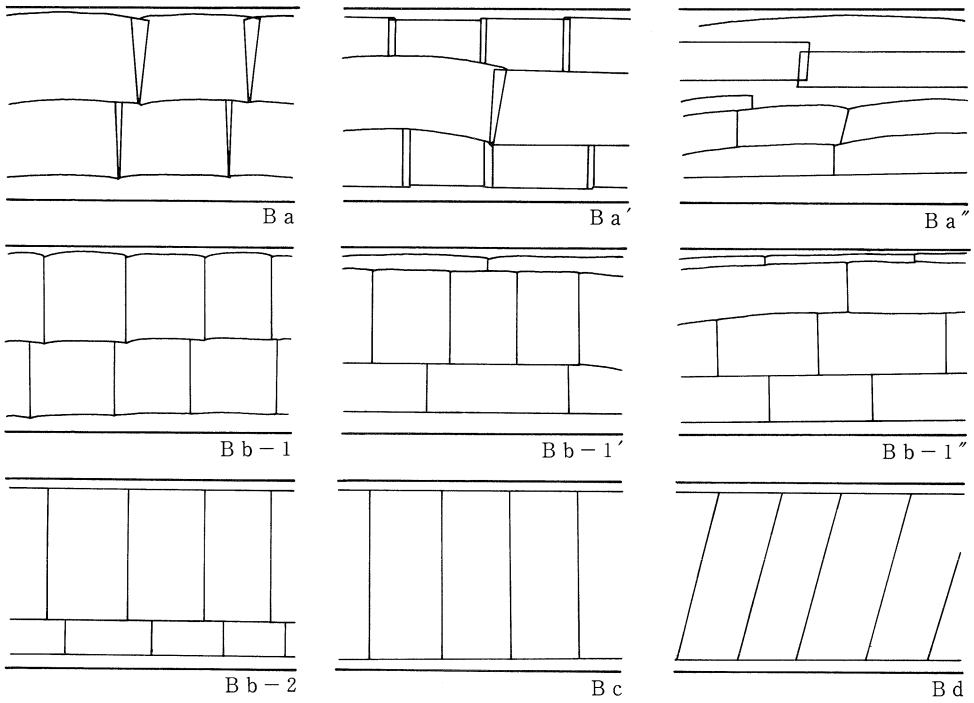


図14　B種ヨコハケの細分（一瀬氏の分類より）

それぞれはさらに第１段と第３段にスカシ孔のあるものをＩa_1類・Ｉb_1類、第１段と第４段にスカシ孔のあるものをＩb_2類とする(図12)。口縁部は断面の形態によって分類した(図13)。基本的には直口のＡ類、外反ないし屈曲するＢ類、外辺部に粘土帯を貼り付けた段状口縁のＣ類、に大別した。そして、Ａ類は端部が内傾するＡ1類、水平のＡ2類、外傾するＡ3類、外傾しつつ上縁部が尖りぎみになるＡ4類、丸くおさめるＡ5類、上端にわずかな面をもちながら外縁部をつよくヨコナデするＡ6類にわけられる。Ａ1類からＡ4類については、ヨコナデによって外縁部がわずかに突出したり、上端面がくぼむこともしばしばであるが、その度合によって細別することはあえてしなかった。またＢ類は単純に外反するＢ1類と屈曲して外折するＢ2類に分けられる。調整は２次調整の有無とハケ調整手法の細別(図14)を観察した(2)。胴部はこの種別を基本に分類しながら、口縁部や底部のハケ調整についても、この手法を援用し記述している。タガは断面の形状によって、台形状に突出する１類、上辺部がほぼ水平な２類、下辺部がほぼ水平な３類、長方形状に高く突出した４類に分けている。タガの外端面はほぼ平坦な台形とわずかにへこむＭ形がある(図15)。さらには断面の形状を知るために、計測可能なものについては各辺の数値を観察表(表48)に記載している。またタガの間隔については、割り付けに際してひかれたヘラ描き沈線の間隔をとらえるためにタガの心々距離を計測し表記した。スカシ孔は原則として２孔一対で、隔段では直交してあけられている。形状は円形が大半で、まれに長方形と三角形がある。底部については、粘土帯を左まわりにおいてその末端を外側に接合して輪台をつくる左巻きの手法をとるのか、あるいはその逆回りの右巻きであるのかを識別するとともに調整手法を観察した。

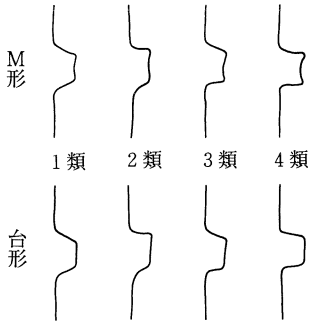


図15　円筒埴輪タガ分類図

朝顔形については、便宜的に口径80cm以上の大型、80cm未満で60cm以上の中型、60cm未満の小型に分類した。口縁部については単純に外反するＡ類と曲折して外反するＢ類がある。Ａ類はさらに端部が外傾する面をもつＡ1類と垂直な面をもつＡ2類、Ｂ類は端部が垂直ないし垂直にちかいＢ1類と明確に内傾するＢ2類にわけられる(図16)。中位の段状部は断面形態と接合手法について観察している。

円筒と朝顔のヘラ記号については、その都度記述している。形象はほとんどが破片で、家形・

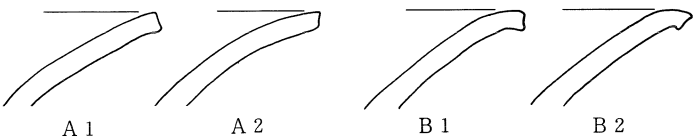


図16　朝顔形埴輪口縁部分類図

器財・人物・動物の順に列挙した(3)。

埴輪の色調は大きく淡黄灰色・淡灰褐色・淡黄褐色の黄褐色系、淡褐色・赤褐色・茶灰褐色などの褐色系、暗灰色ないし暗青灰色の灰色系、灰白色ないし淡灰色の乳白色系の４つに分けられるが、同一個体であっても部位によって微妙に異なる場合もあり、埴輪窯などでは破損後の再加熱によってまったく色調の異なる破片が接合することもしばしばで、その分別は便宜的なものにならざるを得ない。なお窯や工房などの資料については、観察表に一覧しているが、そのほかのものは個別に記している。胎土については細砂を適度に混ぜた良質なものが多い。色調との相関などの個別事象については、必要に応じて詳述している。

Ⅴ期の埴輪の記述にあたっては、基本的に口縁部やタガの形状など、Ⅳ期の分類の視点を踏襲しているが、規模については口径45cm以上でタガを10条以上ほどこす長大なものも大型として取り扱っている。口縁部についてはＡ類の外縁直下に突帯を有するものをＤ類として付け加えている(図13)。またヘラ描き沈線によるタガの割り付けなどはⅤ期にはみられないが、タガの間隔を心々距離で測定することなどは同じである。なおⅤ期の埴輪は、Ⅳ期の埴輪とちがって、個別分散的に出土するものが多数を占めるため、個々の観察を中心に記すことにした。その大要や類型化については、次年度以降に予定されている18号窯の調査をまって、灰原の一群とともに報告したいとおもう。

須恵器と土師器は器種別に羅列し、編年観は現行のもの(4)にしたがった。なおバリエーションの多い割に、良好な資料を欠く土師器については若干の具体例をあげて補足しておく(表5)。各器種とも口径や器高などの計測値によって大別したあと、それぞれの属性にもとづいて記述をすすめていく。壷は口径15cm以上を大形、15cm～10cmを中形、10cm未満を小形とした。また口縁部の形態により、二重口縁壷、広口の直口壷、直口壷などにわけた。鉢は口径20cm以上を大形、20cm未満を小形とし、口縁部の分類では有段のもの、外反するもの、直口のものがある。また直口のものには短く立ちあがるものと内弯ぎみにおわるものがある。高坏は口径20cm以上を大形、20cm未満を小形とする。口縁部は、外反するものと内弯するものがあり、また坏部外面に稜があるものとないものの別がある。ただし、大形については口縁部が外反し稜のあるものに限られる。柱状部はほとんどのものに棒状刺突痕が認められ、中空部上端を調整したものは少ない。甕は器高16cm以上の大形、16cm～12cmの中形、12cm未満の小形がある。口縁部が内弯ぎみにカーブし、上端に面をもって内側に肥厚するいわゆる布留式と、端部に面をもつものの内縁が肥厚しない布留式の退化したもの(5)、そして単純に外反するものがあり、また有段のものも若干みられる。体部には厚手と薄手があるが、厳密な区分としての表記ではなく便宜的にもちいている。このほかにも他地域から搬入されたとみられるものがある。甑は口縁部が直口するものと短く外反するものがある。調整手法については、土師器の遺存状

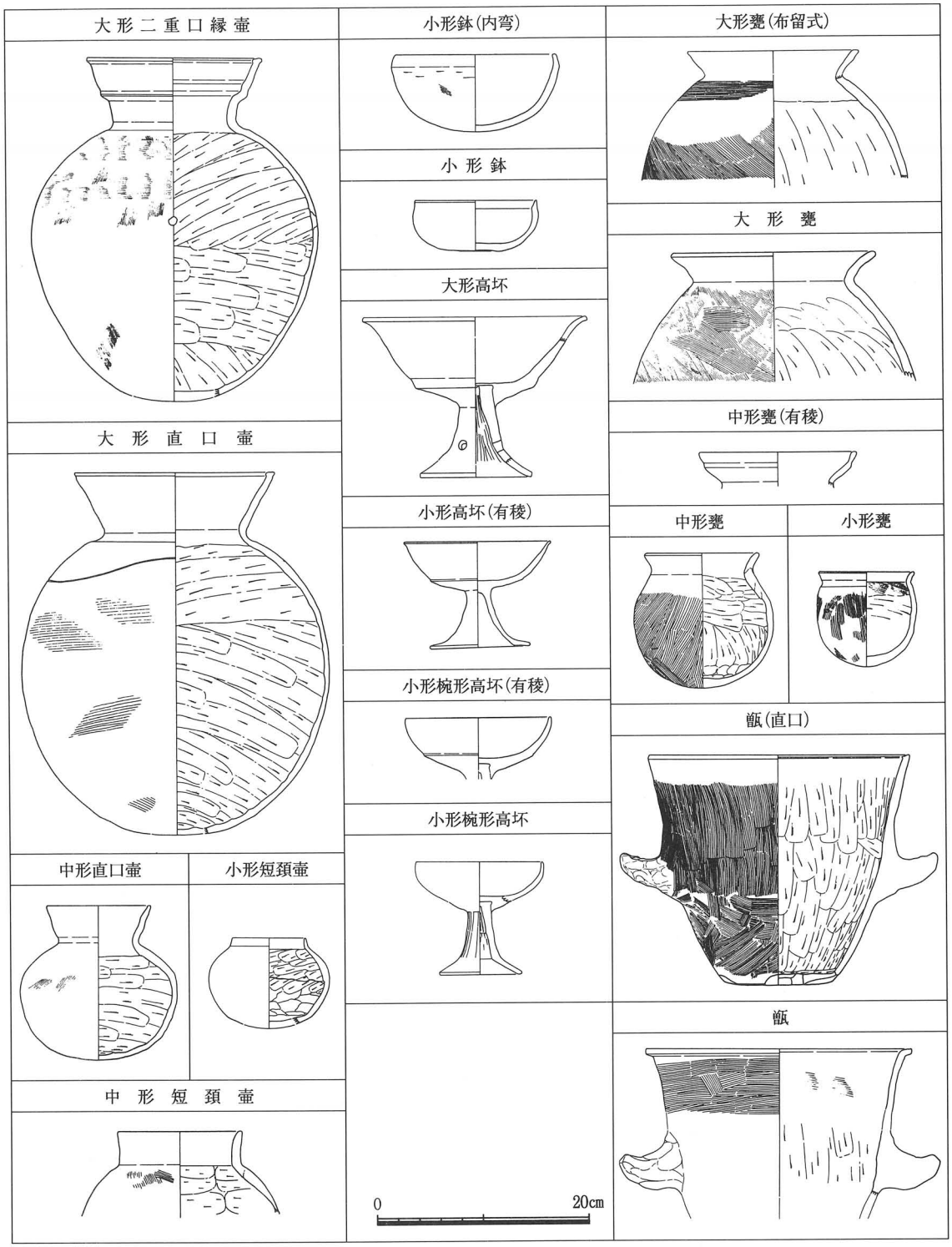


表5　新池遺跡出土土師器主要器種一覧表（古墳時代　前期～中期）

況が劣悪なため、観察できないものも多い。可能なものについては略記している。色調は、壷・鉢・高坏がおおむね淡灰褐色ないし淡褐色で、甕が茶灰褐色ないし淡褐色を呈している。胎土については、壷・鉢・高坏がおおむね精良な粘質土を用いているのに対し、甕は全般に砂粒を多く含んでいる。なお土師器の色調・胎土などについては、できるかぎり個別に記述することにした。また包含層出土の土器は古墳時代以前の希少なものもあわせて略述している。土製品以下については、その都度説明を加える。

注

1．川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号

2．B種ヨコハケについては一瀬和夫1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要・V』大阪府教育委員会の細分案によっている。

3．埴輪の分類や記述にあたっては、上記の文献のほか、石井清司・伊賀高弘ほか1991「上人ケ平遺跡」京都府遺跡調査報告書第15冊、高橋克壽1988「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』71巻2号などを参照させていただいた。

4．須恵器については、おもに田辺昭三氏と中村浩氏の一連の研究、土師器については寺澤薫氏や米田敏幸氏らの研究に準拠している。本書での型式名の表記にあたっては、新池遺跡での遺物の出土状況に即応させるために、田辺1966『陶邑古窯址群』・同1981『須恵器大成』・同1982「初期須恵器について」『考古学論考』と米田「土師器の編年1近畿」『古墳時代の研究』6を参照した。なお土師器については、米田氏が「布留式期V」などとしたものを「布留式V」と呼び変えている。ただ土師器を庄内式古相(庄内式I・II)、庄内式新相(庄内式III・IV)、布留式古相(庄内式V・布留式I・II)、布留式新相(布留式III・IV)、布留式以後(布留式V以後)の5つの様相に呼び分けることにはしたがった。

5．本来は布留式の系統下にあるものとして布留系としたいところだが、研究史的にみて、「布留系」甕は布留式甕の前段としてとらえられていることが多く、便宜上、布留式の名称を踏襲して用いた。近畿地方の古式土師器のもっともあたらしい概論である[米田1992]でも、庄内系<器種>、布留系<器種>という表記がしばしばみられるが、「系」の用語規定には少なからず混乱が認められる。当該研究者間での是正を期したいと思う。

第２節　段丘部の調査

Ⅰ　埴輪窯

埴輪窯は段丘の南西部から西側の斜面地でおよそ３つのグループに分かれて検出された。南から順次Ａ群、Ｂ群、Ｃ群と呼称する。なおＢ・Ｃ群については昭和62年の確認調査の結果から、事前に開発者と協議し、その保存方が了解されていたので、調査は最小限にとどめた。

ｉ）Ａ群窯

Ａ群窯は南西方向に面した標高49ｍから55.5ｍの斜面地にあり、並列して築かれた３基の埴輪窯とこれらを半環状に取り囲む１本の排水溝および若干のピット類、そして灰原によって形成されている（口絵３、図17、PLATE５）。窯場は後世の削平や砂防用の水路によって分断され、３基の窯はいずれも煙出し部と焼成室の中央付近を消失していた。排水溝についても頂部

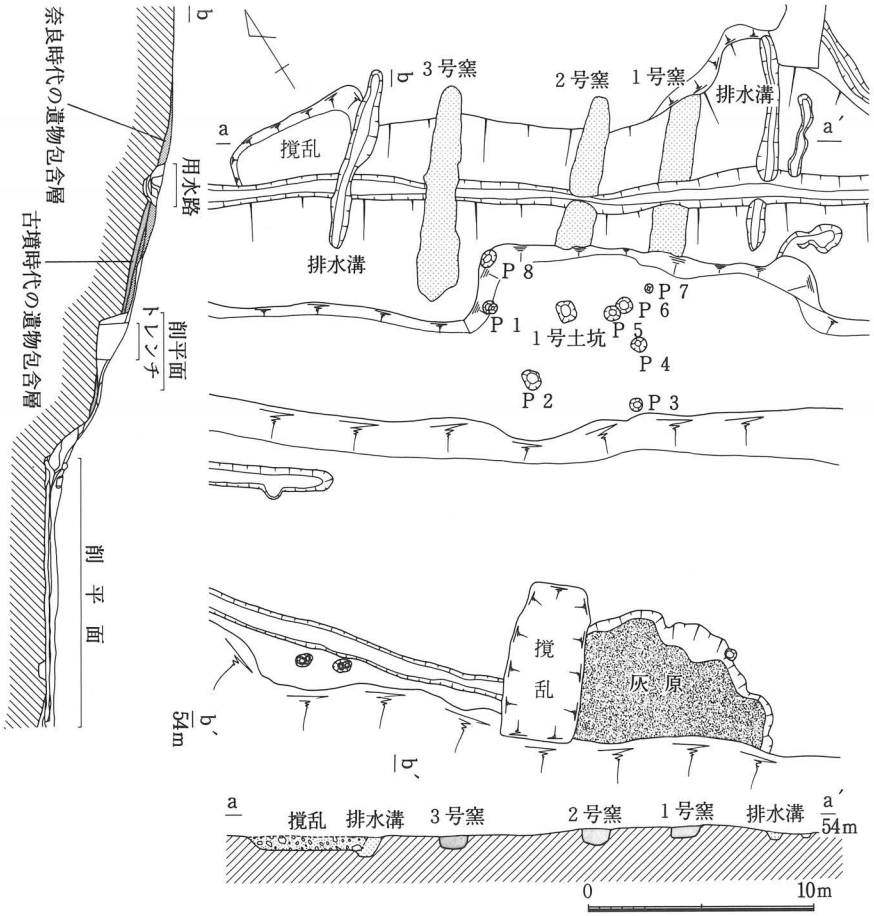


図17　Ａ群窯 平面図・断面図

の大半と南端部が、また谷部にある灰原も水田の造成によって、その大半が失われていた。

1号窯

南端にある1号窯は現存長7.8m、中央部での幅1.4m、同部での現存深0.65mを測る(図18～20、PLATE 6・7)。全体としては焚口側がわずかにひろがる細身の形状を呈し、平面図からは燃焼室と焼成室との境がよみとれない。中心軸の方向はN－41°－Eで、床面の傾斜は20°～

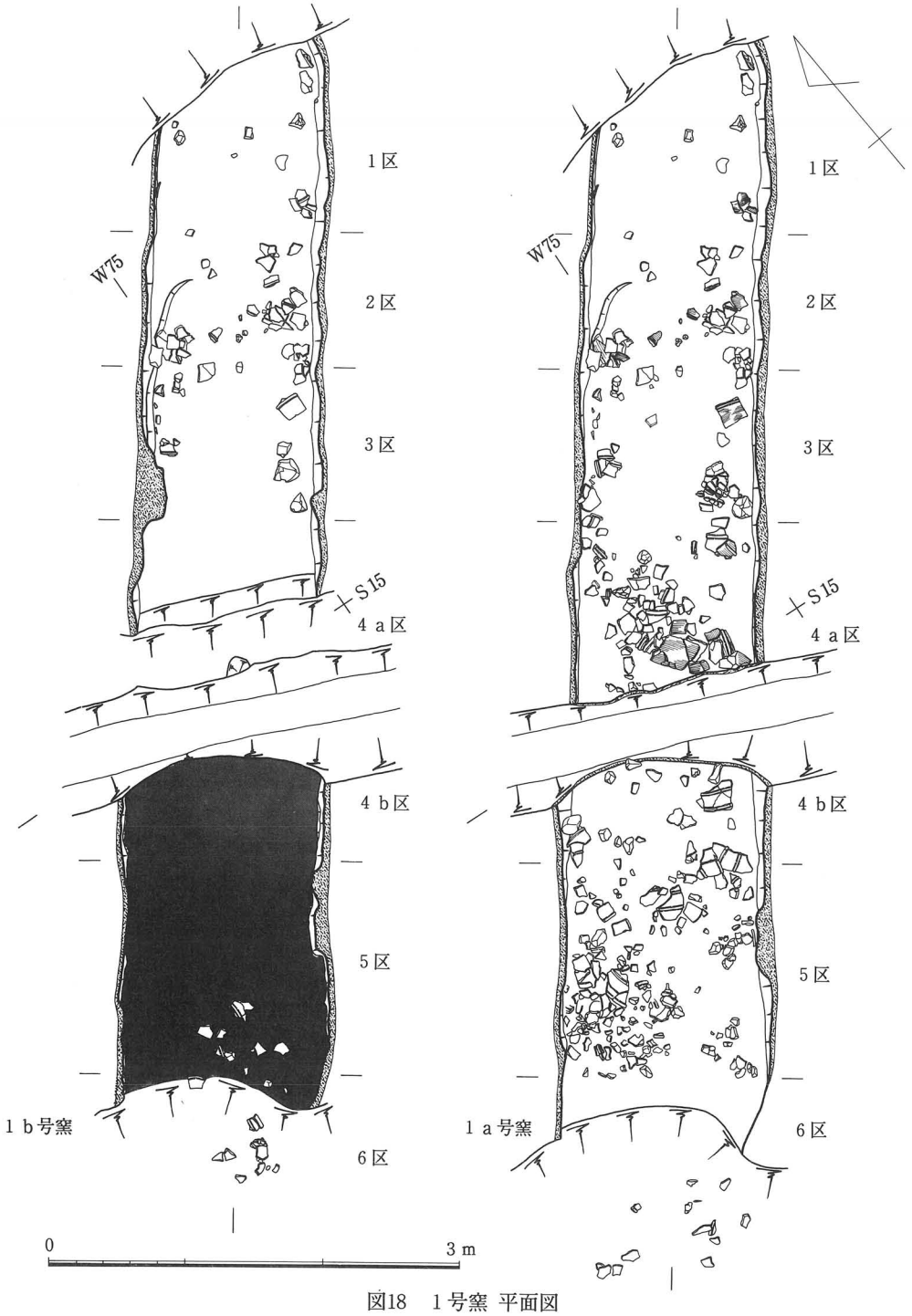


図18　1号窯 平面図

22°である。窯の構築は斜面地を樋状に掘りくぼめたのちに天井を架構している。壁面と床面は素掘りのままで、粘土などを貼りつけたような痕跡も認められなかった。火熱による窯周縁の焼土の厚みは、5～8cmである。天井については、窯体内の埋土上部からスサ(長さ数cmの切藁など)を混ぜ込んだ焼土塊(PLAT E63c－**91・92**)が多数出土していることから、塗り固めて成形していたものと判断され、いわゆる半地下式窯と考えられる。あらためて焼成室(おおよそ1区～5区)での基本的な土層を3・4区間セクションの横断面図によって記すと、上層から順に流入土層、崩落土層、堆積土層となる。流入土層は廃窯後に窯内に流れ込んだ土砂類で、黄灰色ないし淡黄褐色の砂質土からなり、土層内からは7～8世紀の土器片が出土している。崩落土層は廃窯後しばらくして落ち込んだ黄褐色や淡赤褐色の土層で、天井材をはじめ多くの焼土を含むほか、少量の埴輪片や若干の土器片も認められた。堆積土層は操業中に堆積

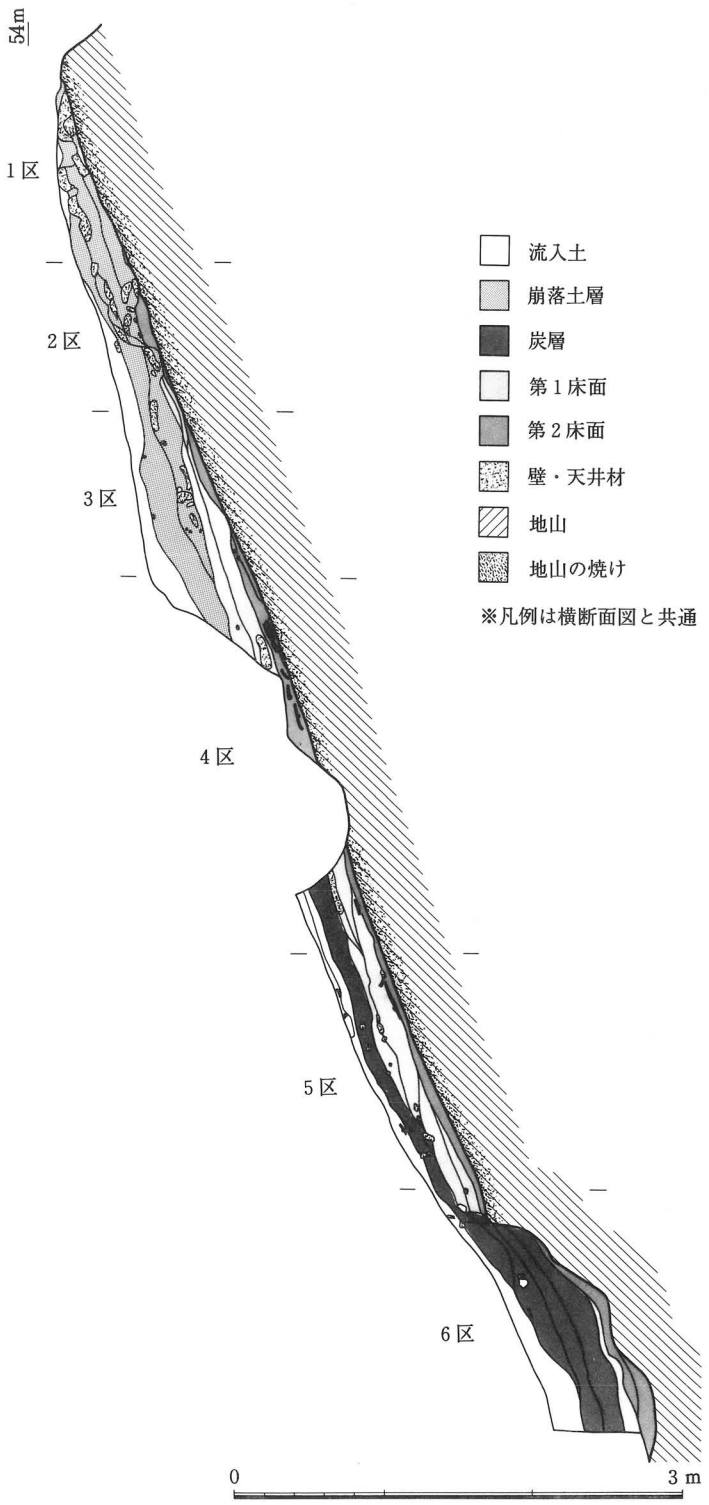


図19　1号窯 縦断面図

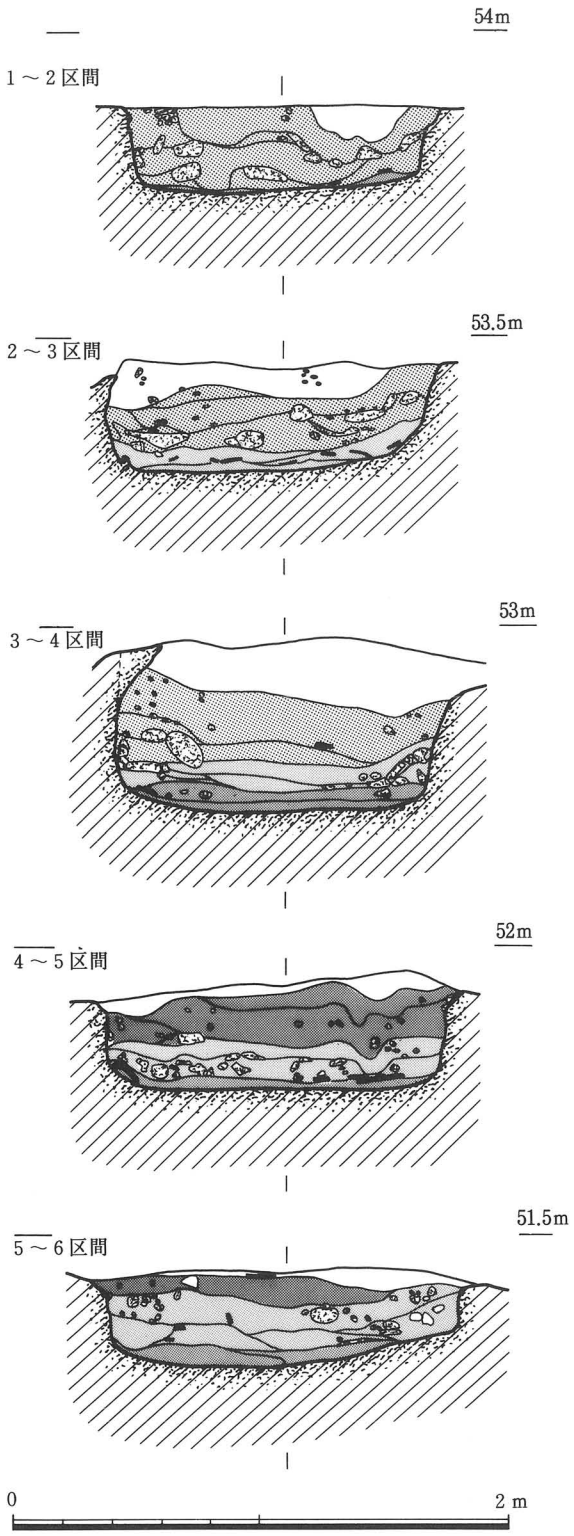


図20　1号窯 横断面図

していった黄褐色ないし赤褐色の焼土層である。なかからは数多くの埴輪片が出土している。ところが5区・6区付近での土層をみると、流入土層の直下に埴輪片を含む分厚い炭灰層があり、しかもその下の堆積土層は多くの天井材を含む上層部分と天井材をまったく含まない下層部分の2層に大きくわかれることが観察された。さらに上層は埴輪も少なく、出土状態も散漫なのに対し、下層では4区までの床面と同様に多くの埴輪片が出土しているのである。こうした土層の状態から復原される1号窯の在り方は、操業途中で4区から6区にかけての天井が崩落したあと、残存していた3区以上をそのまま焼成室として使用し、4a区付近を燃焼室、4b区から6区の窪地を灰原の一部とする窯として使い回していたことが考えられる。そこで前者の当初窯を1a号窯、後者の短い窯を1b号窯として記述をすすめることにする。なおこの窯の6区すなわち1b号窯の燃焼室に相当する部位で落差0.8mの地滑り跡がみられるが、これは後述する2号窯の地滑り跡と一連のもの(PLATE11a)で、その詳細については第4章第1節Ⅱ項で報告している。調査の知見としては、1a号窯の床面ごと滑り落ちていること、地滑り面が1a号窯の崩落土層を切り込んでいること、1b号窯の灰原の炭灰が落ち込んでいること、地滑り部直上の流入土層に断裂がみられないことなどが確認されている。こうした遺構の観察から地滑りの発生時期をとらえるならば、

1b号窯の廃窯後で、かつ7世紀以前ということになる。

1a号窯は焚口部・煙出し部とも失われているので、全長はわからないが、平面図の6区東側の壁面がやや内弯しているところから、燃焼室と焚口部の境は間近と考えられる。先端部については床面が直線的に断ち切れているところから、ただちに煙出し部へ移行するような形状にはなっていない(1)。また窯の底部から壁面下半にかけての横断面形をみると各セクションとも床面はかなりフラットで、壁面はほぼ垂直ないし外傾ぎみのところが多い。3～4区間セクションの西壁面上方にみられる内傾する板状焼土は1b号窯廃窯後に壁面が倒れ込んだと観察されることから、窯体の最大幅はもう少し上位にあったとおもわれる。1～2区間セクションの東側などにみられる窯壁の剥離痕はどれも補修した痕跡はなく、剥落後もそのままにして使用していたようである。したがって、その部位の地山は剥落後の火熱により、損壊した面に沿ったかたちで赤く焼けたラインがゆがんでいる。床面は当初、窯の掘削底面をそのまま使用していたが、焼成を繰り返すうちに次第に焼土が堆積し、それにつれて床面もあがっている。この焼土層(堆積土層)は縦断面図にも示したように1区ではあまりみられず、2・3区では断続的に、4区から6区にかけておおむね一様に堆積していた。厚さは薄いところで5cm前後、分厚いところで15cm前後である。焼土層からは多くの埴輪片が重層的に検出されているが、土層内に操業停止期間がうかがえるような流入土や腐食土などの間層はみられなかった。

1a号窯の遺物としては埴輪と岩石が主なもので、ほかにわずかな土器片がある。埴輪は円筒をはじめ朝顔形・形象があり、すべて破片で検出された。出土状況は1～3区ではややまばらで、4～5区ではかなりの量が散在し、6区ではごく少量であった。そしてその大半が表向きであれ裏返しであれ、床面の傾斜に平行するかたちで出土し、あたかも敷き並べたようになっていた。こうしたことから、第4章第2節Ⅰ項で考察するように、これらの相当な部分は焼台として供されたものと考えられ、燃焼室にあたる6区で埴輪があまりみられないこととも整合性をもつ。土器は3区の床面から**90**、堆積土から**86・89**が出土している。岩石は床面のあちらこちらに点在していた。種類は頁岩・チャート・砂岩・礫岩で、赤変したものも多い。

1b号窯は半壊した1a号窯の残存部分(奥側の半分)を利用した窯で、1～3区を焼成室、4a区付近を燃焼室とし、4b～6区を灰原の一部としている。煙出しは1a号窯と同じで、遺存していない。また焚口に想定される部分は、砂防用水路によって寸断されている。現存長は4m強と短い。焼成室の規模や形状はもとより1a号窯の当該部分と同じである。遺物としては埴輪と岩石がある。ただし図示している1～3区の遺物については、焼成室の床面が1a号窯と競合しているために、どちらの窯に属すものかはすぐには判別しがたい。それに対して、確実に1b号窯期に廃棄された遺物としては、5・6区の灰原内から出土した埴輪や土器**84・85**があげられる。また灰原の炭灰層上部では地滑り後に正立させて置いたとみられる入子(いれこ)になった甕

87・88が出土していて、これなども1b号窯に関連する遺物とみなせるものである。

1号窯の遺物(図21～29、PLATE39～41・48～51・63・64、表47・48－1・2(2))

埴輪・土師器・焼土塊・岩石があり、埴輪については1a号窯と1b号窯とに分記する。

1a号窯の埴輪には円筒、朝顔形、形象がある。円筒は大型、中型で、小型はみられなかった。大型の**1・2**はどちらもⅠ類で、口縁部から胴部上半まで遺存している。**1**は口縁部高13cm

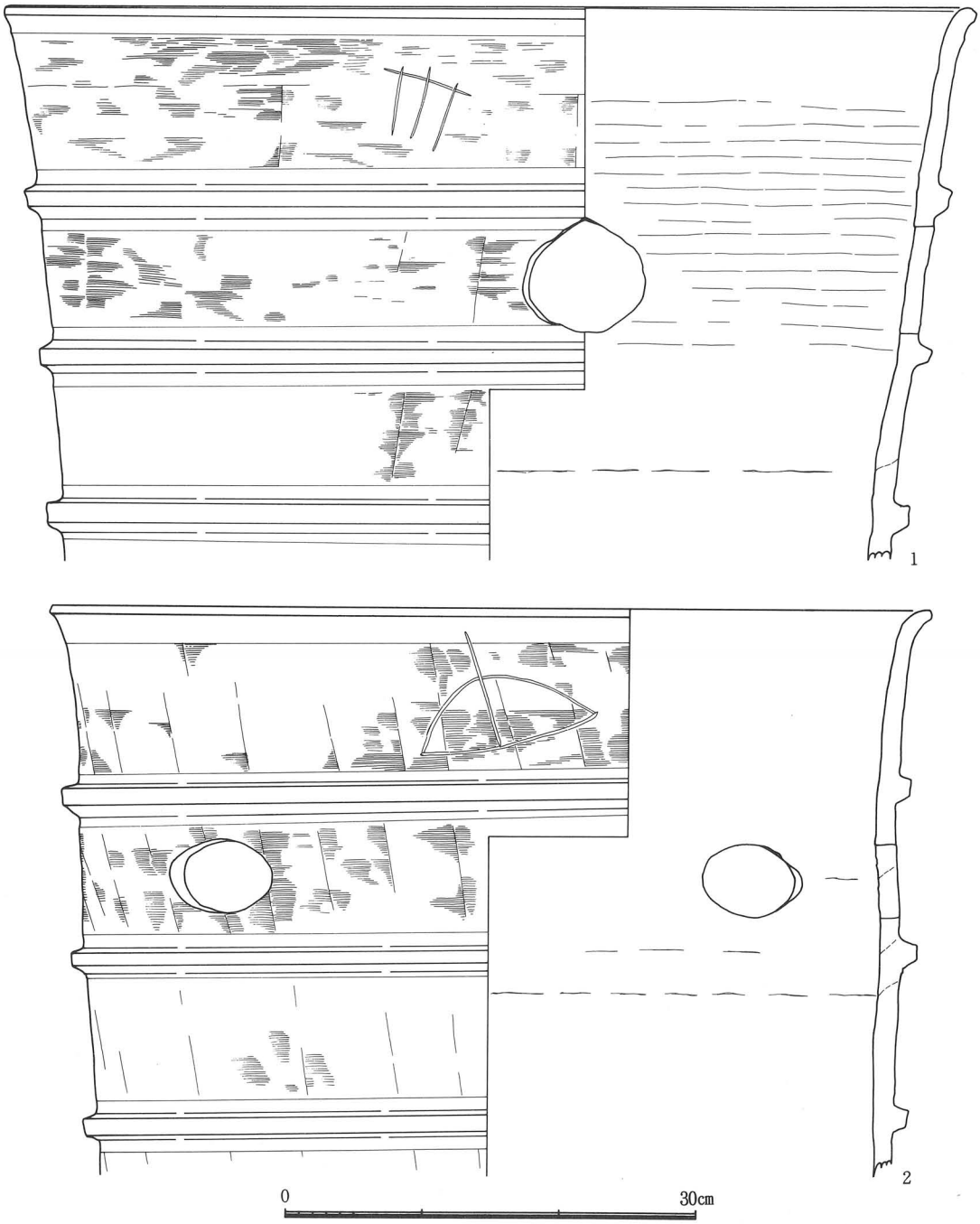


図21　1a号窯 円筒埴輪1・2

で、タガの間隔(上下のタガの心々距離)は約12cmである。口縁部はB1類で外縁をつよくヨコナデしている。胴部外面のヨコハケは板ナデ状で、やや右に傾き加減でBc種がほどこされている。内面はナデ調整している。スカシ孔は不整な円形である。口縁部外面にヘラ記号がある。**2**は口縁部高が12.5cmで、タガの間隔は約12cmである。口縁部はB1類である。調整手法は**1**と

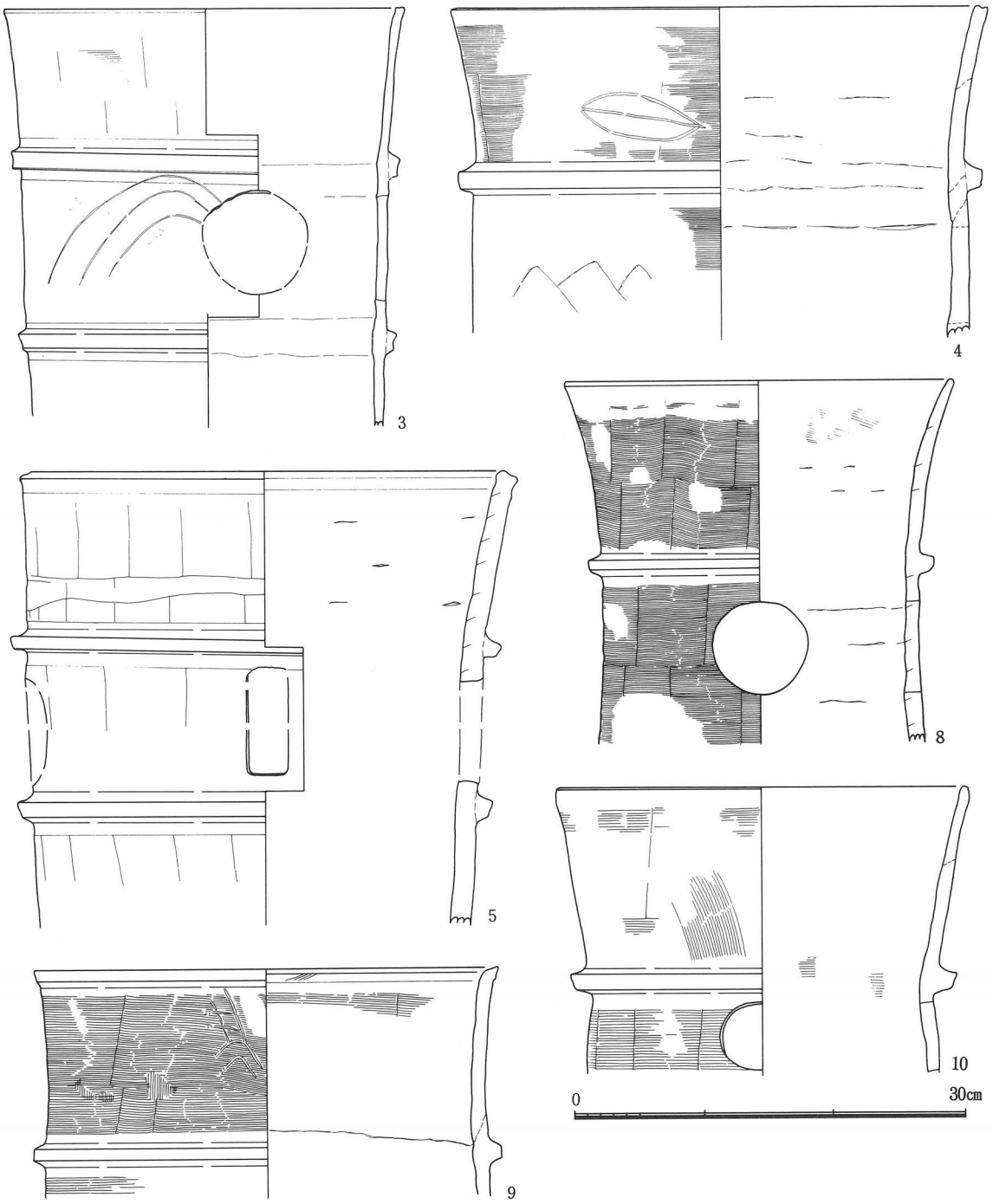


図22　1a号窯 円筒埴輪 3～5・8～10

よく似ており、ハケ原体は少し左に傾いている。スカシ孔は横長の楕円形である。口縁部外面にヘラ記号がある。また外面には口縁上端から30cm、内面は14cmのところまでベンガラが塗布されていた。これら２点の埴輪の器壁は厚さ1.5cm前後で、中型の平均値よりはやや厚めであるが、極端に厚いというものではない。全高については、**1**で120cm～140cm、**2**で110cm～130cmに復原されようか。

中型では43点を図化した。大半はⅠ類で、あと若干のⅡ類(**3**･**8**･**10**)がある。全形が判明する

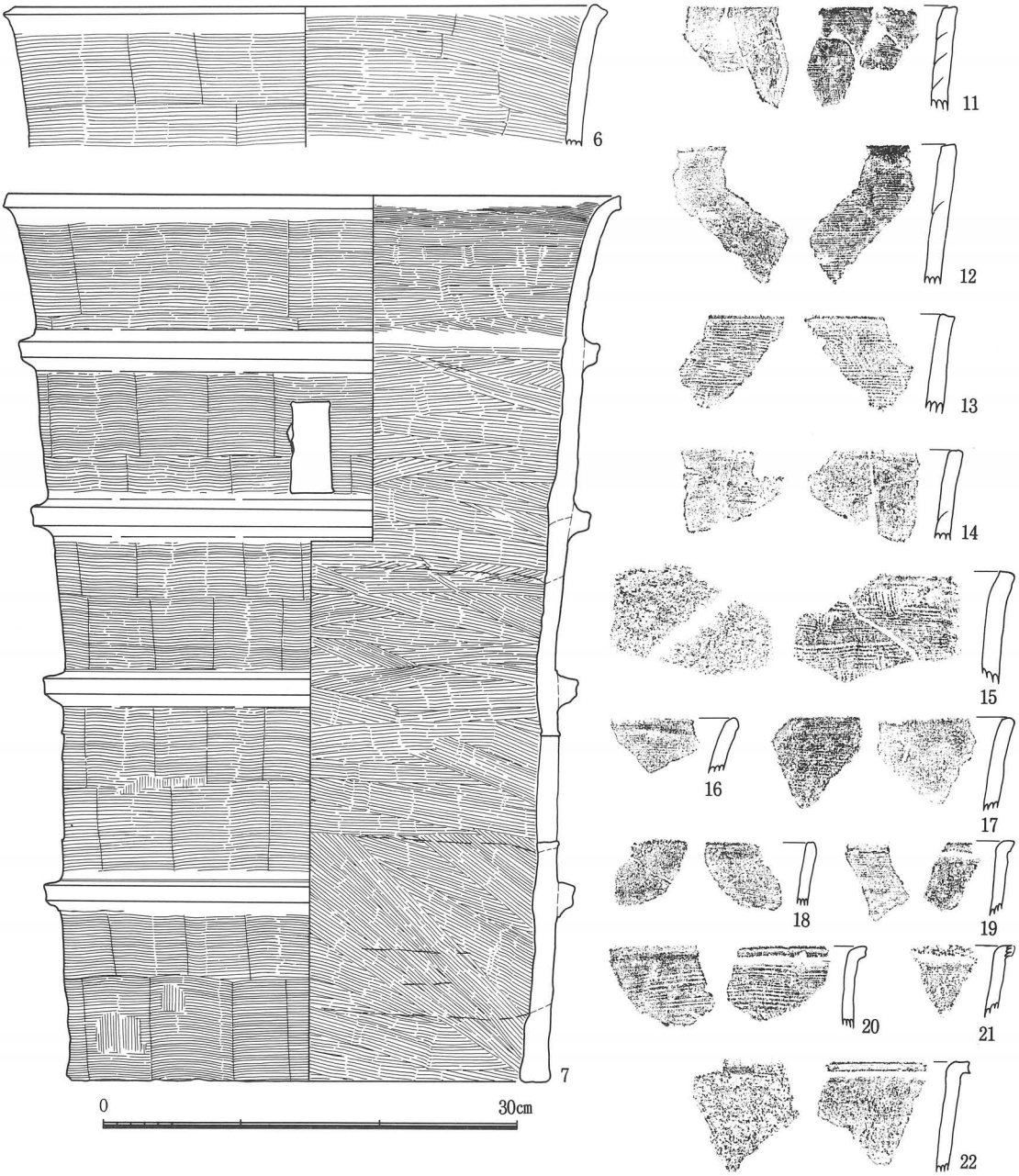


図23　1a号窯 円筒埴輪６・７・11～22

のはⅠa_1類の**7**のみである。口縁部については形状のわかる21点を掲載した。Ⅰ類の口径は**9**の35.8cmから**7**の44.9cmまであり、形状はA1類２点、A2類１点、A3類５点、A5類２点、A6類１点、B1類２点、B2類５点である。Ⅱ類の口径は**8**の30.1cmから**10**の31.7cmとやや小さくて、形状はA2類、A5類、A6類が各１点である。口縁部高はⅠ類が**7**の10cmから**9**の12.8cmまでであるのに対し、Ⅱ類は**3**の10.8cmから**10**の13.8cmまであり、口径が小さいわりに高い口縁部が目立っている。外面の調整はⅠ・Ⅱ類を問わず、いわゆるBb-1種(**4・6・8～10・15・20・21・57**など)が比較的多く、あとBb-2種(**3・5・7**など)がみられる。内面はナデ調整するものが12点と目立ち、ハケ調整のものは５点ほどが確認されている。胴部の調整については、観察されるすべてがBb種ヨコハケの２次調整をおこなっており、細別しうるものでは**7**と**8**がBb-1種、**5**と**23**がBb-2種である。タガは１類が多く、あと２類と３類が若干みられる。タガの間隔はⅠ類が平均12～13cmで、Ⅱ類の**8**などは細いわりに15cm以上と粗くなっている。また**7**では、上から順に12cm、12cm、15cmとなり、かならずしも整然とした割り付けにはなっていない。スカシ孔は円形のほかに、長方形が２点(**7・25**)あり、あと同じ段に円形と長方形を交互に２孔ずつ配した**5**がある。なおⅡ類には長方形は確認されていない。基底部では外面をハケ調整、内面をナデ調整するものが多く、内外面ともハケ調整するもの(**7・33**)は少ない。また粘土帯の接合法では**7**が左巻きと観察されただけである。これらの中型品のなかでベンガラの塗布が認められたのは、口縁部が6点、胴部が５点の合計11点で、そのなかですべての口縁部と**27**の胴部には内面にもベンガラをほどこしている。全形の判明する**7**(PLATE40)は口径44.9cm、器高64cm、底径35.2cmを測り、全面をていねいにハケ調整している。外面の調整は各段がBb-1種で、口縁部と基底部がいわばBb-2種であるが、ハケ原体の幅をみると、前者が5.5cmのものを用いているのに対し、後者では最終的にもちいた仕上げのハケは7.7cmとややひろくなっている。また２次調整のハケ目に斜交する塗り刷毛の痕跡が明瞭に認められる。内面の調整痕からは、本体が４段階にわけて成形されていったことがわかる。

朝顔形は15点を図化したが、全体を復原できたものはない。口縁部では**41・42**をはじめとしてその多くが中型で、**48**のみが小型とみられる。A1類が４点(**41・48～50**)、A2類が４点(**44～47**)、B2類が１点(**42**)である。いずれも中位にタガを貼りつけて段状部を成形するもので、いわゆる口縁部分割成形である。接合部の断面をみると、A1類の**41**は擬口縁部もA1類で、B2類の**42**はやはりB2類であり、接合部擬口縁の形状と口縁端部の形状は一致している。調整手法は1次調整のタテハケ後に、精粗の差はあれ、ヨコハケをかけるものが主体で、一部のもの(**49**)にはナデ調整も認められる。**42**などのハケ調整を円筒埴輪のヨコハケの細別にあてはめれば、Bb-1種ということになろう。調整手法と口縁形態との相関はみられない。肩部から胴部にかけての資料は４点ある。**43**は肩部での直径が37.1cmあり、残存高は40.9cmである。胴部

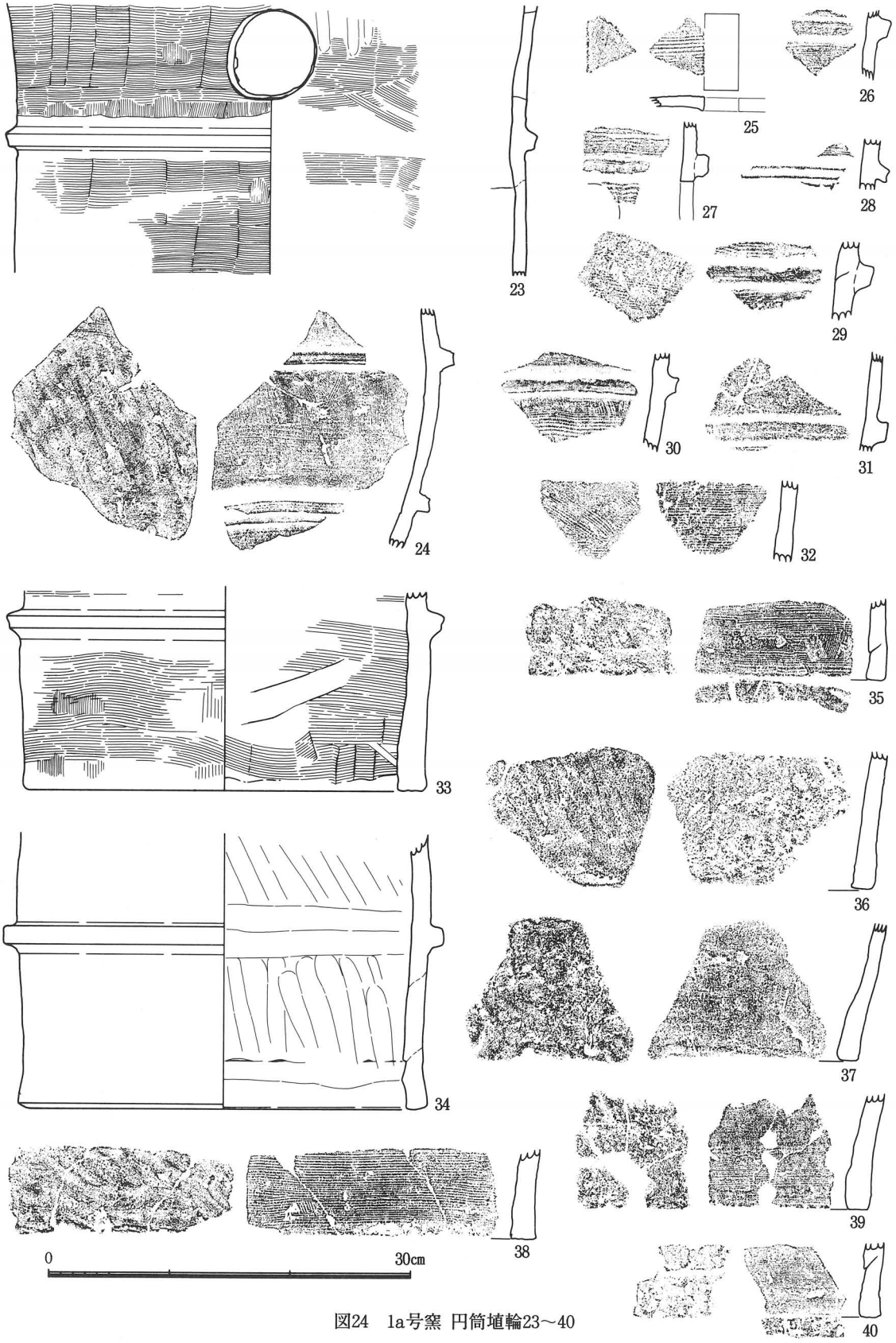


図24　1a号窯 円筒埴輪23～40

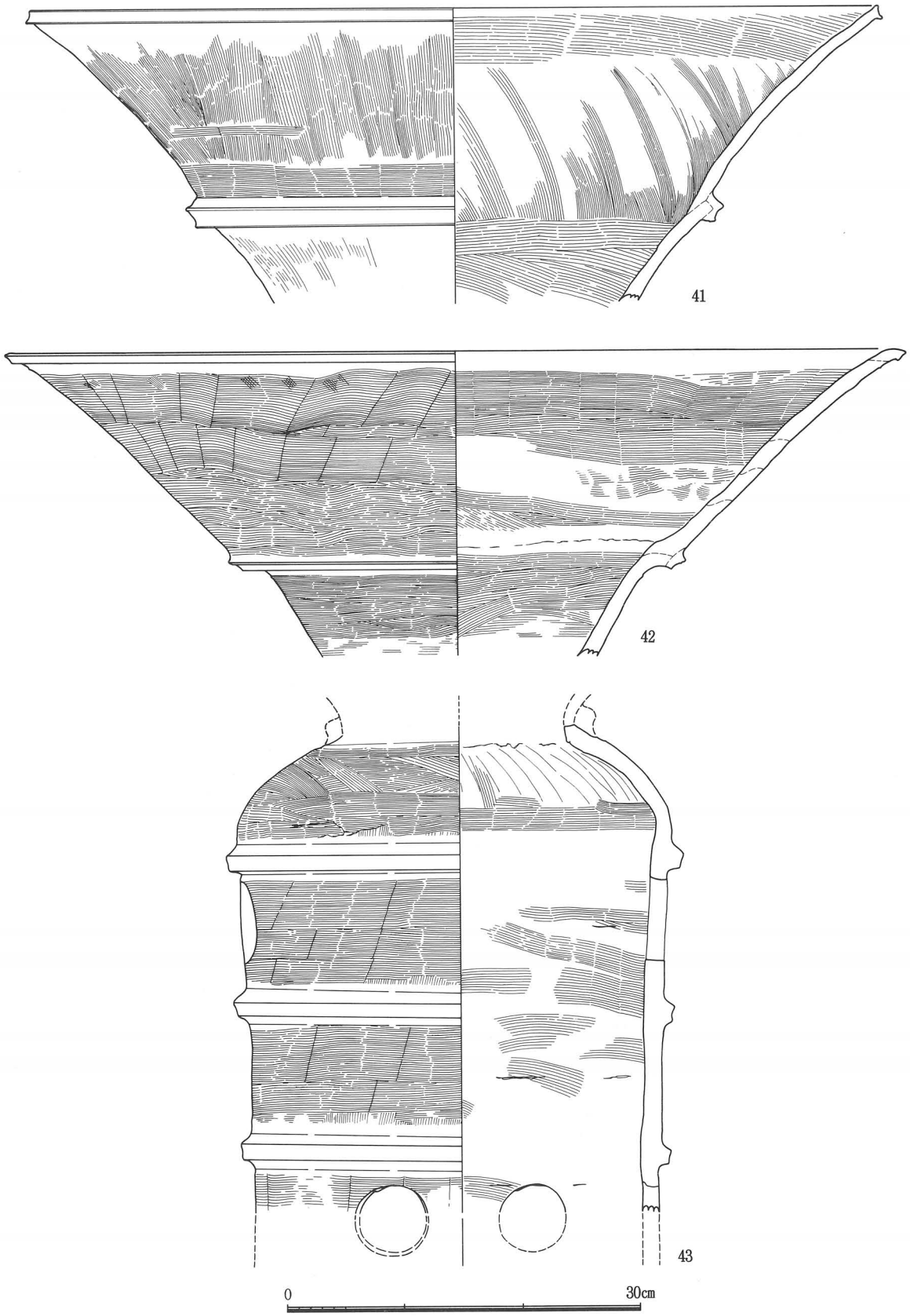


図25　1a号窯 朝顔形埴輪41～43

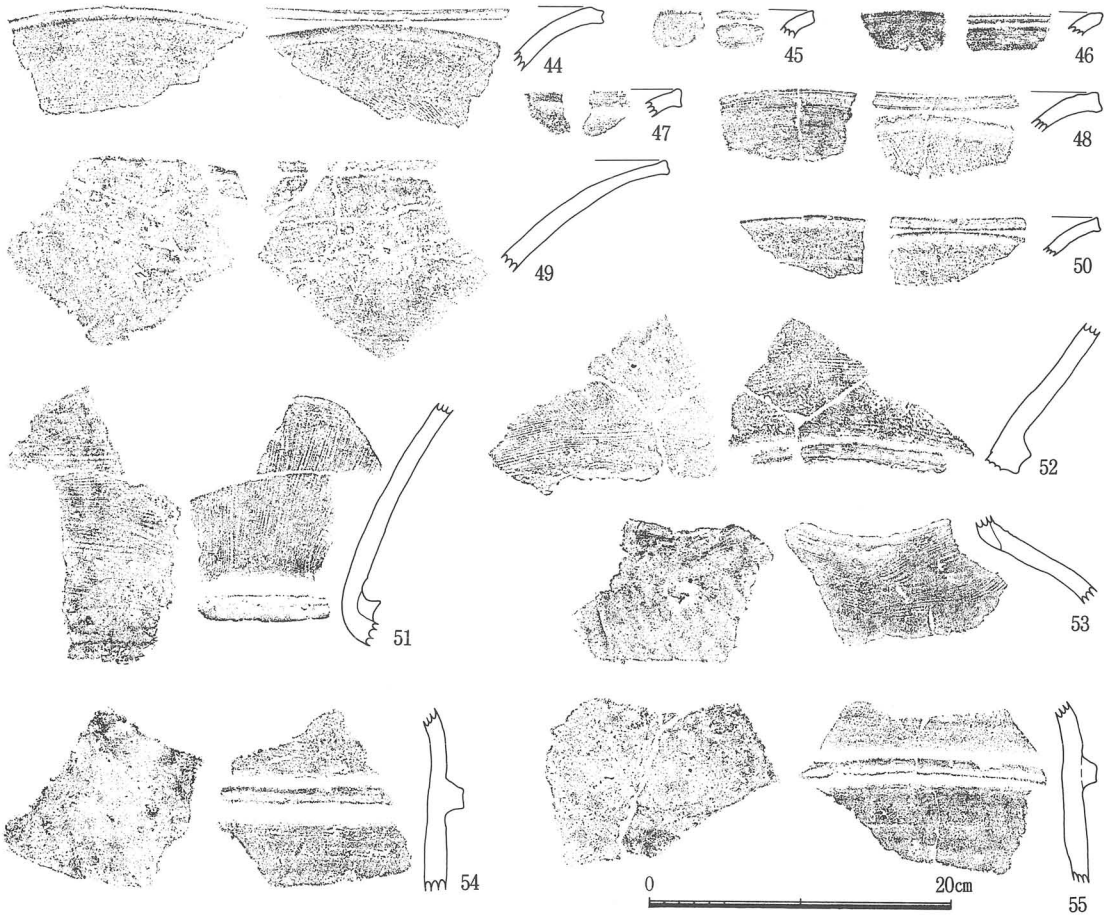


図26　1a号窯 朝顔形埴輪44～55

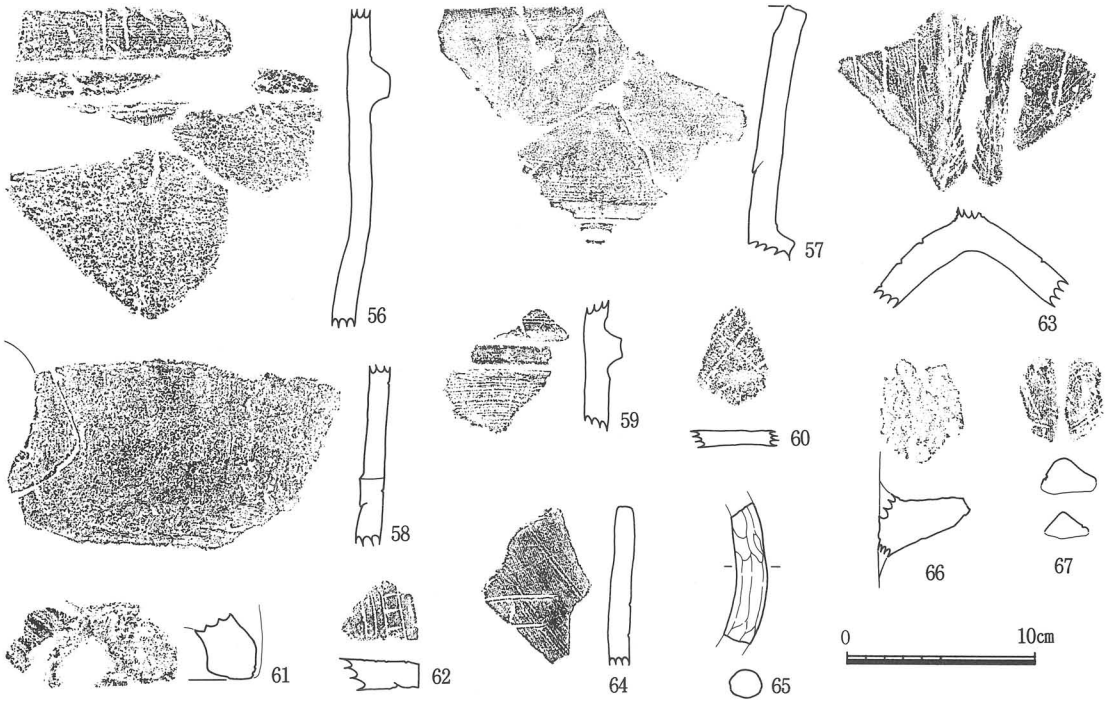


図27　1a号窯 ヘラ記号56～60 形象埴輪 家61 その他62～67

はBb-1種ヨコハケで、内面はナデないしハケ調整している。肩部は不定方向のハケ調整、内面はナデあげている。**43**は胎土・色調・調整具合から、口縁部**42**と同一個体とみられる。朝顔形のベンガラの塗布率は高く、15点中12点に認められた。

円筒のヘラ記号は図化したもの以外にも５点出土している。スカシ孔を粗く縁どった**58**や獣脚とみられる**56**などがあるが、判然としないものが多い。

形象は７点検出している。家の基底部**61**のほか、器財の鰭部**62・64・66**ないし付属品**67**がある。また**65**はなにかの支柱とみられ、不明の**63**などは被りもののようにもみえる。**62・65・66・67**にはベンガラを塗っている。

１b号窯の埴輪には円筒と朝顔形があるが、復原できたものはない。円筒はいずれも中型である。口縁部はＡ3類が２点(**68・69**)、Ａ6類が１点(**70**)、Ｂ2類が２点(**71・72**)で、調整はすべてヨコハケである。ベンガラはＢ2類の２点に認められる。胴部はいずれもＢ種ヨコハケがみられるが、細別するにはいたらない。タガは１類が２点で、あと２類と３類が１点ずつみられる。基底部は２点あり、**77**は外面をヨコハケ調整し、**78**は縦方向になでている。粘土帯の接合法は右巻きである。朝顔形は中型の口縁部を５点検出し、**79・80**の２点がＡ1類である。1b号

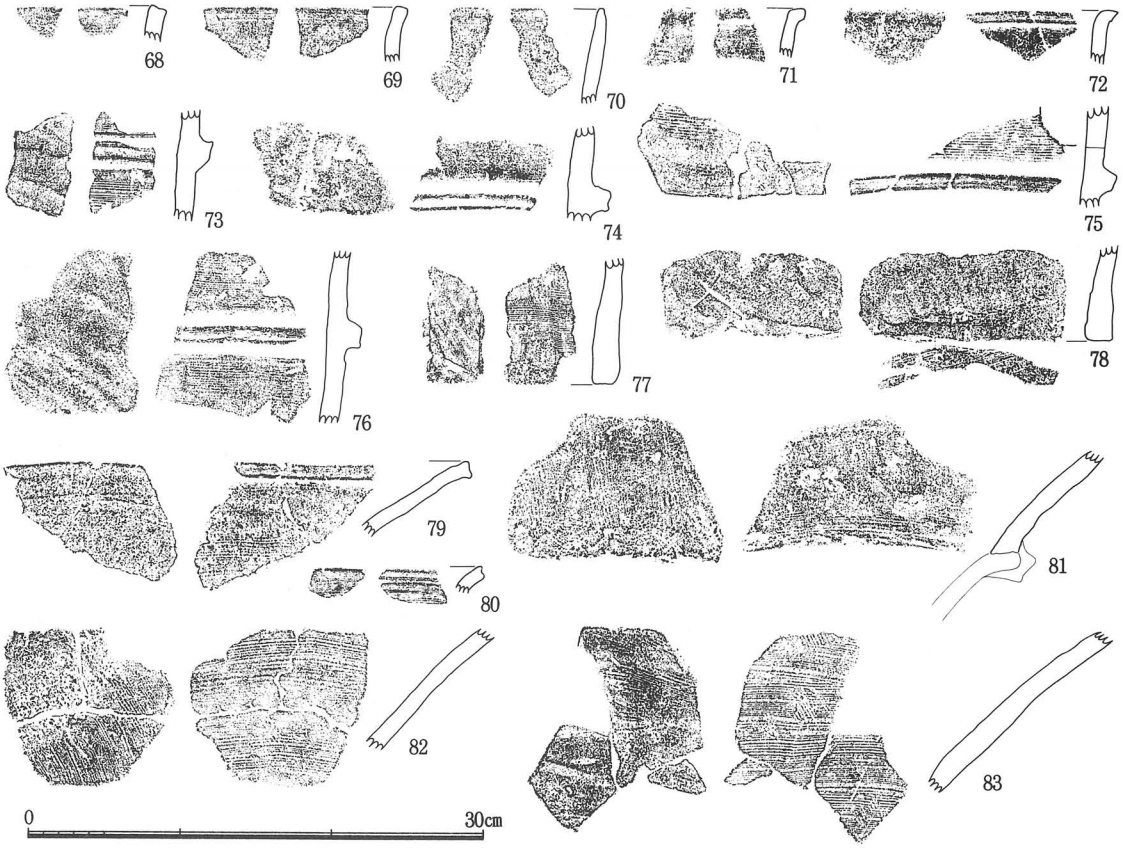


図28　1b号窯 円筒埴輪68～78 朝顔形埴輪79～83

窯の埴輪と認定したものは数量や器種もわずかで、1a号窯の埴輪と相互に比較検討することは難しい。しいて言えば、**78**の右巻きによる接合法が1a号窯の資料に見いだせなかったぐらいで、器種や調整技法などの属性はすべて1a号窯の一群に包摂されるものであり、大きな時期差は認められない。

土師器では壷・鉢・甕および丹塗土器がある。**84**は中形直口壷の口縁部で、口径は11.8cmを測る。外面はハケ調整後になでていて、内面はていねいなナデ調整である。口縁端部は面をとっている。**85**は小形の直口鉢で、口径15.1cm、器高7.5cmを測る。口縁部はわずかに内側に屈曲している。体部外面はヘラケズリのあとナデ調整し、内面は全面をていねいになでて仕上げている。胎土には細砂を多く含んでいる。**86**は大形の高坏で、外面はハケ調整痕がのこり、内面はナデ調整している。**87**は中形の甕で、口径14.5cm、器高15.9cmを測る。やや下膨れの球形の体部にゆるく外反する口縁部がつき、最大腹径はほぼ中位にある。外面は細かなハケ調整をほどこし、内面は底部ちかくを指おさえし、胴部をヘラケズリしている。器壁は薄くて、軽やかである。**88**は小形の甕で、口径10.8cm、器高8.7cmを測る。底部と胴部の境がつよく張った体部に、外反する口縁部がつく。調整手法は**87**とよく似ている。**89・90**は特異な丹塗土器である。**89**は球形の胴部片で、最大腹径は14.2cmを測る。胴部には焼成前にあけられた円孔が多数あったようで、資料には径1.4cmと径0.9cmほどの孔が認められている。外面はていねいなナデ調整、内面はやや粗いナデ調整をほどこしている。丹塗りは外側の全面と穿孔部に及んでいる。胎土は良質で、色調は淡褐色を呈している。**90**は直径7.5cmを測る底部片で、胴部は平底から屈曲して斜め上方に立ちあがる。円孔は底部中央にあって、焼成前に外側からあけられている。直径は0.7cmである。器体は内外面と

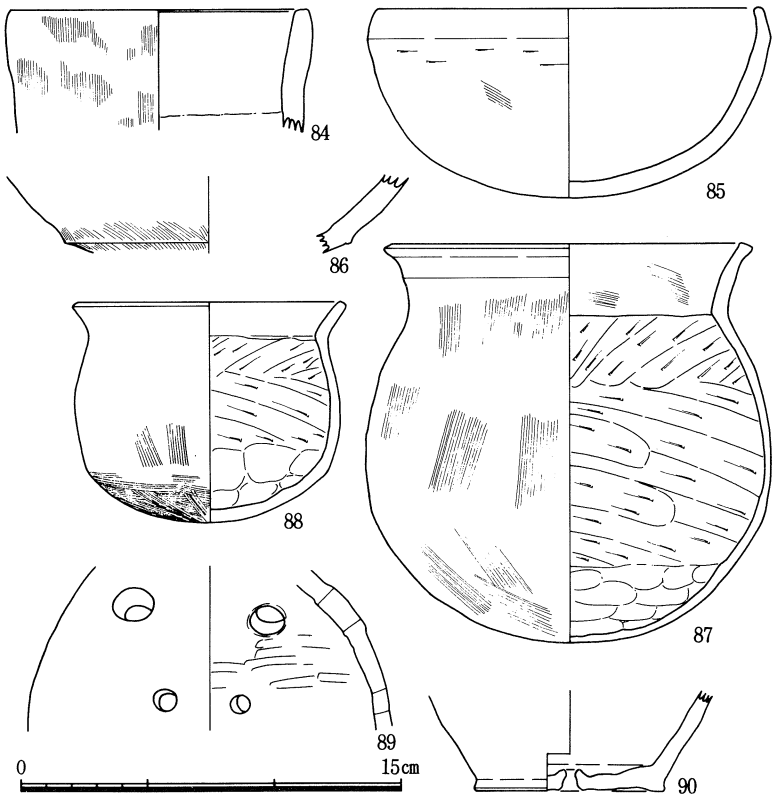


図29　1a号窯 土師器 高坏86 丹塗土器89・90
1b号窯 土師器 壷84 鉢85 甕87・88

No.	重　量(g)	種　類	色　調	出土地点	No.	重　量(g)	種　類	色　調	出土地点
301	107	礫　岩	赤　褐	床　面	352	252	頁　岩	暗　灰	炭　層
302	459	頁　岩	赤　褐	床　面	353	225	頁　岩	暗　灰	炭　層
303	1150	礫　岩	赤　褐	床　面	354	200	頁　岩	暗　灰	炭　層
304	101	頁　岩	赤　褐	床　面	355	166	頁　岩	暗　灰	炭　層
305	190	頁　岩	赤　褐	床　面	356	163	頁　岩	暗　灰	炭　層
306	226	頁　岩	赤　褐	床　面	357	156	頁　岩	暗　灰	炭　層
307	2813	砂　岩	赤　褐	床　面	358	128	頁　岩	暗　灰	炭　層
308	585	砂　岩	赤　褐	床　面	359	120	頁　岩	暗　灰	炭　層
309	53	チャート	赤　黄	床　面	360	142	頁　岩	暗　灰	炭　層
310	758	頁　岩	赤　褐	床　面	361	111	頁　岩	暗　灰	炭　層
311	149	頁　岩	赤　褐	床　面	362	60	頁　岩	暗　灰	炭　層
312	2010	砂　岩	赤　褐	床　面	363	85	頁　岩	暗　灰	炭　層
313	515	チャート	黒　灰	床　面	364	49	頁　岩	暗　灰	炭　層
314	658	砂　岩	赤　褐	床　面	365	39	頁　岩	暗　灰	炭　層
315	272	頁　岩	赤　褐	床　面	366	58	頁　岩	暗　灰	炭　層
316	1095	砂　岩	赤　褐	床　面	367	84	頁　岩	暗　灰	炭　層
317	77	砂　岩	赤　褐	床　面	368	44	頁　岩	暗　灰	炭　層
318	100	頁　岩	赤　褐	床　面	369	29	頁　岩	暗　灰	炭　層
319	64	チャート	赤　黄	床　面	370	65	頁　岩	暗　灰	炭　層
320	270	頁　岩	赤　褐	床　面	371	42	頁　岩	暗　灰	炭　層
321	232	頁　岩	赤　褐	床　面	372	42	頁　岩	暗　灰	炭　層
322	405	砂　岩	赤　褐	床　面	373	33	頁　岩	暗　灰	炭　層
323	356	砂　岩	赤　褐	床　面	374	41	頁　岩	暗　灰	炭　層
324	89	頁　岩	赤　褐	床　面	375	16	頁　岩	暗　灰	炭　層
325	208	砂　岩	赤　褐	床　面	376	26	頁　岩	暗　灰	炭　層
326	535	頁　岩	赤　褐	床　面	377	19	頁　岩	暗　灰	炭　層
327	65	頁　岩	赤　褐	床　面	378	15	頁　岩	暗　灰	炭　層
328	22	頁　岩	赤　褐	床　面	379	17	頁　岩	暗　灰	炭　層
329	35	頁　岩	赤　褐	床　面	380	16	頁　岩	暗　灰	炭　層
330	61	頁　岩	赤　褐	床　面	381	20	頁　岩	暗　灰	炭　層
331	1085	砂　岩	赤　褐	床　面	382	14	頁　岩	暗　灰	炭　層
332	434	砂　岩	赤　褐	床　面	383	8	頁　岩	暗　灰	炭　層
333	149	頁　岩	赤　褐	床　面	384	28	頁　岩	暗　灰	炭　層
334	55	砂　岩	赤　褐	床　面	385	2	頁　岩	暗　灰	炭　層
335	35	頁　岩	赤　褐	床　面	386	14	頁　岩	暗　灰	炭　層
336	376	頁　岩	赤　褐	床　面	387	79	頁　岩	暗　灰	炭　層
337	495	砂　岩	赤　褐	床　面	388	26	頁　岩	暗　灰	炭　層
338	375	頁　岩	赤　褐	床　面	389	575	頁　岩	赤　褐	炭　層
339	104	頁　岩	赤　褐	床　面	390	328	頁　岩	暗　灰	炭　層
340	174	頁　岩	赤　褐	床　面	391	82	チャート	白	炭　層
341	1335	頁　岩	赤　褐	堆積土層	392	4750	頁　岩	赤　褐	炭　層
342	153	砂　岩	赤　褐	炭　層	393	105	頁　岩	暗　灰	堆積土層
343	22	頁　岩	暗　灰	炭　層	394	12	頁　岩	暗　灰	炭　層
344	570	頁　岩	赤　褐	炭　層	395	15	頁　岩	暗　灰	炭　層
345	415	チャート	白茶系	炭　層	396	88	頁　岩	暗　灰	炭　層
346	120	チャート	白茶系	炭　層	397	160	頁　岩	赤　褐	床　面
347	33	チャート	白	炭　層	398	12	頁　岩	赤　褐	堆積土層
348	112	頁　岩	赤　褐	炭　層	399	42	チャート	黒　灰	堆積土層
349	1634	頁　岩	赤　褐	堆積土層	400	22	頁　岩	赤　褐	炭　層
350	748	頁　岩	暗　灰	炭　層	401	22	頁　岩	赤　褐	床　面
351	565	頁　岩	暗　灰	炭　層					

表6　1号窯出土の岩石一覧表

もナデ調整している。丹塗りは底部・胴部とも外側の全面にほどこされているが、穿孔部位については表面が荒れていて判然としない。胎土・色調とも**89**とよく似ており、同一個体とみられる。1号窯では、このほかにも丹塗土器の破片が数点出土している。これらの土師器は、上述したように、1a号窯の**86・89・90**と1b号窯の**84・85・87・88**にわけられる。前者は特異な**89・90**にあっては時期比定は困難であり、**86**についても帰属型式はあきらかにできない。後者の薄手の甕**87・88**は、その形状からみて、6世紀代に降るものと考えられる。

焼土塊**91・92**(PLATE63c)は、1a号窯の灰原から出土したもので、淡黄褐色の粘土に長さ数cmの切り藁をまぜている。壁面は地山を掘り込んで成形していることから、これらは天井材の一部とみられる。

岩石は窯内および焚口部から101点を検出し、種別は頁岩・チャート・砂岩・礫岩である。データは一覧表(表6)に示している。内訳は頁岩が77点、チャートが8点、砂岩が14点、礫岩が2点で、頁岩が圧倒的多数を占めている。もっとも大きい岩石は頁岩の4750g(**392**)であるが、平均すれば1個あたり約300gで、それほど大きなものではない。ただしチャートのようにすべてが小さいといったものもあり、岩種によってかなりの偏差がみられる。またこれらの岩石のなかには火熱によって赤く変色したもの(口絵28・29)や発泡した**393**(PLATE63c)なども数多く含まれている。ふつう窖窯から多くの岩石が出土するということはあまり知られておらず、不可解な感じがする。これらの岩石については、第4章第2節Ⅱ項において考察する。

注

1. 東側の焼土が内弯しているのは斜面地を水平に切り込んでいるためである。
2. 表47は遺構検出時での埴輪片の状況、表48は整理作業終了時点での埴輪の大要を一覧したものである。

2号窯

2号窯は1号窯から約2.4m西北側によったところで平行して築かれている。現存長6.9m、中央部での幅1.3m、同部での現存深約0.55mを測る(図30・31、PLATE8・9)。1号窯と同様に焚口側がややひらく細身の窯で、焼成室のみ遺存している。中心軸の方向はN－41°－Eで、床面の傾斜は17°～20°である。半地下式であることや構築の手順は1号窯とおなじで、平面形もよく似ている。

窯内の土層を横断面図によって記すと、上層から流入土層、崩落土層、堆積土層となる。流入土層が廃窯後に流れ込んだ7～8世紀の遺物包含層、崩落土層が廃窯後しばらくして落ち込んだ天井材(PLATE63c)や窯壁などの焼土を含む土層、堆積土層が操業中の焼土層であることは1号窯と基本的に同じである。また6区にみられる落差0.75mの地滑りは1号窯と同じときのものである。調査の知見では、地滑り面が崩落土層と堆積土層をともに切断し、流入土に

は及んでいなかったことを確認している。したがって2号窯の地滑りも、1号窯と同様に、廃窯後しばらくして発生したとみられる(PLATE11a)。

2号窯の横断面形については、手前(5区・6区)や先端部(1区)は床面が比較的フラットで

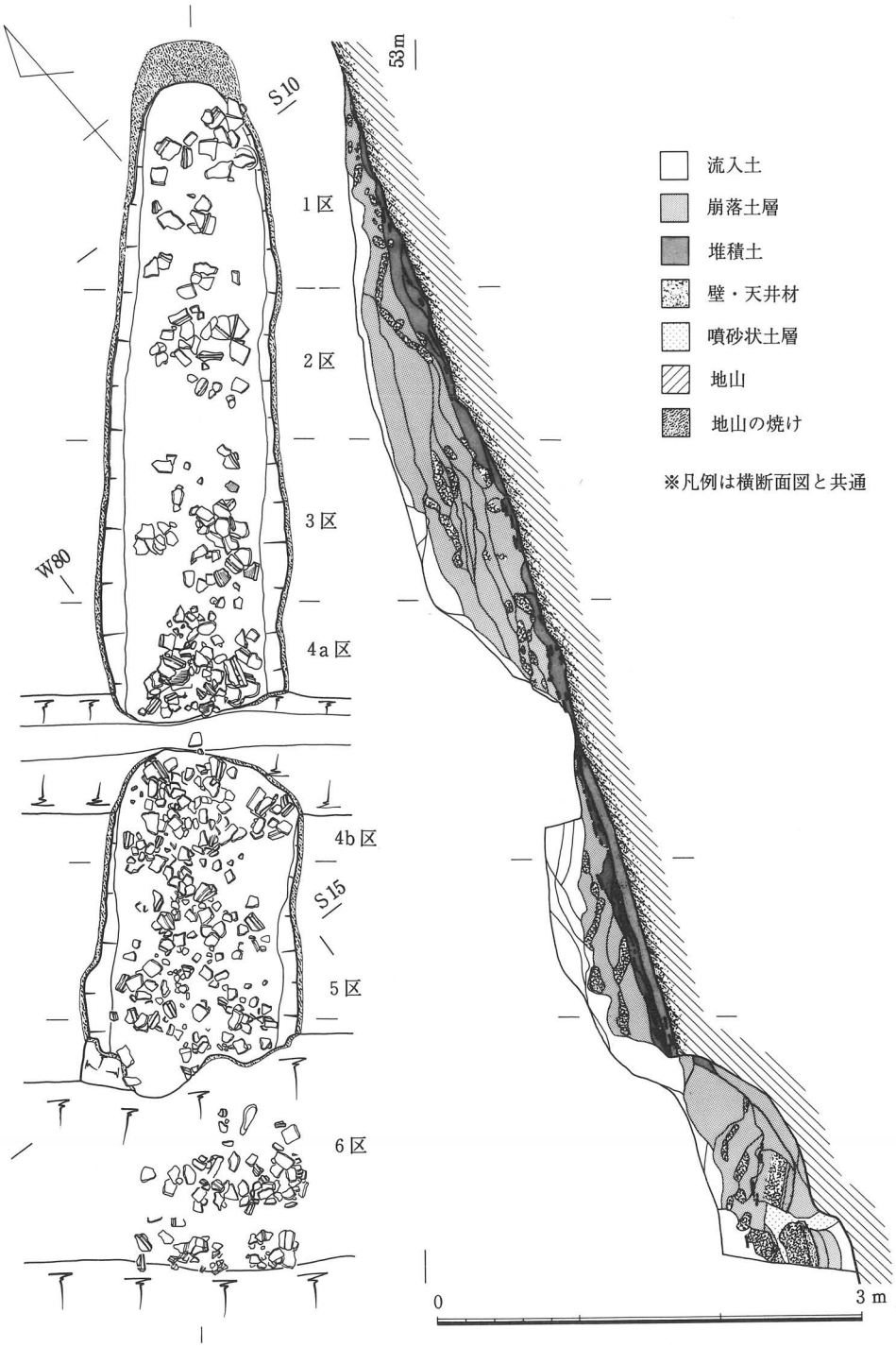


図30　2号窯 平面図・縦断面図

あるのに、中央部の２区から４区にかけては真中がすこしへこんだ舟底形を呈している。壁面の立ち上がりは垂直もしくは外傾している。２－３区間の横断面図には板状に剥がれ落ちた約40cm四方の壁材がみえる(図31)。これをもとの位置に復原すれば、西壁面の下端からの立ち上がりは約0.8m以上となる。また同じ部位の西壁面に上半部が欠けたところがあり、やはりここでも当初の壁面が剥落したのちの補修はみられなかった。床面に堆積した焼土は１区から６区まで認められた。もっとも厚いところで20cm、うすいところは４～５cmしかなく、かなりばらつきがみられる。とくに１区から３区にかけては急に厚みが減じており、床面の再掘削など人為的な仕業があったものとおもわれる。

２号窯の遺物は大半が埴輪片で、あと若干の土師器片が出土している。埴輪は円筒を中心に朝顔形・形象がある。床面ないし堆積土層中にある埴輪は、１号窯と同様に、床面に平行する状態で検出されている。量的には１～２区でやや少ないくらいで、３～６区ではかなりの量が重なりあうように出土している。このことは６区の地滑り部でも同じである。また縦断面図をみてもあきらかなように、６区には炭灰がまったくみられないことと、これらの埴輪片を焼台とするのちの見解とあわせて考えると、この部位についても、もとは焼成室であったことがう

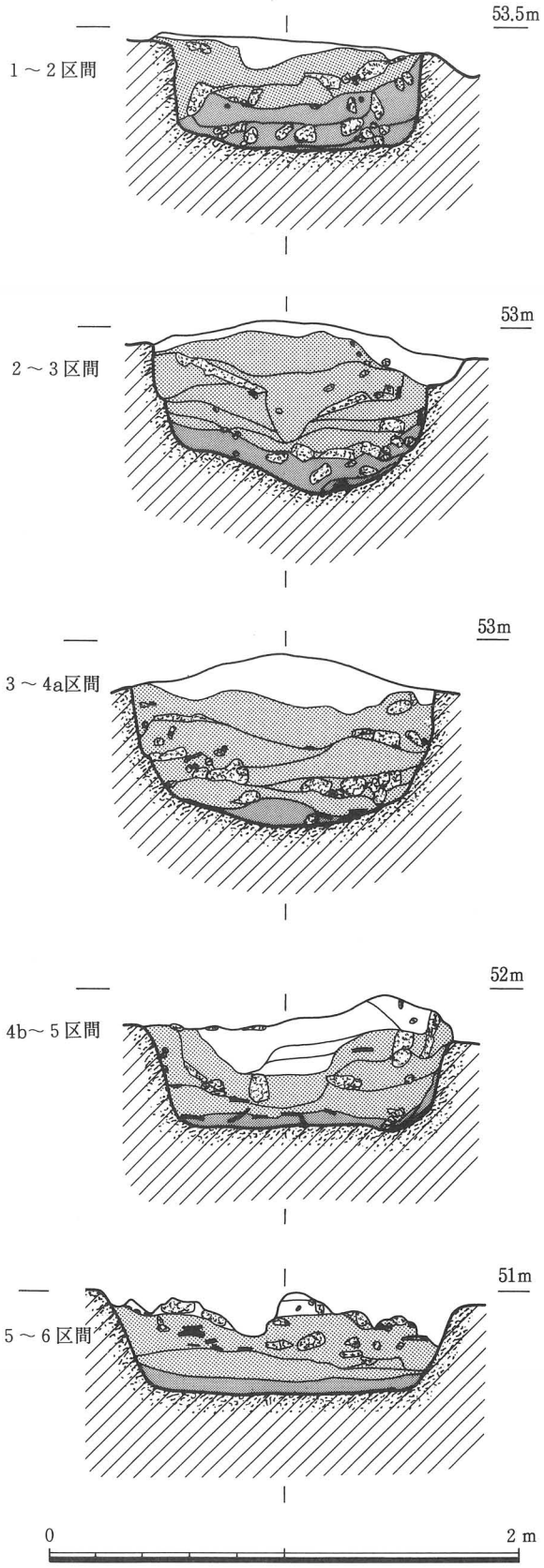
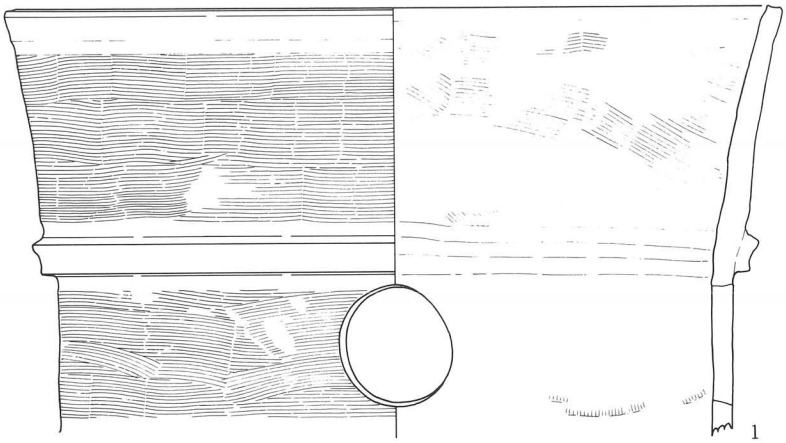
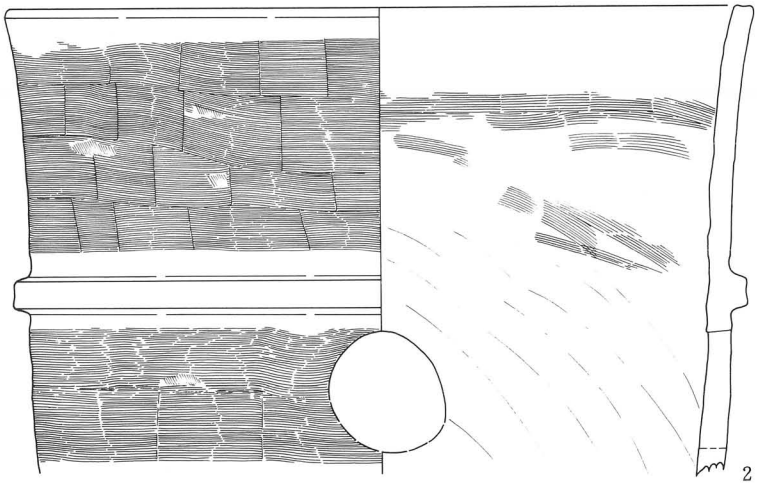
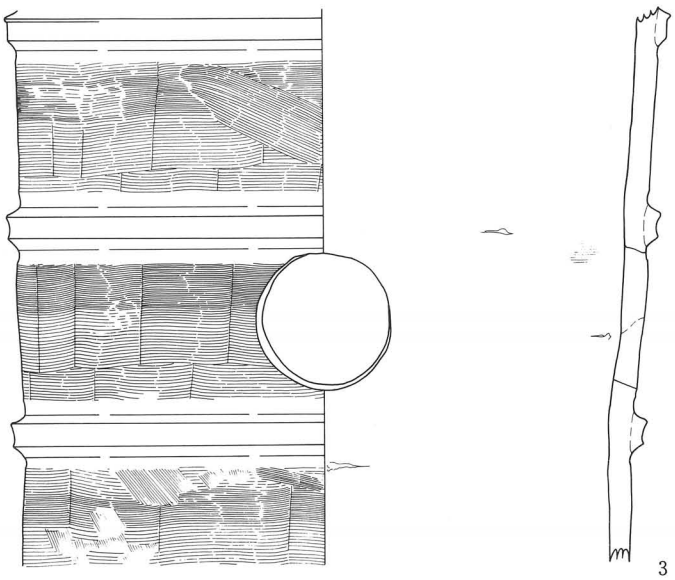


図31　２号窯 横断面図







0　30cm

図32　2号窯 円筒埴輪1～3

かがえる。土師器の多くは窯内の堆積土から出土しているが、**178**は1区の床面、**176**と**177**は6区の地滑りした一連の埴輪群、**174**は2号窯の前庭部からそれぞれ検出されたものである。

2号窯の遺物(図32～48、PLATE41～43・48・52～58・63・64、表47・48-3)

埴輪では円筒・朝顔形・形象がある。円筒は大型・中型・小型がある。大型は口縁部**1**・**2**、胴部**3**・**44**・**48**・**50**・**111**、基底部**4**・**56**・**62**があり、いずれもⅡ類である。**1**は口縁部から最上位のタガとスカシ孔まで遺存しており、残存高28.5cmを測る。口縁部はA3類で、高さ14.8cmを測り、上縁部はつよくヨコナデしている。タガは3.2cmとかなり太めの1類である。外面の2次調整のヨコハケはBb-1種で、3帯認められ、内面はハケ調整後にナデ調整している。外面にはベンガラが塗布されている。**2**も上位の破片で、口縁部はA2類で、高さ16.8cmを測る。タガは太めの1類である。外面の調整はBb-1種で、口縁部ではハケ目が4帯、胴部では3帯認められ、内面はハケ調整後にナデ調整している。胴部では**3**が腹径42.8cm、残存高36.7cmを測り、タガは幅2.8cmと太くてやや扁平な1類で、間隔は13.5cm～14cmである。外面のヨコハケは顕著なBb-2種で、内面はナデ調整している。器壁は1.5cm前後でやや厚く、外面にはベンガラを塗布している。そのほかの資料も、全般的にタガが大振りで、**48**にはBb-2種のヨコハケがほどこされている。また**44**・**48**・**111**にはベンガラが塗られている。基底部では**4**が底径34cm、基底部高11.5cmを測る。下方のスカシ孔が第2段にあけられていて、中型とは異なっている。タガはM形の1類で、間隔は15cmとA群窯の円筒埴輪としては最大である。外面のヨコハケはBb-2種で、内面はナデ調整している。底部の接合法は右巻きづくりである。外面にはベンガラの滴が散見される。また色調のまったく異なる破片が接合している(口絵26・27)。**56**にはBb種のヨコハケがみられる。ハケ目・胎土・色調が**1**に酷似していて、同一個体とみられる。**62**は3帯のBb-1種のヨコハケがみられ、外面にはベンガラの滴が付着している。

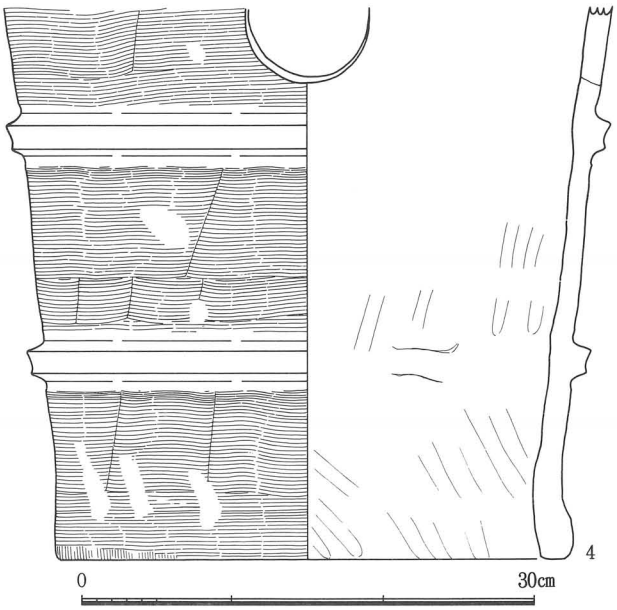


図33　2号窯 円筒埴輪4

中型は72点を資料化した。全形のわかるものがないが、基本的にⅠ類である。口縁部を主体とする資料は16点あり、口径は**5**の37.6cmや**19**の43cmが復原される程度で、ほかは小片である。形状はA1類が2点、A2類が8点、A3類が2

点、A4類が１点、A6類が１点、B1類が２点となり、A2類がもっとも目立っている。ただA2類には**11**のように内外面が凹線状になったものや**12**～**14**のように外縁が突出したものなども含まれている。口縁部高が判明するのは、**5**の13.5cm、**9**の6cm、**19**の13.4cmの３点で、特異とみられるのはより上位にタガのある**9**である。外面の調整をみると、大半のものがヨコハケをほどこしているが、この**9**と**11**・**15**がタテハケのみで、２次調整が認められない。内面はハケ調整が８点と多く、ナデ調整は少ない。ベンガラは**6**・**13**・**16**にみられる。胴部を観察できるものは**5**・**9**・**19**・**51**やヘラ記号の資料を含めて、39点ある。タガはM形の１類がもっとも多く、あと２類・３類と漸減している。間隔は、**5**・**38**が12cmで、**24**が10.5cm、**51**が11.2cmである。**32**にはタガの剥がれた器面に割り付けのための２本の平行な沈線がひかれている。スカシ孔は１点の長方形(**117**)のほかはすべて円形で、部位が確かめられたものでは、第１段(**51**)と最上段(**5**)

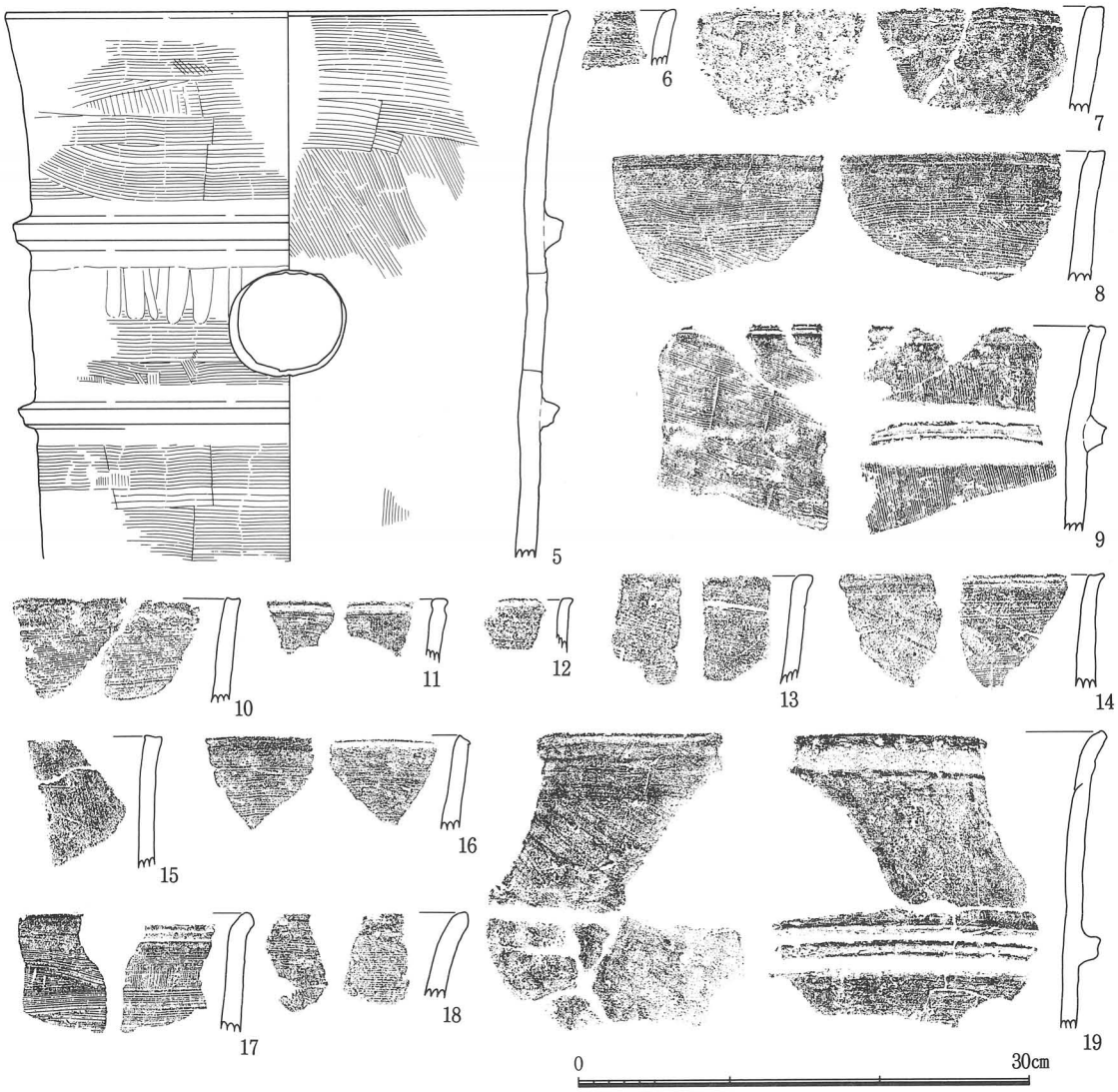


図34　２号窯 円筒埴輪５～19

の資料がある。胴部の調整については、**9・20・22・23**などが２次調整をほどこさずタテハケのまま仕上げているほか、**21**では口縁部側をタテハケのままにし、胴部はヨコハケ調整している。このほかはいずれもＢ種ヨコハケをほどこしている。ヨコハケの種別は、Ｂａ種(**41**)、Ｂｂ-1種(**5・24・33・38**)、Ｂｂ-2種(**46・49**)、Ｂｃ種(**47・51・117**)がある。確認されたなかではＢｂ-1種が目立っている。内面はナデ調整が大半を占めている。器壁はおおむね１cm～1.3cmであるが、タテハケの破片は相対的に薄くなっている。ベンガラは**24・32・33・36～38・43・110・120**などにみとめられる。基底部は21点を資料化している。基底部高は**51**の9.7cmが測定できる唯一のものだが、**57**や**61**のように12cm以上の高いものもいくつかみられる。外面は２次調整のヨコハケをほどこした一群(**51～55・57～61・72**)、1次調整のタテハケにとどめている一群(**63～65・69**)、そしてナデ調整しているもの(**66～68・70・71・73**)がある。２次調整の種別ではＢｂ種(**52・53・56～58・60～62**)とＢｃ種(**55・59**)が識別できる。内面の調整は**61**と**65**がハケ調整であるほか

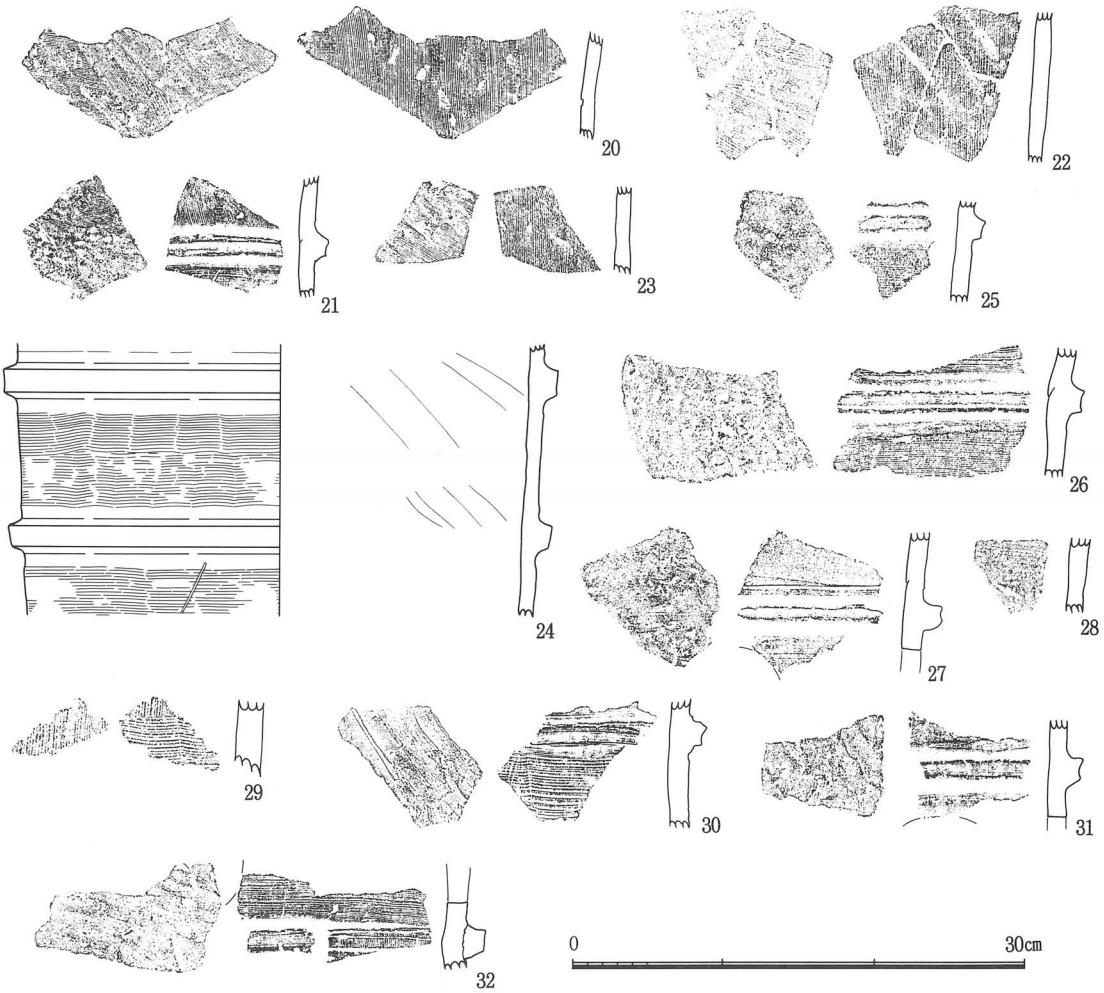


図35　２号窯 円筒埴輪20～32

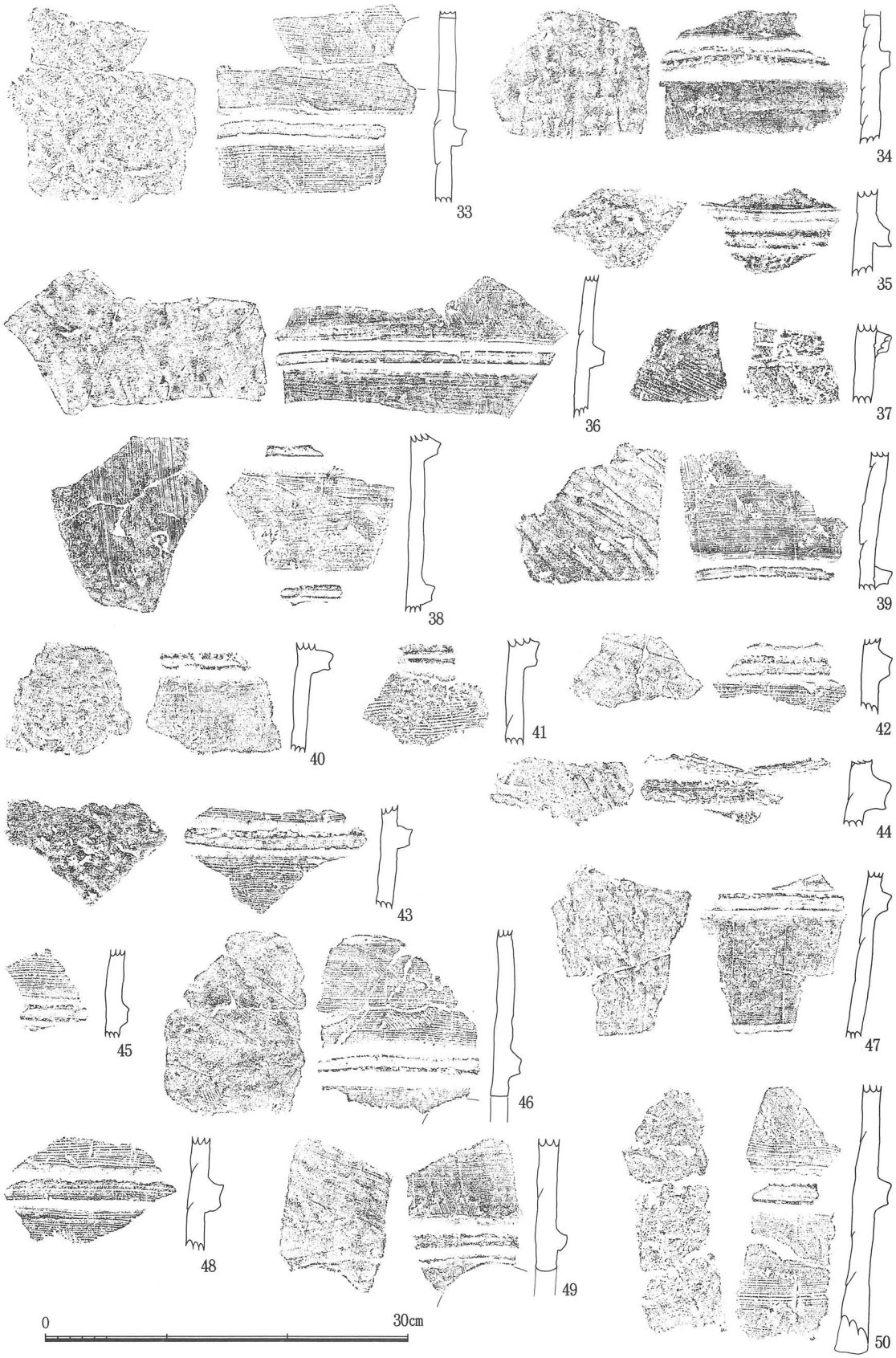


図36　2号窯 円筒埴輪33～50

は、大半がナデ調整である。接合法のわかるもの(**51**・**61**・**65**)はいずれも右巻きづくりである。**71**は焼き歪んだ資料で、極端に内傾している。また**72**の底面には焼成前についたとみられる小石様の圧痕、**73**の底面にはハケ状工具の痕跡とみられる幅2cmの板状のへこみがある。

小型は19点検出した。**74**は唯一復原できたもので、口径24.1cm、高さ39.6cm、底径16.4cmを測る。タガは２条で、１類である。口縁部に三角形、胴部に円形のスカシ孔を２孔一対であけている。口縁部高の14.1cm、タガの間隔の12.2cm、基底部高の12.1cmは、ともに中型のそれと同等の高さを確保している。口縁端部はＡ2類で、外面の２次調整はＢb-1種で、口縁部で

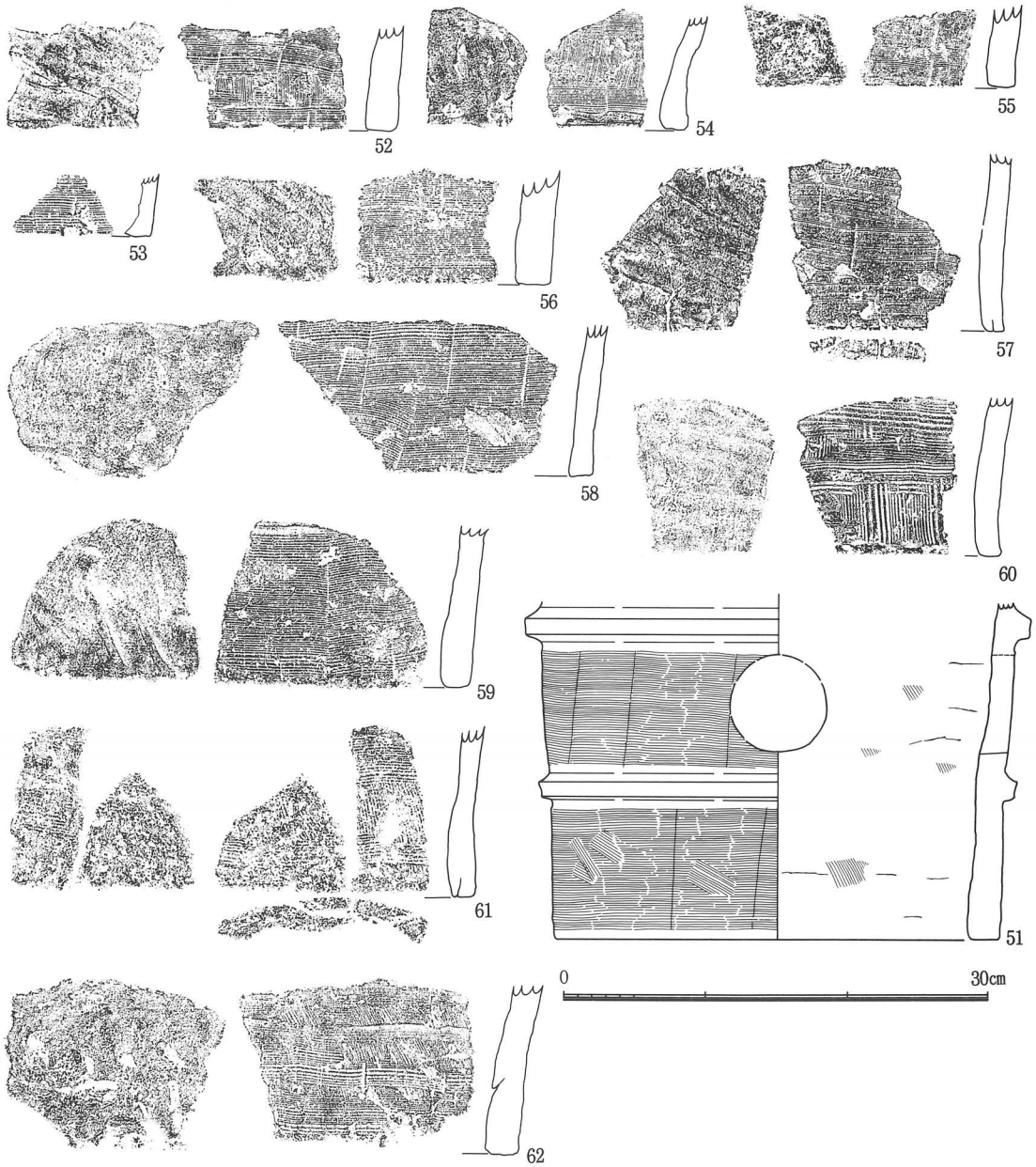


図37　２号窯 円筒埴輪51～62

は５帯、胴部で３帯、底部で４帯のヨコハケ調整痕がみとめられる。内面は全面ナデ調整している。底部の接合法は右巻きづくりである。胴部の資料は10点あり、いずれも**74**と同規模とみられる。タガはほとんどが１類で、スカシ孔は円形のみである。外面は基本的にＢ種ヨコハケをほどこすが、いずれも種別は判然としない。内面はすべてナデ調整である。このなかで厚手の**82**は、ハケ目・胎土・色調が大型円筒の**2**と酷似している。底部では**75**がＢb-1種、**86**がＢ種ヨコハケで、２例とも内面はていねいになでている。接合法はどちらも右巻きづくりである。

朝顔形は19点検出した。大型は１点で、あとは中型である。大型の**87**は口径84.6cm、残存高25.2cmを測るやや扁平な口頸部で、口縁部はＡ1類である。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整を丹念にほどこしている。内外面ともベンガラが塗布されている。中型では口縁部14点（上縁部８点、屈曲部６点）、頸部１点、胴部３点、底部１点がある。口縁部の類型はＡ1類４点、Ｂ1類が４点である。外面はＡ1類の**89**がナデ、**90**が斜めハケ、**91**がタテハケ調整で、Ｂ1類はすべてヨコハケである。内面はナデ調整が多い。**96**は擬口縁の形状から口縁部はＢ1類とみられる。**102**は高熱のために焼け歪んだ破片で、色調は暗褐色を呈している。**101**は肩部で、外面はＢ種ヨコハケ、内面はナデ調整している。胴部の**103・104**は、外面をＢ種ヨコハケ、内面をナデ調整し、表面には過熱のために細かなひび割れがみうけられる。色調は暗褐色を呈している。底部の**105**は底径33.2cm、基底部高12cmを測る。外面にはＢc種とみられるヨコハケ

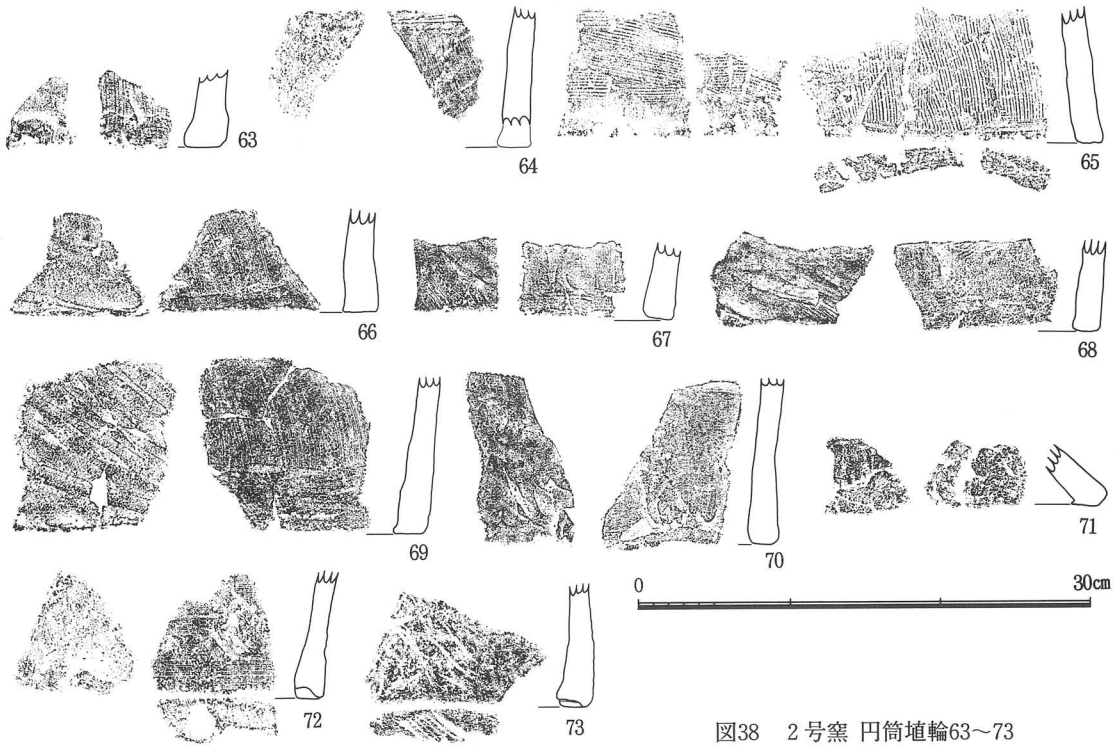


図38　２号窯 円筒埴輪63～73

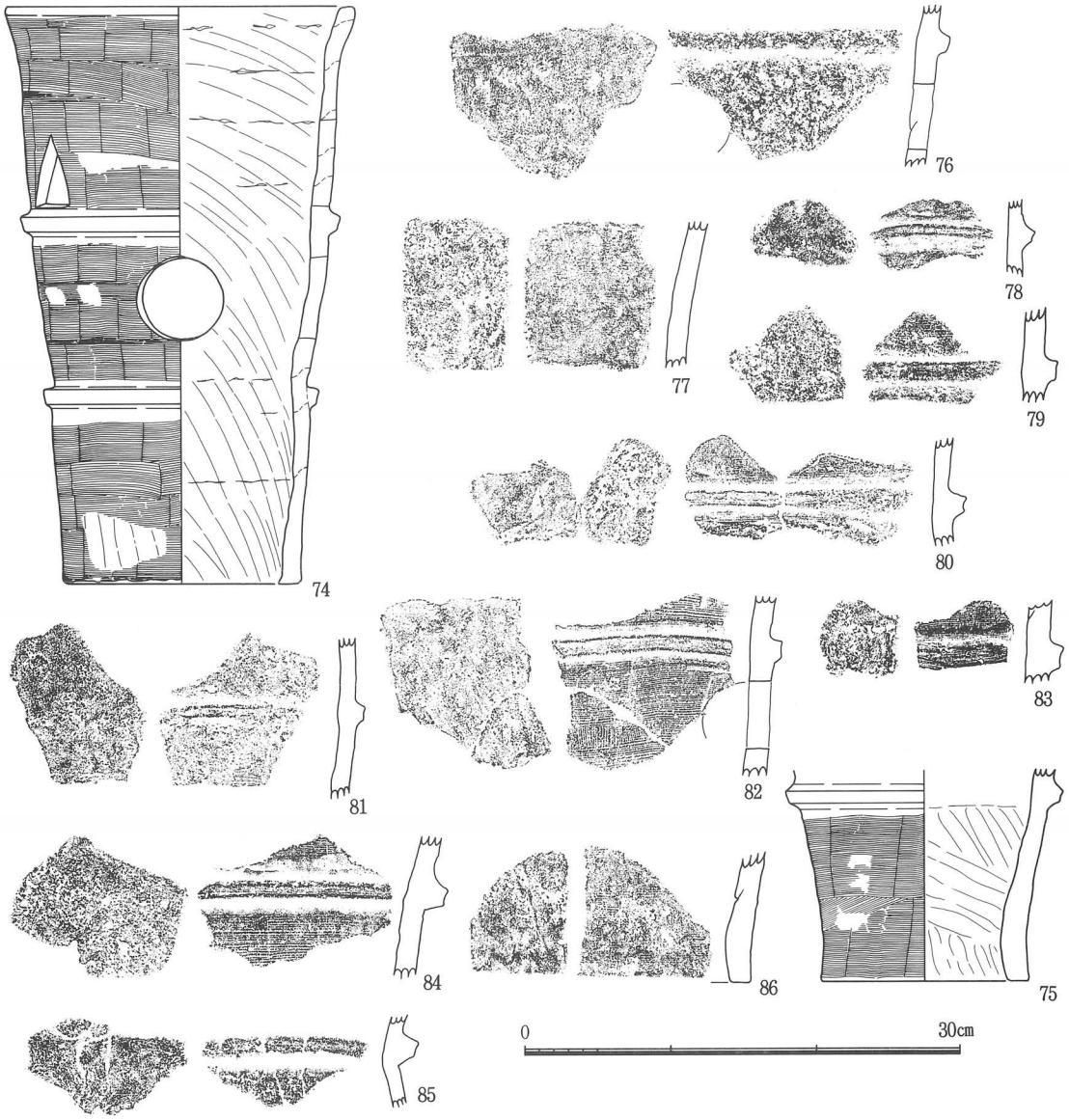


図39　2号窯 円筒埴輪74～86

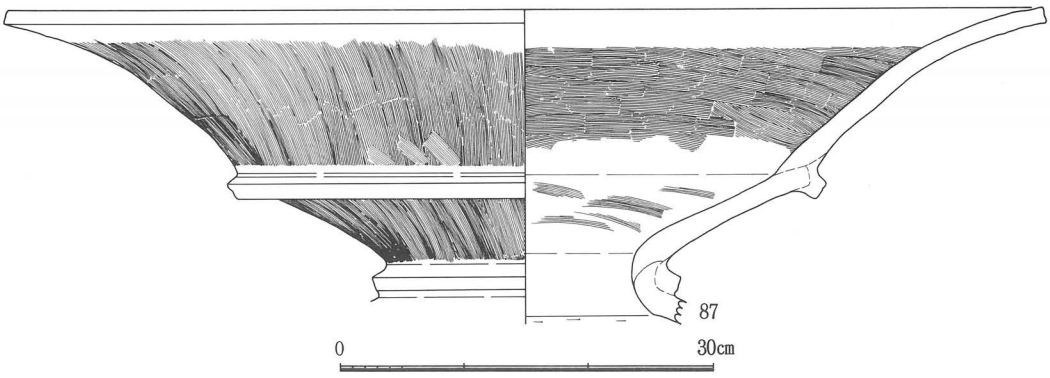


図40　2号窯 朝顔形埴輪87

をほどこし、内面はナデ調整している。接合法は右巻きづくりである。底辺は全周の約３分の１が遺存し、底面には焼台に供した埴輪片が熔着したままのところとはがれた圧痕が都合3カ所認められ、その部分がひび割れて捲れ上がっている。色調は暗褐色を呈している。なお**102**

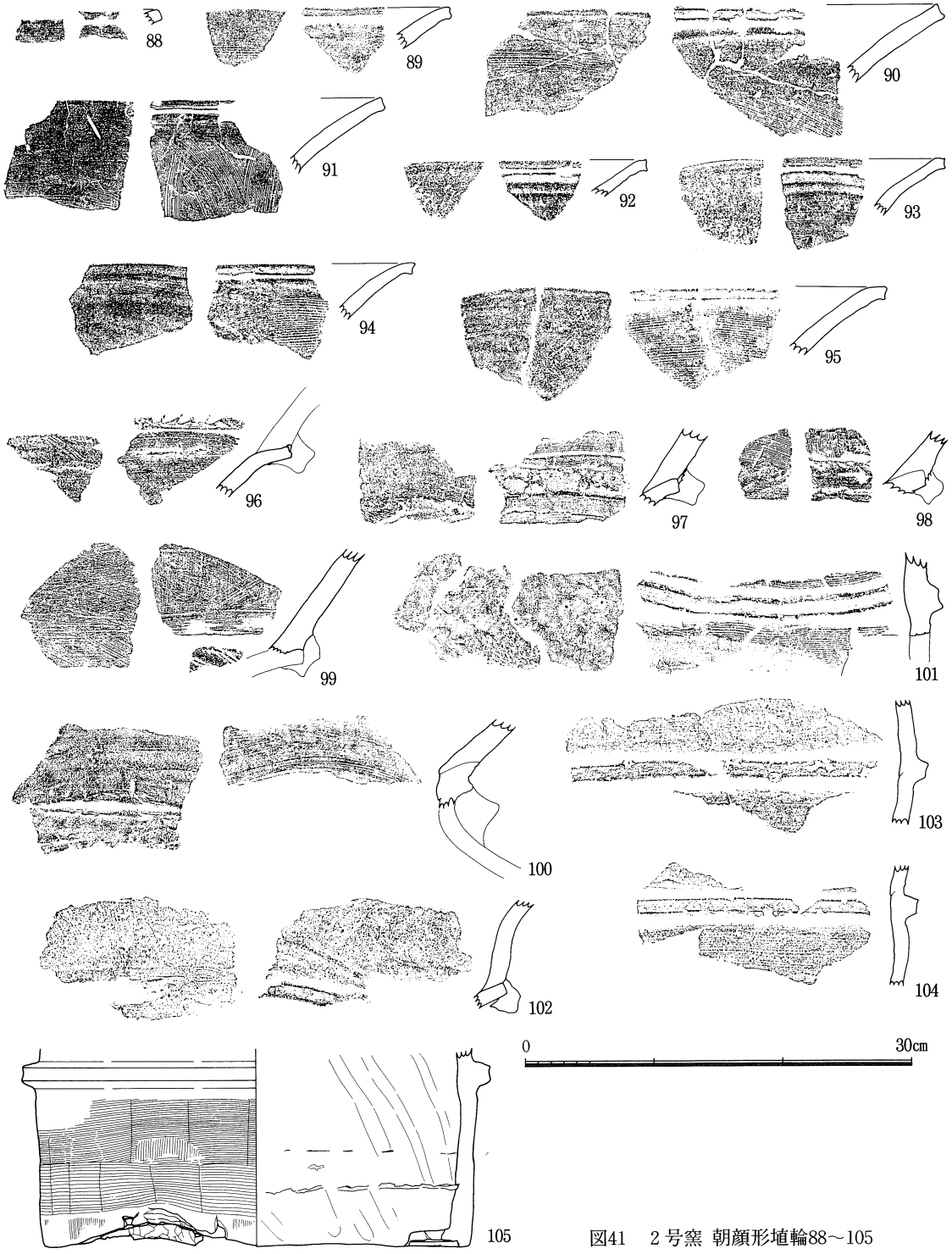


図41　２号窯 朝顔形埴輪88～105

～**105**は胎土・色調と特異な焼き歪みの具合から、同一個体と判定されるものである。ベンガラは**89**・**101**に確認されなかっただけで、大半は塗られていたとおもわれる。

円筒のヘラ記号は、大型に１種１点(**111**)、中型に７種９点(**24**・**106**・**110**・**115**～**120**)、小型に３種６点(**107**～**109**・**112**～**114**)認められるが、意匠不明のものも多い。そのなかで凸型の二重弧線(**116**)は後述する３号工房に類品があり、**117**・**118**の格子文は３号窯でも出土している。施文部位が確かめられるのは、**106**(口縁部)と**113**～**119**(胴部)である。

形象は家・盾・靫・甲冑・蓋・大刀・人物・その他があるが、いずれも破片である。家は特殊な屋根の部材とみられるⅠ類(**121**～**126**)と通常の家形のⅡ類(**127**～**131**)がある。Ⅰ類の**121**・**122**は幅約19cm、厚さ2.3～2.7cmの粘土板(長さは**124**で残存長23cm)の表側の上下端に桟状の突帯を貼り付けたものである。上位突帯は上縁部からややさがったところにあって、幅2.5cm～３cm、高さ２cm前後を測り、下位突帯は下縁に沿って付けられていて、幅2.7cm前後、高さ約１cmを測る。突帯間は平滑になでたあと、ヘラ描きの幾何学文様が刻まれるが、その過程で上位突帯は文様帯との接合部に曲面をつくりだしている。裏面は長辺に平行してナデ調整され

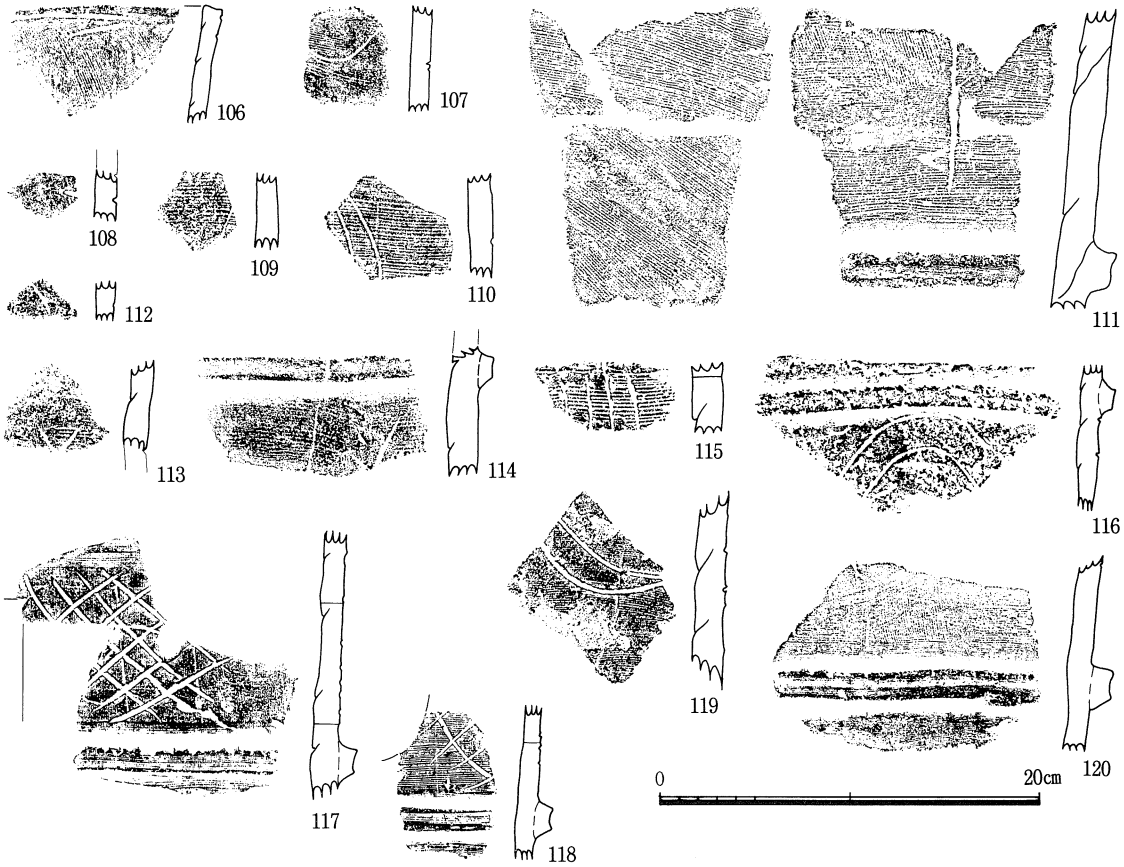


図42　２号窯 ヘラ記号106～120

ていて、要所に断面三角形の粘土帯を雑に貼り付けている。この粘土帯は基部の厚さ約４cm、高さ約4.5cmで、下側を底面とするために丹念に指ナデ調整している。この面を水平にして本体を据えると、粘土板は約55°の傾斜で横位にのびることになる。表面の文様帯は上下に複線を引き通した後、これに直交するかたちでやや幅の狭い複線をひき、縦約8cm、横約10cmの長方形区画を作出している。そして区画のなかには、直径約７cmのコンパス描きの重圏文と直弧文を組み合わせた文様区と十字形および対角線からなる文様区とを交互に配置している(図44)。ただ**123**などではかなり変則的な構成になっている。また**126**は文様区の縦が11.5cmを測る大振りなもので、文様帯の下辺に鋸歯文をつけ加えている。このような文様構成は、九

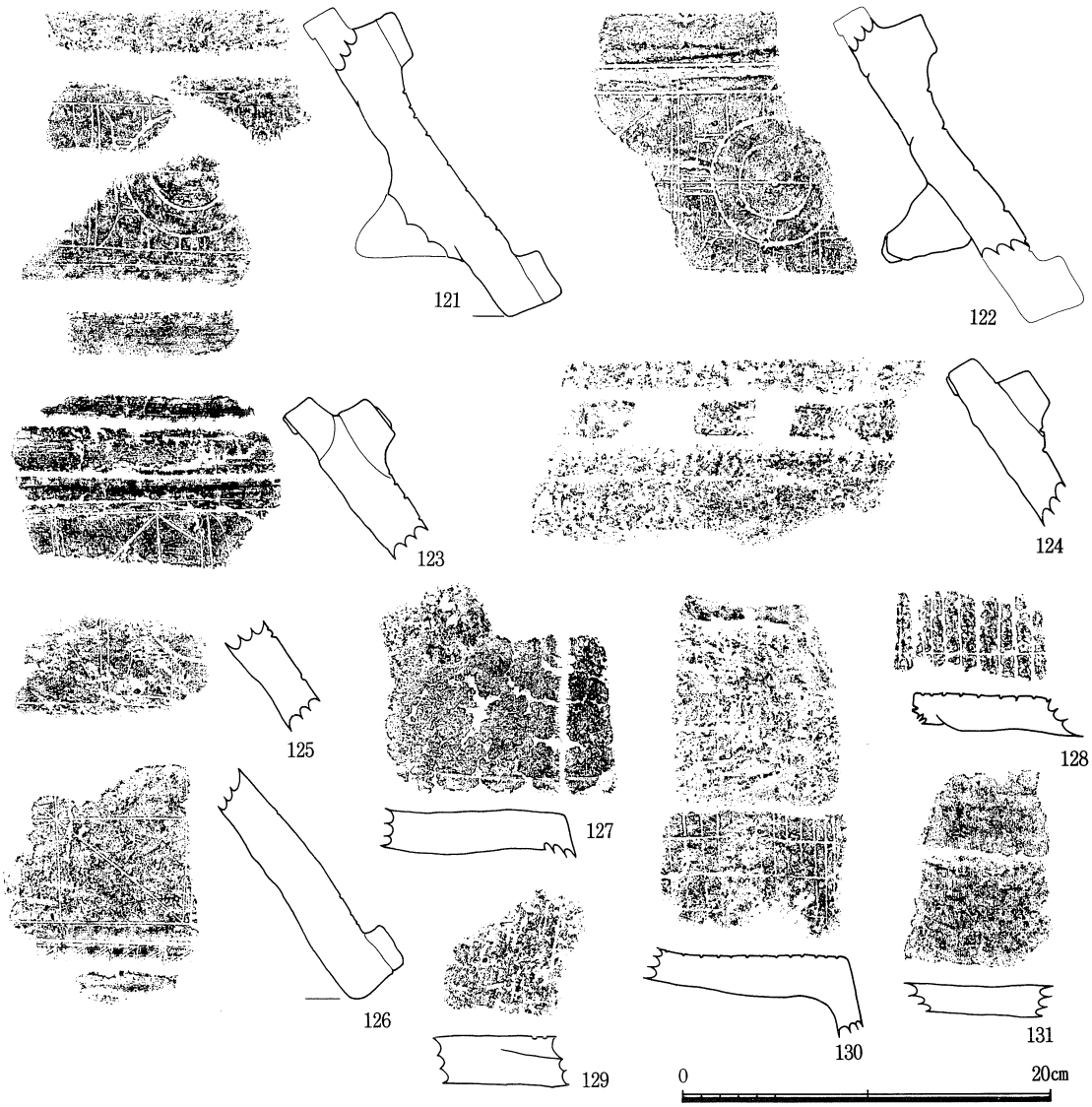


図43　２号窯 形象埴輪 家121～131

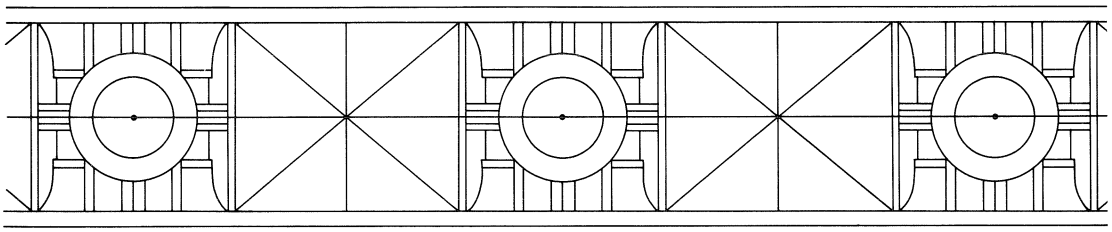


図44　家形埴輪Ⅰ類文様帯復原図

州の装飾古墳の石棺などにみられるものと類似している。このⅠ類の埴輪は裏面に台部に載せるための突帯をもつこと、上端に有段の受け部がつくられていること、さらに角度をもつことなどから、分割してつくる屋根の一部になるとおもわれる。ひとつの試案としては、棟の直下を横帯文で飾るための部材などが考えられる。こうした形態の家形埴輪は寡聞にして知らないが、現実に存在するとすれば、これから復原される家形埴輪は今城塚古墳の家形埴輪よりもさらにひと回り大きなものになる。逆に言えば、そうした巨大な埴輪をA群の窯で焼成するためには、屋根もまた分割せざるを得なかったと推察される。なおⅠ類にはベンガラが観察されていない。Ⅱ類**127**～**131**はいずれも壁材とみられるもので、**128**・**130**には網代を表現したとおもわれるヘラ描きがある。**127**・**128**・**130**にはベンガラが塗られている。

盾は盾面の文様部**132**～**135**と粘土板の剥がれた円筒部分**136**・**137**がある。**132**は盾の下部で、右側裏面には円筒の剥がれた面がみられる。鋸歯文は高さ19.5cmを測る大振りのもので、下端は粗目の綾杉文とみられる横帯で画されている。これから復原される盾形埴輪は相当大きなものと思われる。鰭状部の先端(**133**～**135**)、盾面円筒部の破片(**137**)には、いずれも綾杉文がほどこされている。ベンガラは盾形埴輪のすべてにみられ、**132**～**135**では裏面にも塗られている。

靫は、矢筒部**139**と背板の破片**138**・**140**～**142**・**144**～**146**がある。**139**は矢筒部の右上から背板にかけての部分で、背板の中央に直弧文、周縁には梯状の界線を配し、陰になる矢筒部側面にも直弧文をほどこしている。**138**・**140**・**145**にはレリーフ状に貼りつけた円形の飾文がみられ、なかには多条沈線を充填している。**138**の円形は直径25cmほどに復原されることから、靫本体の復原高は萱振1号墳や宮山古墳の靫にも匹敵するものとなろう。**144**・**146**は板状の破片に梯状の界線を刻んだものである。この背板にみられる特徴的な界線を靫の文様として重視すれば、箱形を呈する**143**なども矢筒部の破片になるのかもしれない。また**144**の周縁にある片押えした肉彫り状の文様帯はこれらの梯状界線の前段の文様とみられ、ここでは一応、靫に含めている。これらの背板もしくは背板とみられるものには、すべて両面にベンガラが塗布されている。

大刀**147**は、鞘の側面に頂部が円弧状に突出する盾を貼り付けたもので、大半は欠失してい

る。筒状の鞘部分は粘土紐を巻き上げて成形しており、外面はハケ調整し、内面はなでている。また盾部装着付近はヘラケズリで器面を整えている。鞘部にはヘラ描き直線を小刻みにつけ、盾部は梯状の界線などを刻んでいる。盾の形状から大刀部分の幅を復原すると20cmにもなり、後述する谷部の6号溝の大刀形**5**と比べても2倍以上の大きさになる。なお**147**は茶灰褐色を呈するが、灰原から検出した灰色化した破片と接合している(口絵23上)。外面にはベンガラが塗られている。

草摺は16点(**148**～**163**)出土している。いずれもスカート状にひろがる破片で、表面には1.5cm

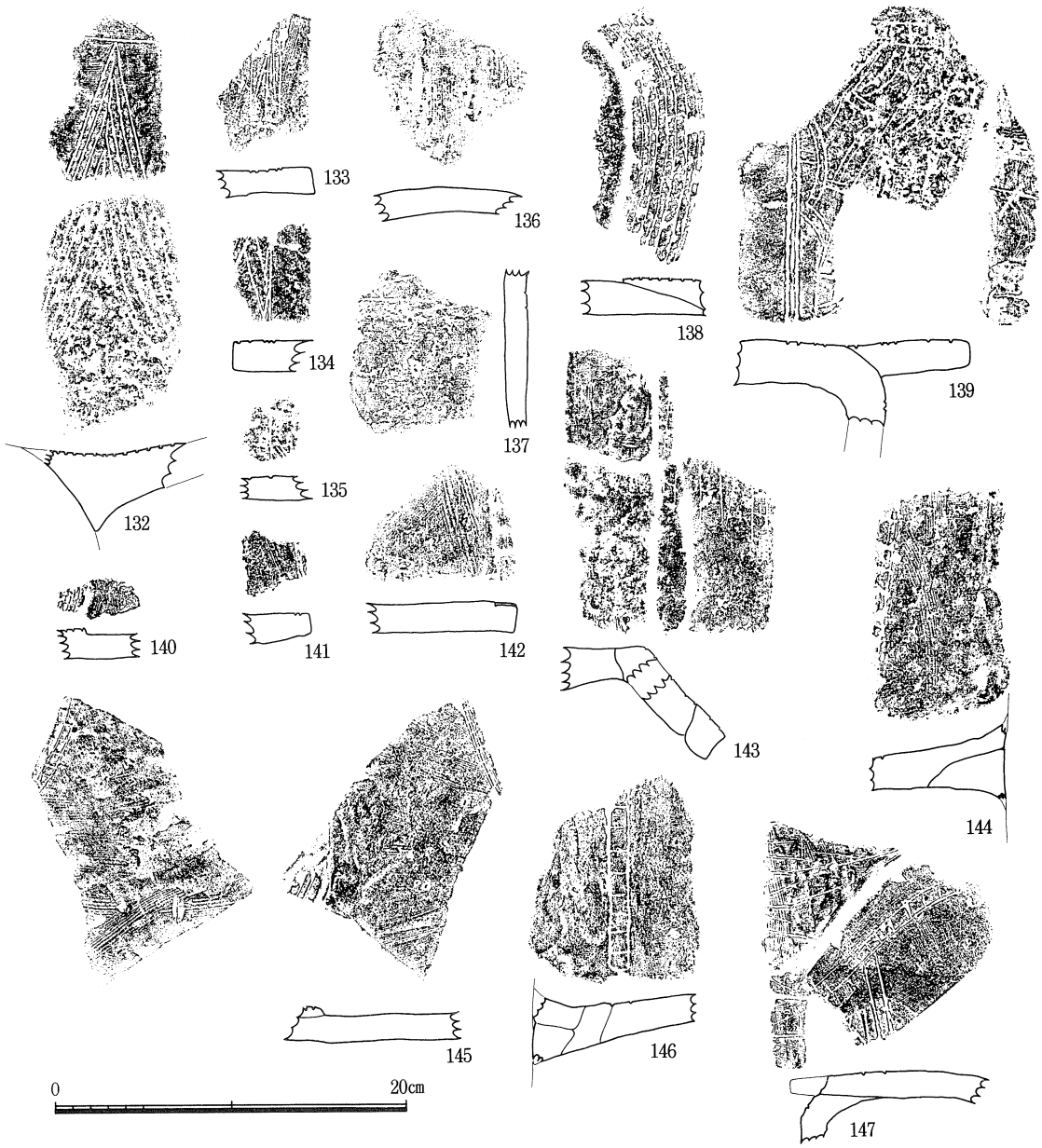


図45　2号窯 形象埴輪 盾132～137 鞆138～146 大刀147

から2.9cmの間隔でひいた平行沈線を幾段にもめぐらせていて、１段おきに綴紐を模したとみられる下向き鋸歯文を並列している。**148**にみられる３段続きの鋸歯文は単に割り付けを間違ったためで、中間段の線刻は途中でやめている。最下段には２本の垂下条線の先端に尖頭菱形の図形をあしらった文様をところどころ配している(**160**～**163**)。またいずれの破片にも威し糸の表現とみられる縦線帯が認められず、これについてははじめからひかれていなかったと考えられるなど、全体的にみて、写実性よりも装飾性を重視した表現になっている。図47はこの一連の草摺片のヘラ描きを復原したものである。表面にはすべてベンガラが塗布されている。

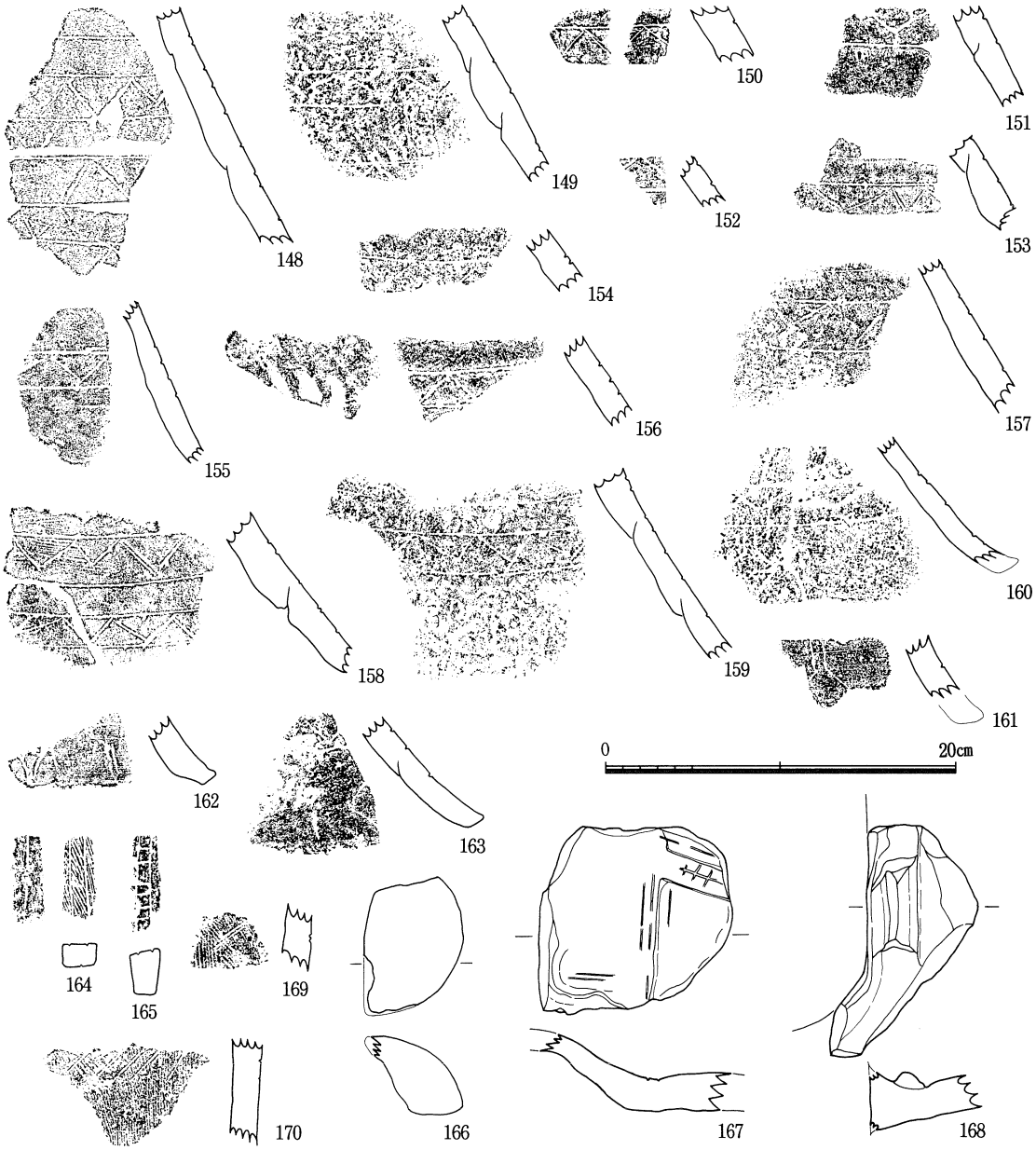


図46　２号窯 形象埴輪 草摺148～163 蓋164･165 その他166～170

蓋は立ち飾りの鰭部の細片を２点検出している。**164**には相対する２面に２本と１本のヘラ描き沈線があり、**165**には外面に梯状のヘラ描き文様がみられ、ベンガラが塗布されている。

そのほかでは**166**は房状の中実のもので、外表面はていねいになでられている。**167**は曲面の体部に刻目のある突帯をめぐらせたもので、人物埴輪の腰部か動物埴輪の一部とみられる。**168**は隅丸方形の台部の剥がれた痕がみられ、器財埴輪などの外縁に付けられていた突帯の類とおもわれる。**169**･**170**はタテハケをほどこした円筒部で、**169**は斜向する２組の沈線、**170**は横位に並ぶ刻目が認められるもので、器財埴輪の一部とみられる。２点ともベンガラが塗布されている。

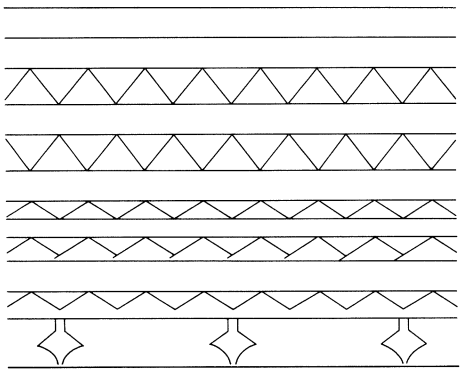


図47　草摺形埴輪文様復原図

土師器では壷、高坏、甕がある。**171**は中形の直口壷の口縁部片である。内外面ともナデ調整している。火熱のためか、かなり硬化している。**172**は手づくね様の小形の二重口縁壷で、口径7.8cm、器高8.5cmを測り、口縁部はヨコナデ調整している。体部の半面に黒斑が認められる。**173**は壷の底部片で、外面はナデ調整、内面はヘラケズリしている。**174**は大形の高坏片で、ハケ調整痕をそのまま残している。内面にはヘラによる暗文風の条線がみられる。**175**･**176**は小形高坏の坏底部と脚部の破片である。どちらもナデ調整されている。**176**は淡褐色と暗褐色の２つの破片が接合されたものだが、後者の１片はとくに堅緻であり、破損後に再火熱され

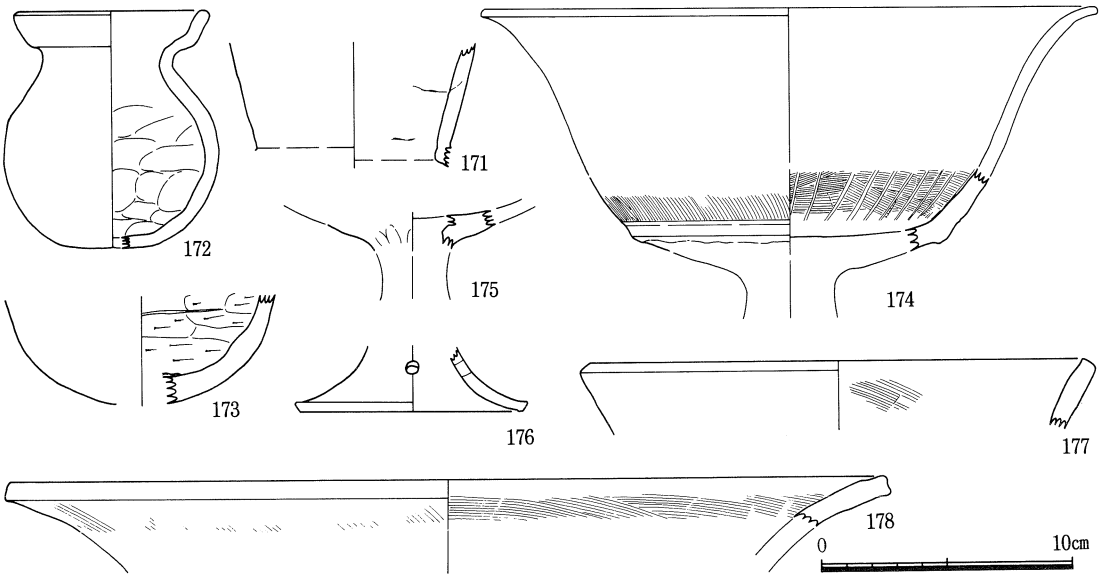


図48　２号窯 土師器 壷171～173 高杯174～176 甕177 口縁部178

たものとみられる。**177**は大形甕の口縁部片で、口径は20.5cmに復原される。上端部は外傾する面をもつ。**178**は口径35.4cmを測る器種不明の口縁部である。外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整をほどこしたのち、ヨコナデしている。一見、朝顔形埴輪のようにもおもえるが、端部の形状と厚みから、一応土師器に含めている。

また窯内からは多くの焼土塊が出土している。そのなかの２点(PLATE63c)について、付記しておく。**179・180**はスサ入りの天井材**181**や**182**と違って、地山の砂質土が火熱されたもので、壁もしくは床の一部とみなされる。ただどちらにも、赤変した表面(窯側)に直径１cm弱、深さ約1.5cmの孔が認められ、その奥部はやや尖りぎみの半球状を呈している。観察されたのはこの２点にかぎられ、その目的も判然としないが、なにか棒状のものが突きたてられていたとみられる。

3号窯

３号窯は２号窯の西北約4.5mのところに築かれ、１号窯からはおよそ７mほど隔たっている。現存長は7.6m、中央部での幅1.35m、同部での現存深約0.6mを測り、焼成室の大半と燃焼室・焚口部(５区～６区)までのこっている(図49・50、PLATE10)。焼成室と燃焼室との境に長径0.35m、短径0.2m、深さ0.2mのピットがあり、内部には若干の焼土と暗灰色の炭灰土層が詰まっていた(1)。また焚口部から前庭部にかけての範囲は窯の延長上に地山をあさく樋状に掘りくぼめて成形している。中心軸の方向はN－39°－Eで、１・２号窯の主軸よりやや西へ偏向している。床面の傾斜は16°～20°である。１・２号窯と同様に、半地下式の細身の窯で、構築の手順、平面形ともよく似ており、同一型式の窯といえる。焼成室の土層は、上層から流入土層、崩落土層、堆積土層で、１a・２号窯と変わらないが、焚口部から燃焼室にかけての炭灰層が明確に把握できるのは３号窯だけである。縦断面図に示すように、焚口部付近の炭灰層は４b区の床面からつづく暗黒色のものとその下層にある暗灰色のものとの２層にわけられる。どちらからも剥落した壁材とみられる焼土塊が出土していて、燃焼部床面が繰り返し浚えられたことがわかる。

３号窯の横断面形は、おおむね１区から４a区までが舟底形、４b区と５区がフラットな床面をもつ箱形、６区と７区が皿形である。いいかえれば焼成室が舟底形、燃焼室が箱形、焚口部が皿形ということになる。壁面は垂直もしくは外傾し、剥落して傷んだ部分が多い。ここでも補修したところはみられなかった。床面の焼土は１区から５区までみられ、厚いところでは約18cmを測る。また２区から４区にかけての焼土中にかなり明瞭な分層線が認められた。この上下２層の焼土層が焚口部分付近の２層の炭灰層に対応するのかもしれない。なお燃焼室の暗黒色炭灰層の直上にある焼土については、２次堆積したものとみられる。

３号窯の遺物も大半が埴輪片で、あと少量の土師器片や焼土塊が出土している。埴輪は円筒・

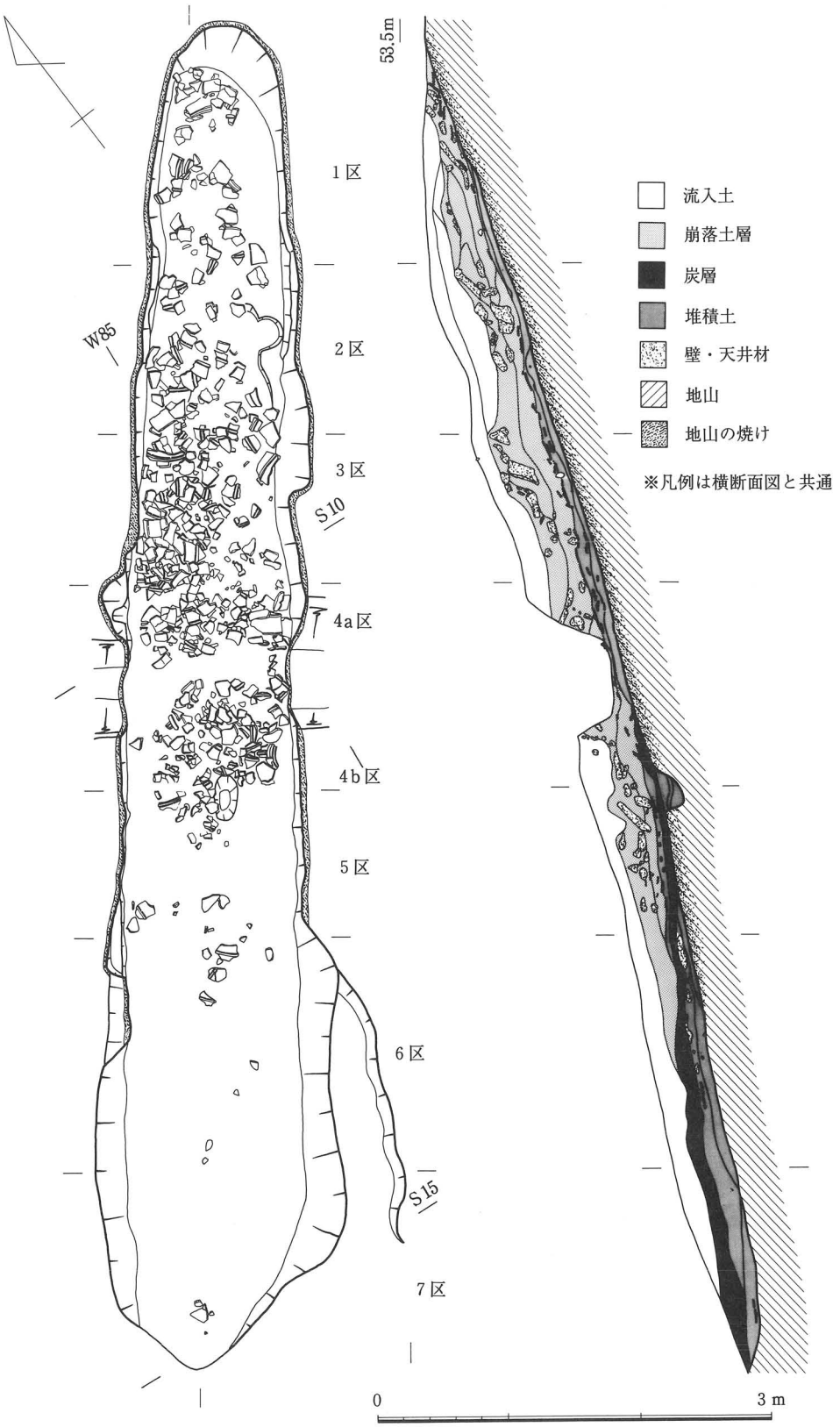


図49　3号窯 平面図・縦断面図

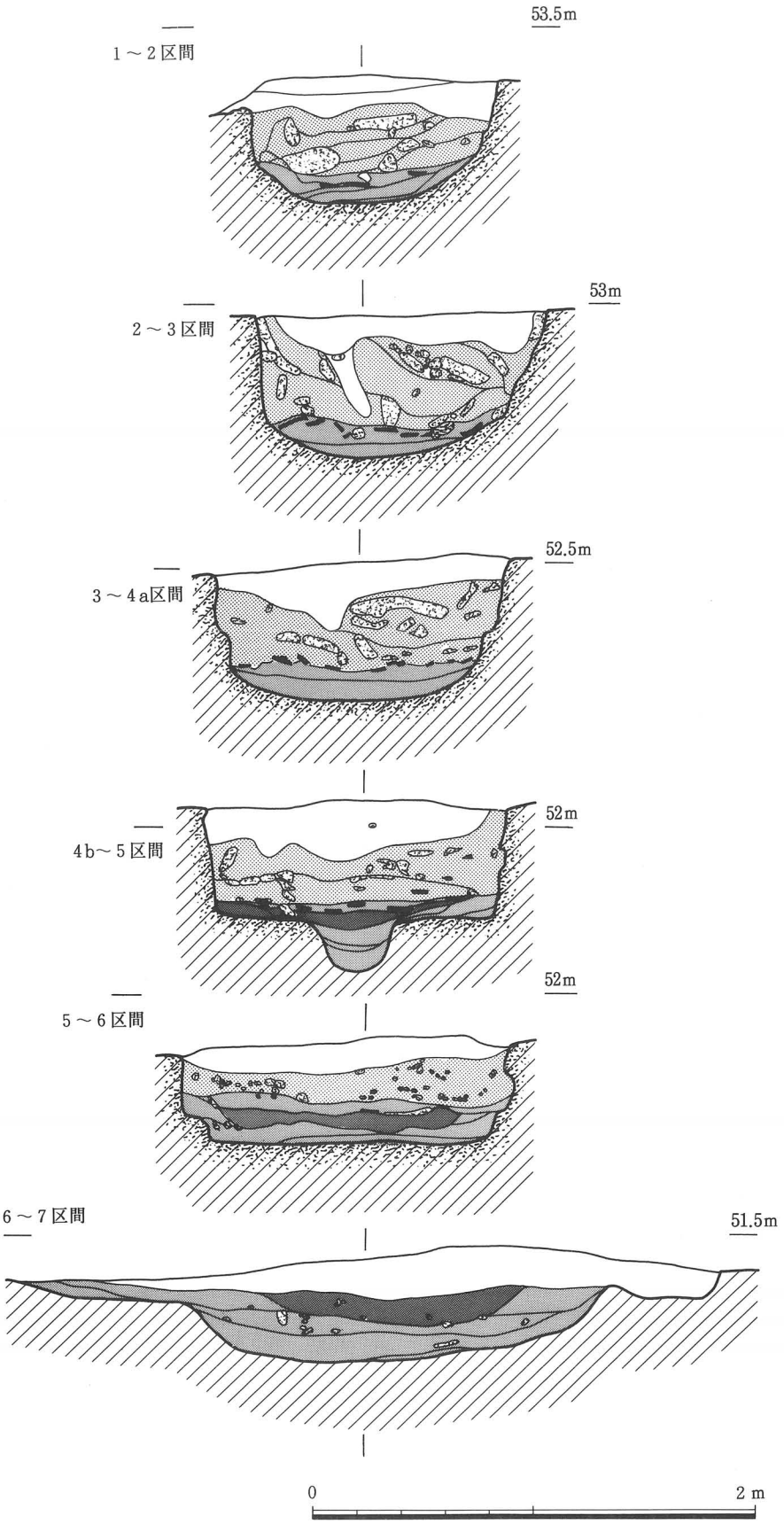

53.5m
1～2区間
53m
2～3区間
52.5m
3～4a区間
52m
4b～5区間
52m
5～6区間
6～7区間
51.5m
0
2 m

図50　3号窯 横断面図

朝顔形・形象である。床面ないし堆積土層の埴輪は、1・2区の東半分がやや少ないものの、焼成室のほぼ全面から出土していて、1・2号窯と同様、床面に敷き込んだようにして検出された。4a区と4b区のあいだに帯状の空白があるのは、用水路の掘削によって焼土層の上部が削られているためである。また5区から7区の燃焼室と焚口部分ではごくまばらである。土師器のなかで床面の資料としては、4a区の**133**、2区の**134**、7区の**137**があり、**135・136**は堆積土からの出土である。なかでも**137**は約5m離れた3区の堆積土出土資料と接合している。

3号窯の遺物(図51～64、PLATE43～46、59～64、表47・48-4)

埴輪には円筒・朝顔形・形象がある。円筒は大型・中型があり、小型はみられない。大型は胴部**1**と基底部**2**があり、どちらもⅡ類である。**1**は中位の破片で、最大径は47.4cmを測る。タガはやや太めの1類で、スカシ孔は円形である。外面のヨコハケはBb-1種で、内面はていねいにナデ調整している。**2**は第1段までの遺存で、底径47.4cm、基底部高17.5cmを測る。タガは

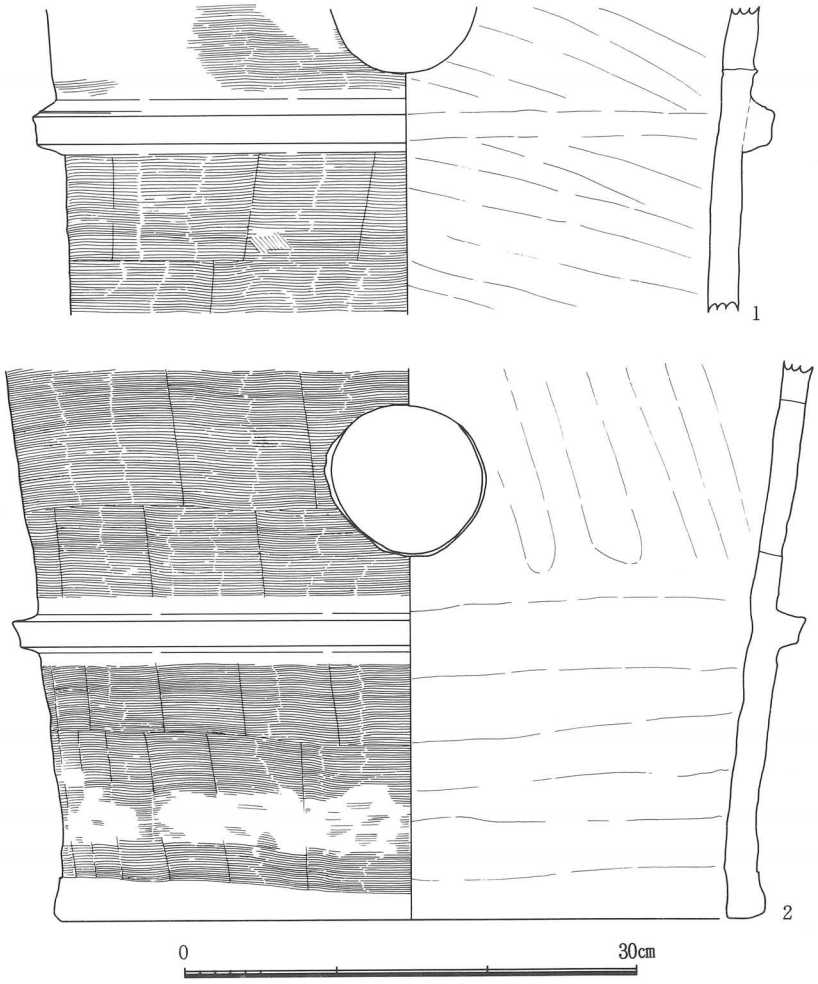


図51　3号窯 円筒埴輪1・2

シャープな１類で、スカシ孔は円形である。外面のヨコハケはＢb-1種である(2)。内面は基底部が横方向、胴部が縦方向のナデ調整である。

中型は95点を資料化した。完形品はみられないが、**30**がＩa類、**68**がＩb_2類に比定される。ただ胴部の資料をみると、第２段･第３段ともスカシ孔のないものはほかに確認されず、Ｉb_2類は限定的な資料とみられる。またＩb_1類についても現有資料にはみられなかった。口縁部を主体とする資料は29点あり、口径を復原できたものでは**3**の36cmから**16**の48cmまでみられるが、その多くは40～45cmの範囲にある。形状ではＡ1類が１点、Ａ2類が６点、Ａ3類が11点、

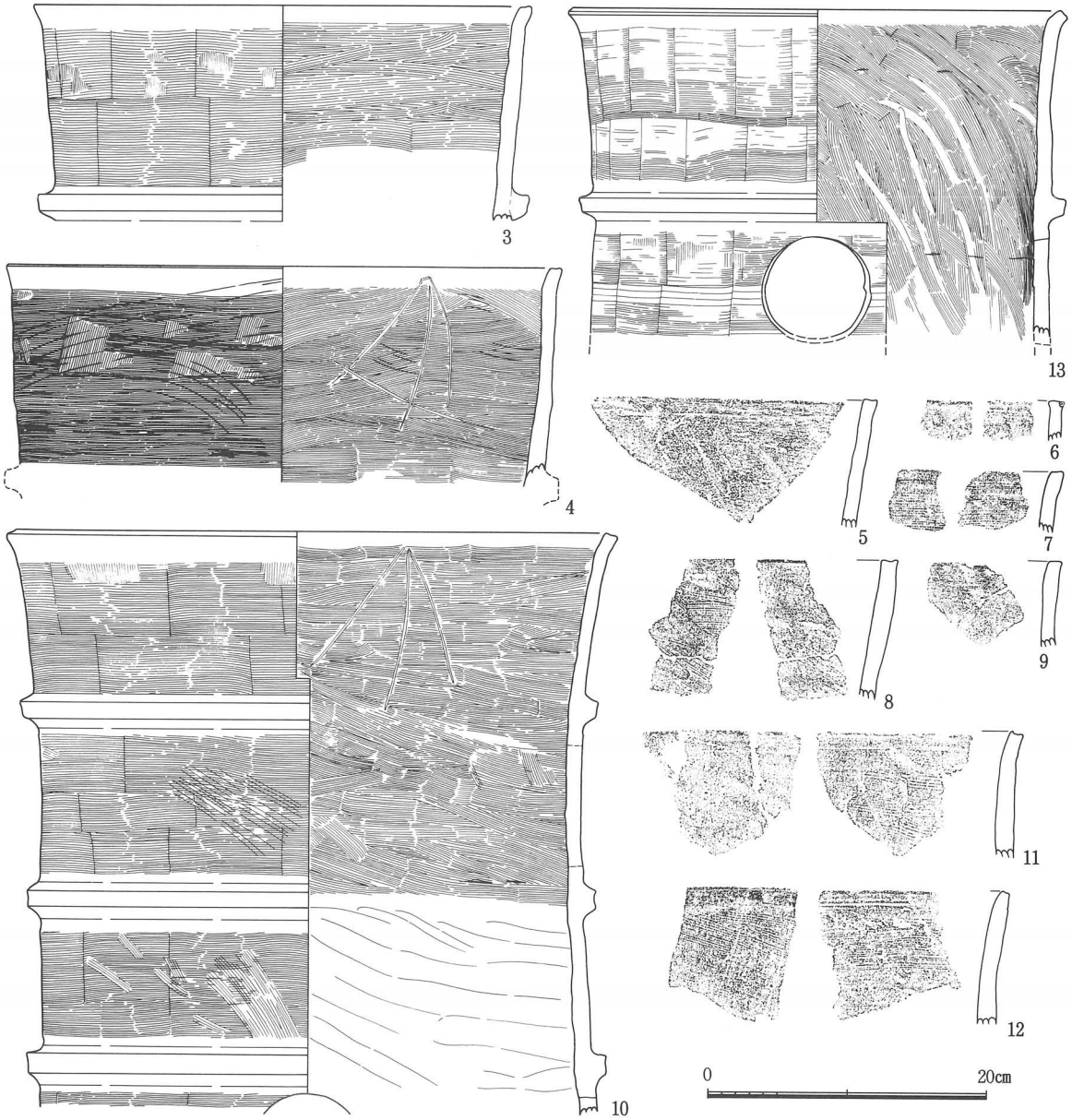


図52　３号窯 円筒埴輪３～13

A4類が4点、A6類が2点、B1類が4点で、A3類がもっとも多く、あとA2・A4・B1類が目立っている。口縁部高は**10**の12cmから**4**の14.6cmまでみられる。外面の調整は、B種ヨコハケが主体で、細別できるものではBb−1種(**3・10・13**)が目立っている。**4**や**9**などは厚く塗られたベンガラのためヨコハケの種別が判然としない。ナデ調整は**25**など数例である。内面もハケ調整が多いが、A3・A4・A6類などにナデ調整が若干みられる。ベンガラ塗布資料は約3分の1のものにみられ、類型別ではA2類の割合が高くなっている。なお**4**はピット8出土のヘラ記号(内面)のある**36**と同一個体で、図52では図上にて復原合成している。

胴部を観察できるものは、45点ある。タガはほとんどが1類で、4類の**48・52**などはめずらしく、台形とM形の比率は約1:3である。タガの間隔は10個体(**10・15・29**〜**32・34・40・55・68**)で計測でき、12cmがもっとも多い。**68**などは第1条から第4条まで整然と割り付けられているのに対し、**10**では最上段が13.5cmとひろくなっている。タガの割り付けは基本的に2本の水平なヘラ描き沈線でおこなう(**44・59**)が、沈線が1本のもの(**61**)や直接器面に貼りつけるもの(**60**)もある。特異なのは**56**〜**58**の3点のタガ(図57・PLATE63b)で、いずれも接着面の下半の

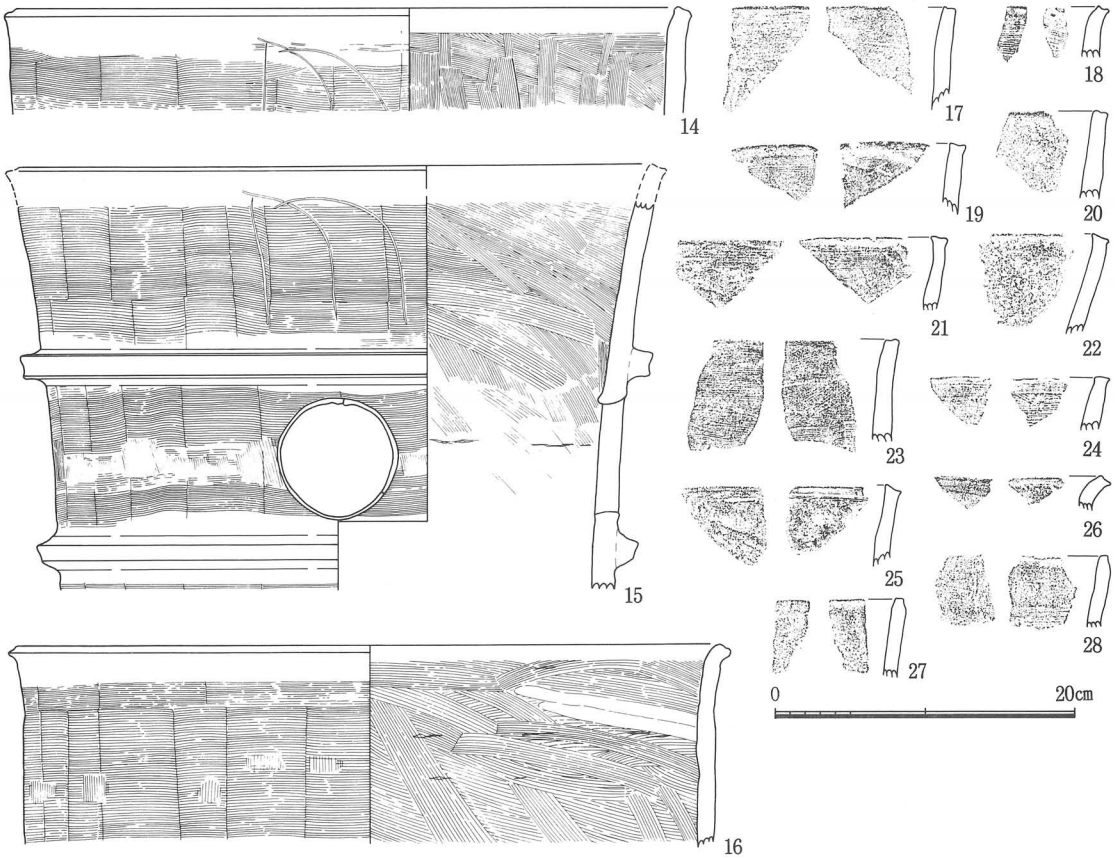


図53　3号窯 円筒埴輪14〜28

幅５mm～７mmほどがわずかにすいているもので、その部位にはしばしば横に走行する繊維状の痕跡がついている。これらの破片を埴輪の胴部に貼りつけた場合、その隙間は0.5mmから1.0mmの厚さの空間が生じることになる。これはタガの接着に先立って、蔓などの樹皮(おそらく甘皮)を扁平な紐状に裂いてつくった帯を円筒に巻き付け、タガの割り付けとしたものと推察される。そしてタガとなる粘土帯はこの帯を下端として巻かれていったものと考えられる(3)。実際に**57**・**58**などにはタガの下辺をヨコナデしたときの剰余の粘土が紐の下縁を巻きこむように食い込んでいるのが観察される。したがって焼成に際しては、この割り付け帯をとらずに装着したままおこなわれたと推察され、その結果**56**～**58**の断面図にみるような凹面が生じるのであろう。タガを割り付けるのにヘラ描き沈線をほどこしたり、直接貼りつけたりしている**59**～**61**には剥離面に埴輪の胴部にほどこされた１次調整のタテハケのネガティブな痕跡がつくが、これらの帯状痕にはそれがみられないことも、上記の推定を裏付けるものとなる。こうした一連のタガの割り付け法を巻帯(まきおび)手法と

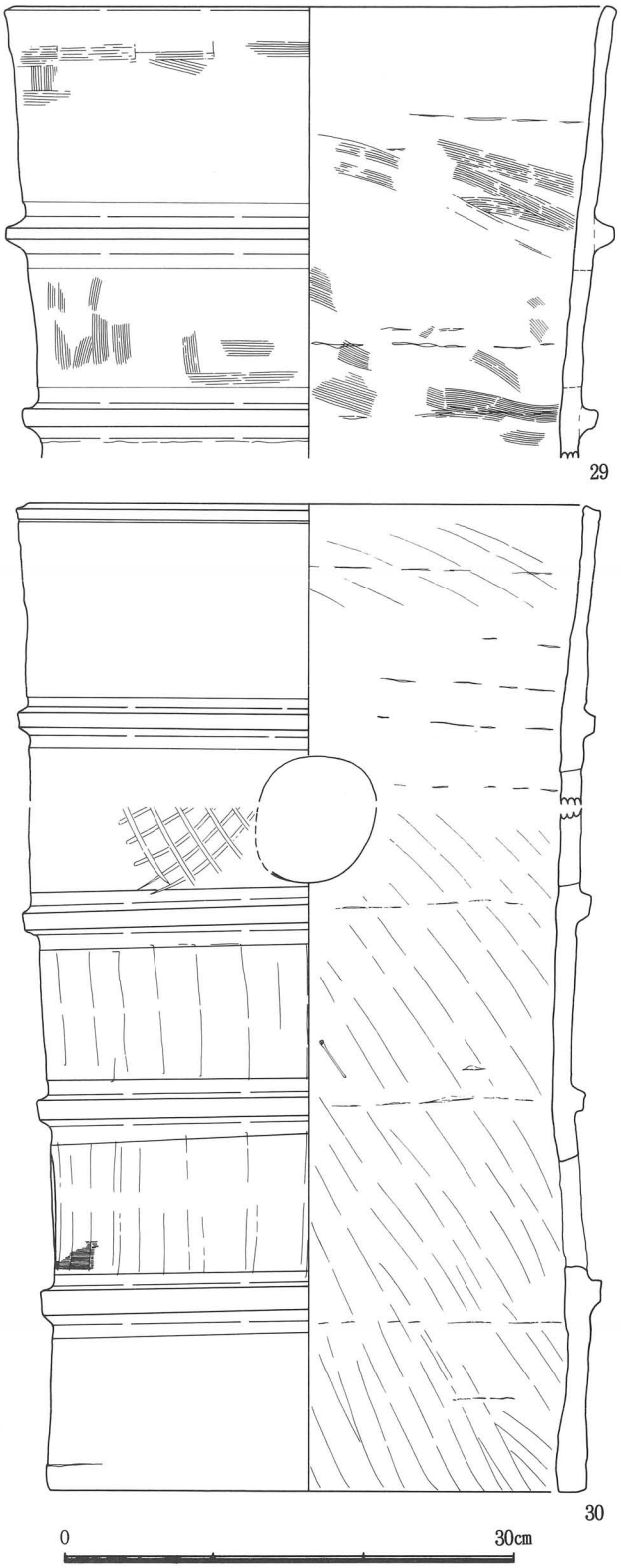


図54　３号窯 円筒埴輪29・30

名付けようとおもう。この巻帯手法によるタガは**37**の円筒のほか、３号窯の堆積土中にも２点認められている。スカシ孔は**49**が長方形であるほかは、すべてが円形である。なお**66**のスカシ孔の下方外縁に平織りとみられる布痕が幅0.5cm～0.7cm、長さ4.5cmほどの範囲に明瞭に認められる(PLATE70b)。胴部ではヨコハケの種別が判明するものを列挙すると、Ｂb-1種３点(**10**・**13**・**31**)、Ｂb-2種１点(**54**)、Ｂc種７点(**15**・**30**・**32**・**34**・**50**・**68**・**69**)などがあげられ、なかには**37**・

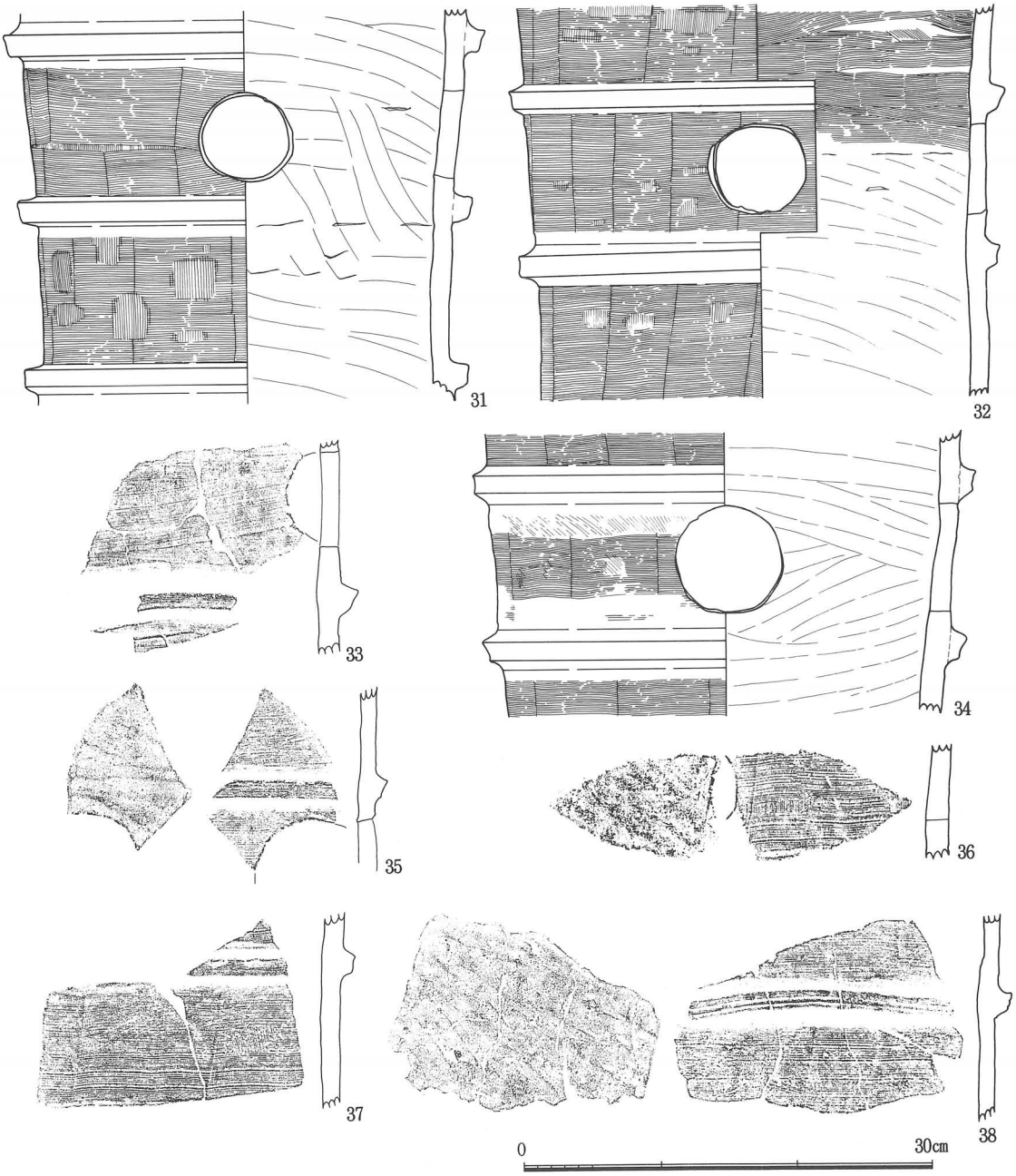


図55　３号窯 円筒埴輪31～38

38のようにBd種とみられるものがある。内面は大半がナデ調整していて、ハケ目のある破片の多くはより上位の口縁部側のものとみられる。ベンガラは45点中、12点にみられる。なお**46**には黒斑がみられる。基底部では28点の資料が観察された。基底部高はおおむね11.5cmであ

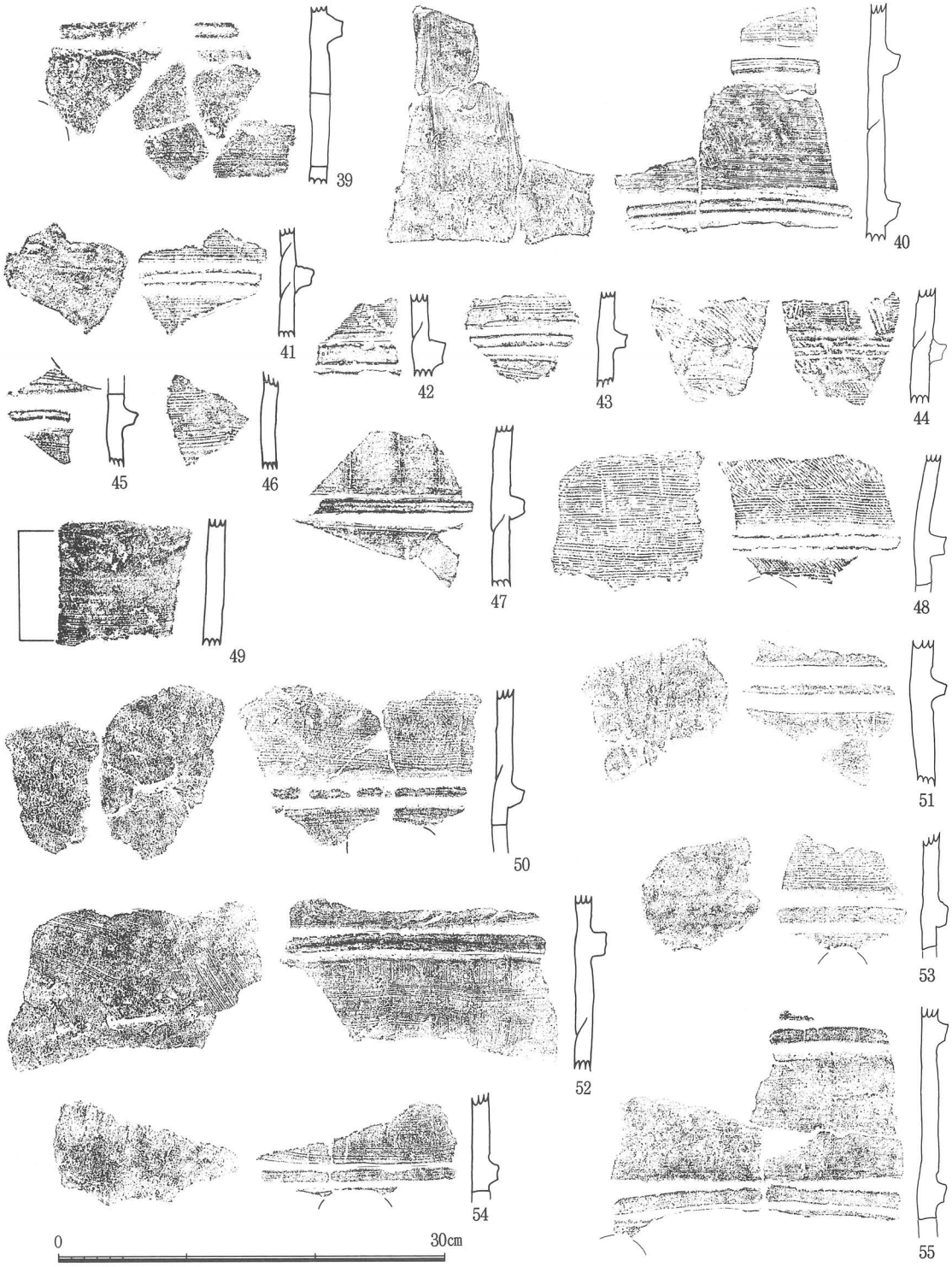


図56　3号窯 円筒埴輪39～55

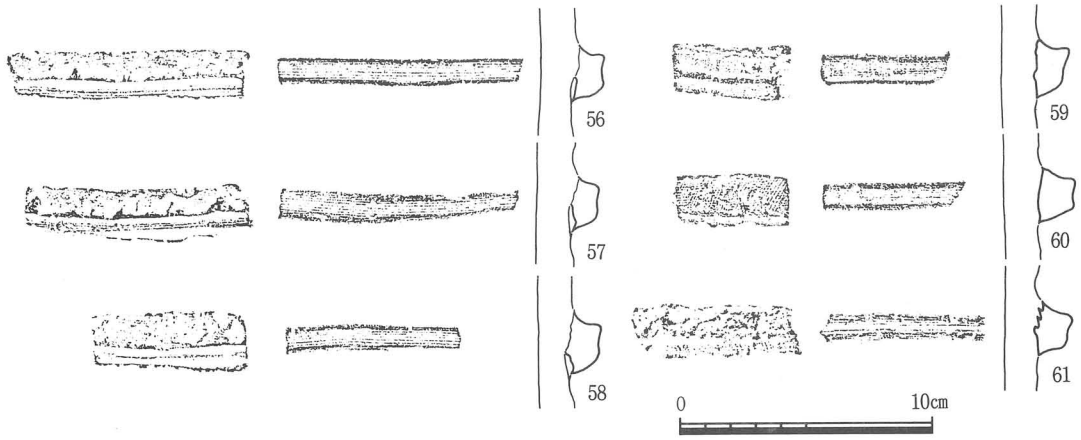


図57　3号窯 円筒埴輪タガ56～61

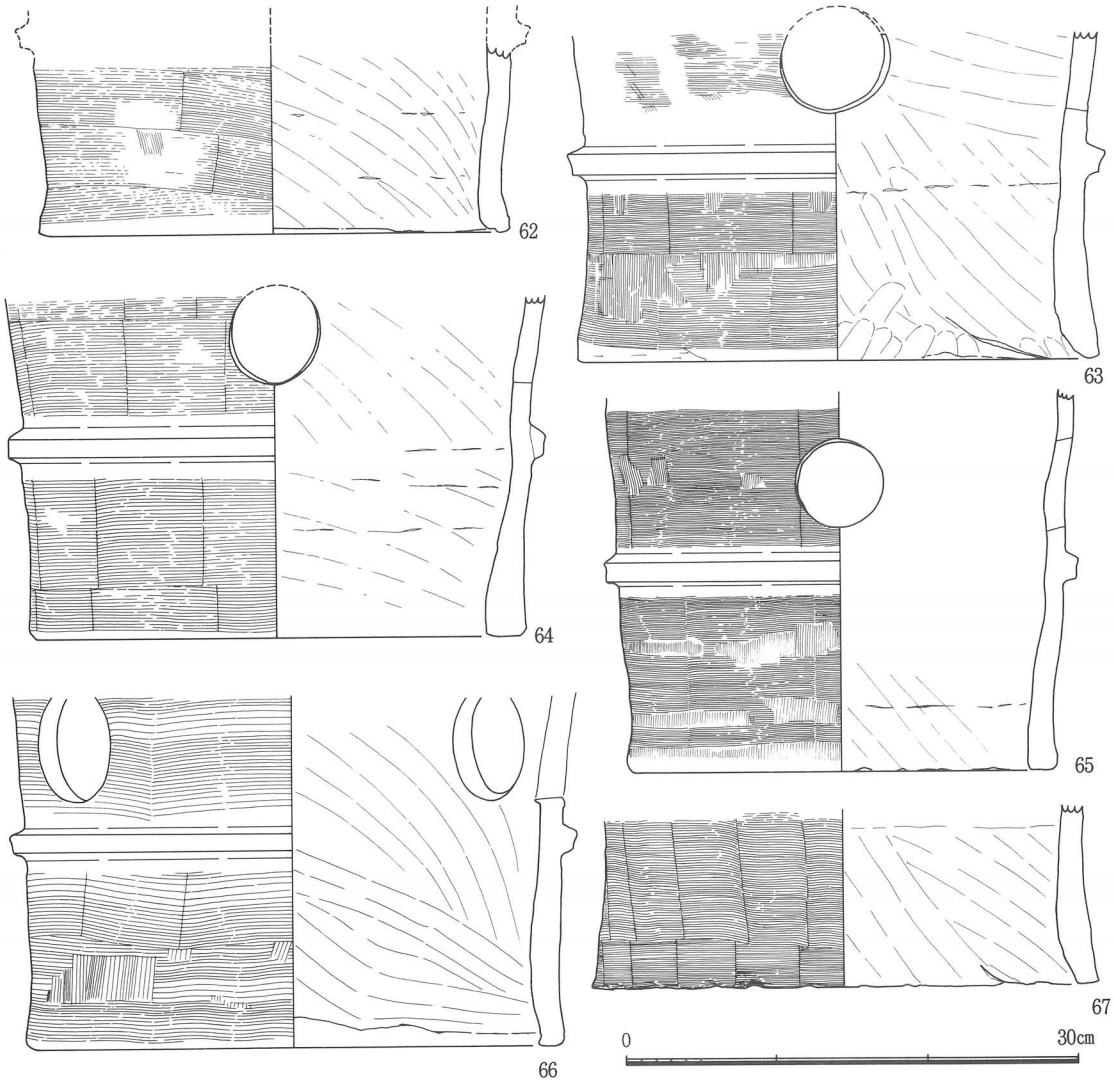


図58　3号窯 円筒埴輪62～67

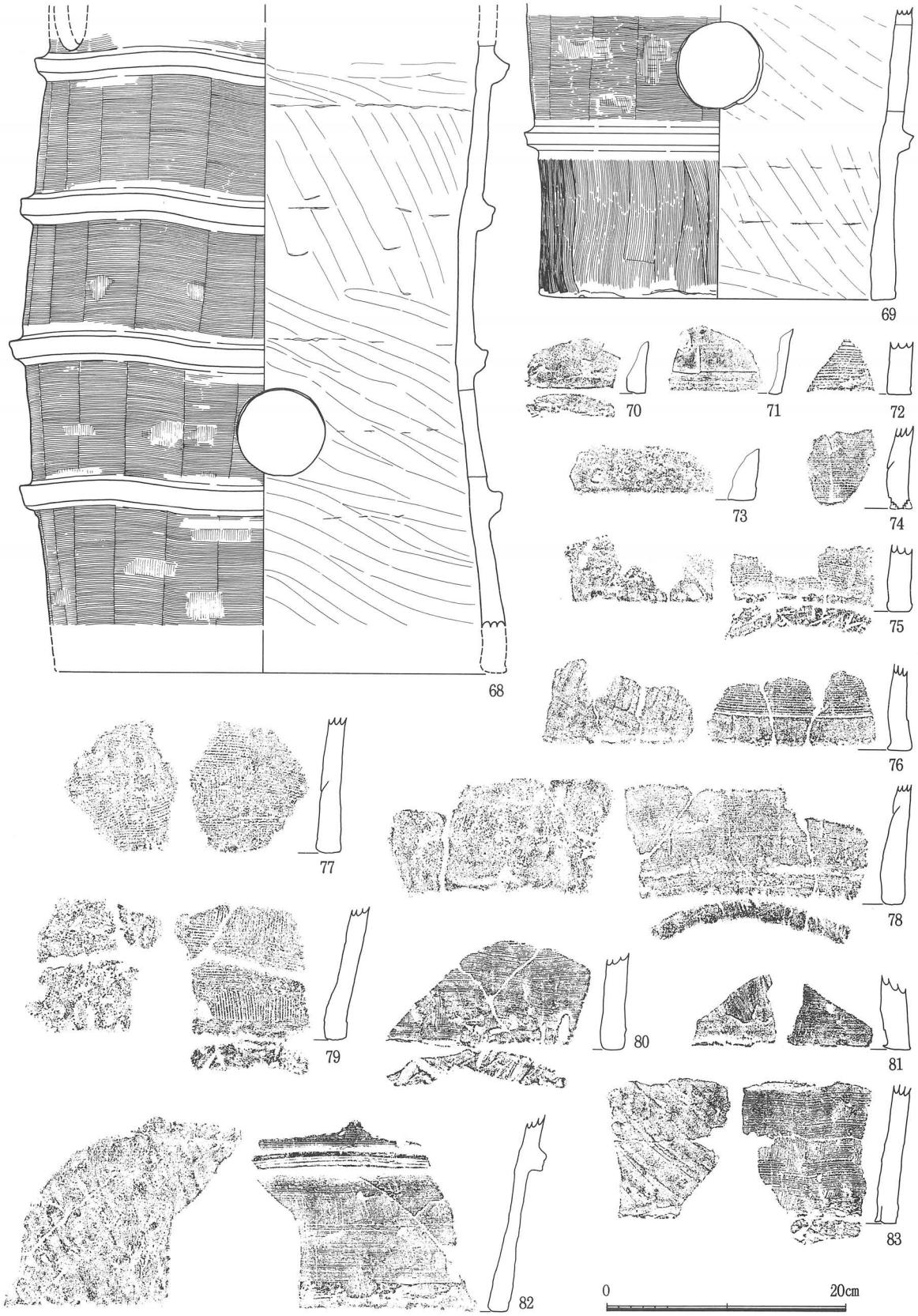


図59　3号窯 円筒埴輪68～83

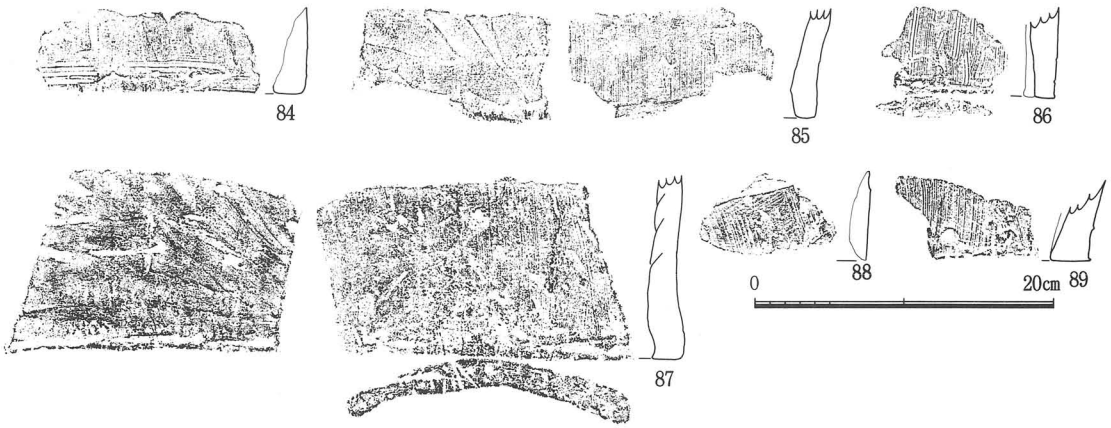


図60　3号窯 円筒埴輪84～89

る。外面は2次調整のヨコハケをほどこすもの(**62**～**68**・**71**・**72**・**74**～**83**)、ナデ調整するもの(**70**・**73**・**84**)、1次調整のタテハケのもの(**69**・**85**～**87**)がある。2次調整の種別では、Bb-1(**62**・**63**・**66**)、Bb-2(**64**・**67**)、Bc(**65**・**68**)がみられる。内面の調整は**77**と**81**がハケ調整であるほかは、いずれもナデ調整している。接合法は右巻き(**30**・**63**・**67**・**70**・**83**・**87**)と左巻き(**64**・**66**・**75**・**80**)が認められ、とくに**30**は右巻きの2帯づくりであることが確かめられている。ちなみに**30**は、色調のまったく異なる破片が接合した資料のひとつで、幸いにも全体がほぼ復原されたものである。この復原については、綿密に接合していったにもかかわらず、完成間近になって底面の高さが極端に歪んでいることが判明した。それは決して復原作業の歪みではなく、また一部の破片が極端に歪んでいるというものでもなかった。その原因はこの埴輪が何らかの理由で廃棄されたのちに破砕され、それぞれの破片がアンバランスに再加熱されたために、破片同士を接合するときにわずかずつの歪みが最終的に集積されて復原が不可能になったと判断されるものであった。これなどは、窯内に大量にのこされた埴輪片の在り方を考えるのに重要な資料になる。

朝顔形はいずれも中型で、口縁部21点(上縁部15点、屈曲部6点)、頚部の突帯1点(**112**)、肩部1点がある。口縁部の類型はA1類が10点、A2類が2点確認される。外面の調整はタテハケとナデ、内面の調整はヨコハケとナデがある。A2類(**92**・**93**)については、外面のタテハケと内面のヨコハケがていねいにほどこされ、ベンガラの塗り刷毛の痕も顕著にのこっている。屈曲部の資料のなかで、**106**と**110**は上縁部の接着面を幅ひろくとった類例の少ないものである。とくに**106**は擬口縁に突帯を接着したのちに上縁部をつくったもので、他の朝顔形とは製作手法が異なっている。肩部の**113**は外面を不定方向にハケ調整しているもので、内面は平滑になでている。ベンガラは朝顔形の約3分の2のものに認められる。このほかに1点、壷形の口縁部とみられる**102**がある。上縁部はつよく外反し、口径を復原すれば約40cmになる。

円筒のヘラ記号は、中型に11種13点(**4**・**10**・**14**・**15**・**30**・**114**～**121**)を検出している。このなかで

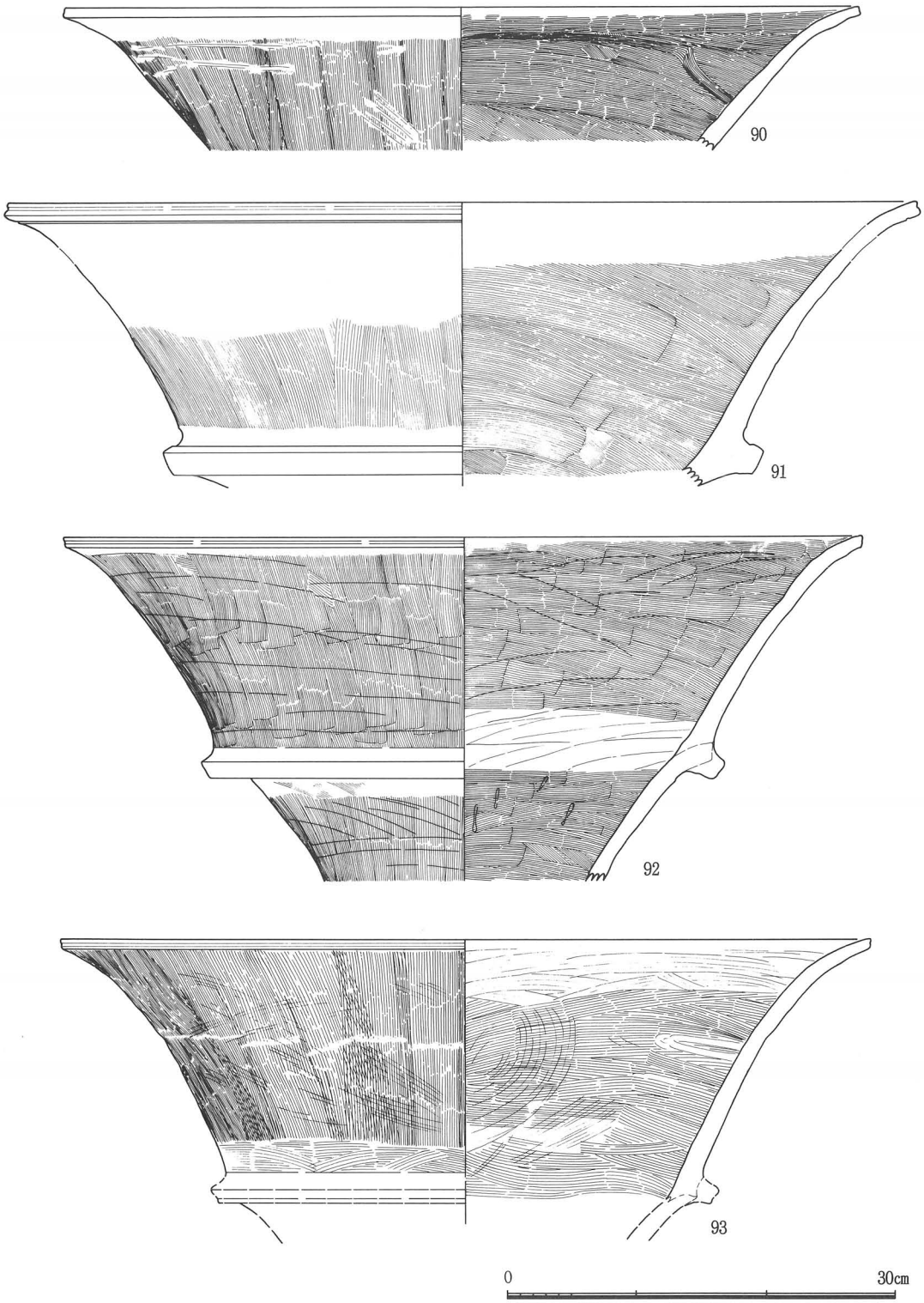


図61　3号窯 朝顔形埴輪90～93

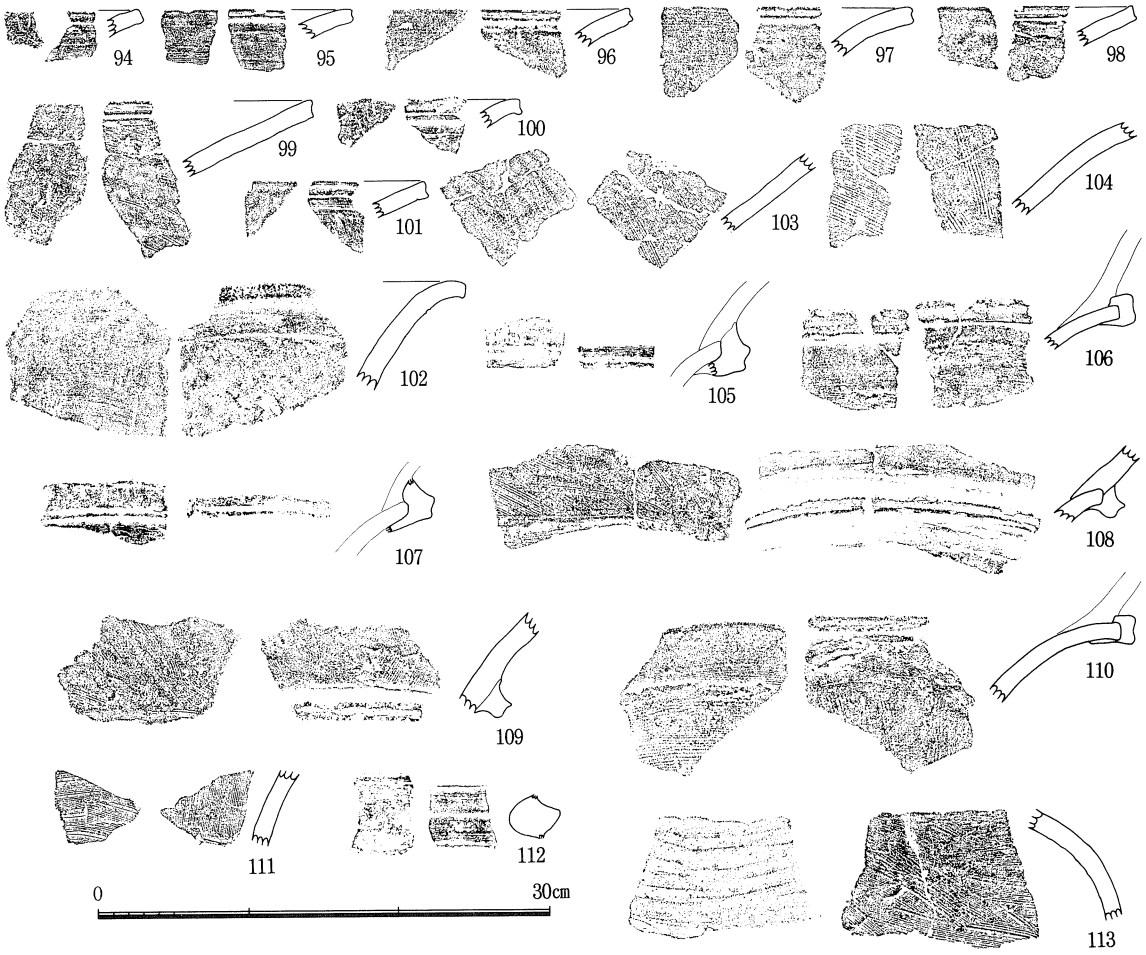


図62　3号窯 朝顔形埴輪94～113

14・**15**の「m」字形のヘラ記号と同じものが3号工房(**2**)、また**30**の格子状のものは2号窯(**117**・**118**)、**117**とおなじ記号が1号窯(**9**)からそれぞれ出土している。施文部位が確かめられるのは、**114**(口縁部)と**115**・**116**(胴部)である。

形象は家・大刀・蓋・動物・その他がある。家は2点(**122**・**123**)とも基底部の破片で、タガ状の突帯がめぐっている。大刀**124**は刀部側面の破片で、小刻みなヘラ描き線が多数つけられている。2号窯の**147**と同一個体とみられる。蓋はいずれも立ち飾り部の羽根本体**125**・**127**や鰭**126**の破片である。**128**は外側上段鰭と本体の先端部の幅があまり変わらないもので、外縁線も鰭から本体へ連続して付けられている。また片面は外縁線を比較的ていねいにひいているが、もう片方の面は充填する斜線を省略し、本体と鰭の分割線もひいていないなど、あきらかに手抜きをしている。動物は馬具の類がある。**131**は剣菱形杏葉を模したもので、上端を欠いている。残存長は7.2cmで、裏面には剥がれたあとがあり、縦断面は馬体に沿った感じで緩くカーブしている。**130**は扁平な円環状のもので、やはり裏面に剥がれたあとがある。円環状の雲珠を模

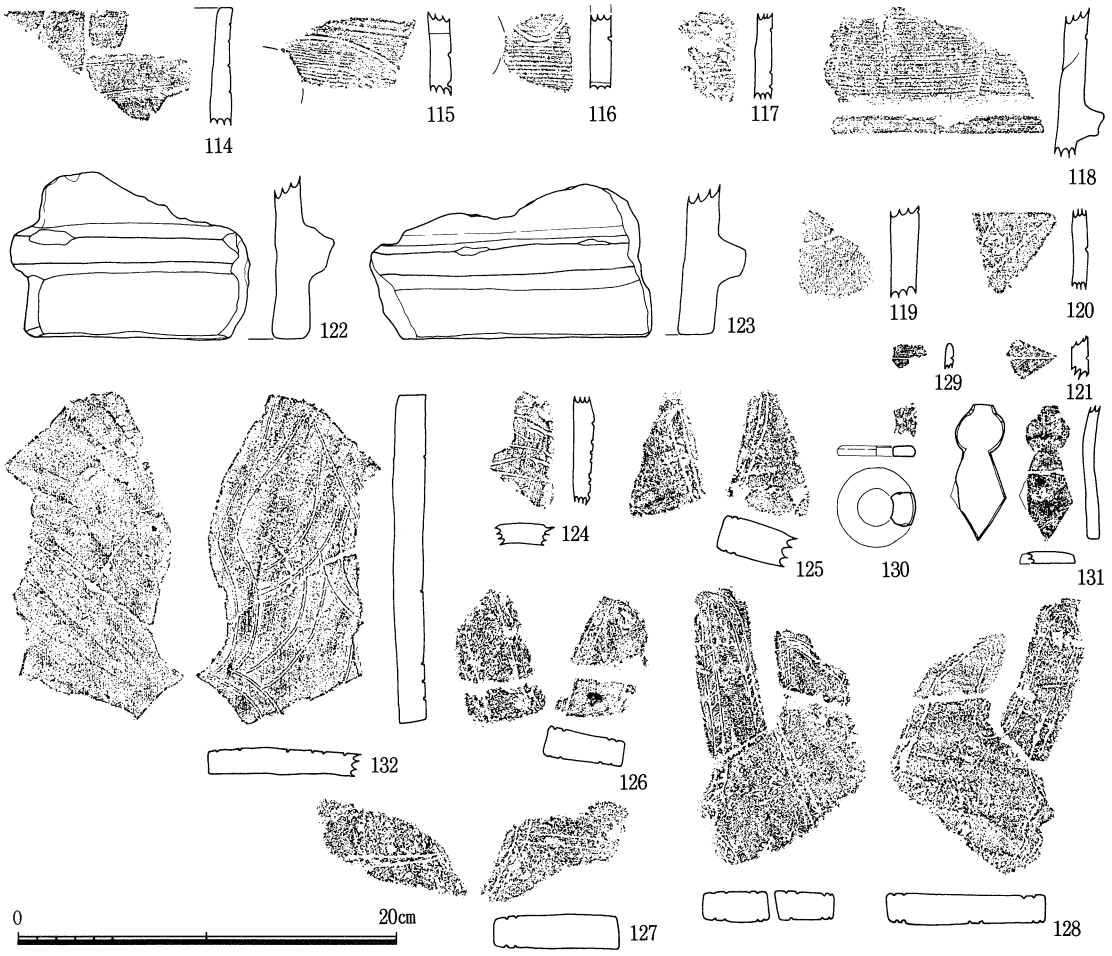


図63　3号窯 ヘラ記号114～121 形象埴輪 家122・123 大刀124 蓋125～128 その他129～132

したものであろう。**129**も薄手のもので、表面にヘラ描き沈線がみられる。馬具の部品とおもわれるが、詳細は分からない。**132**は器財埴輪の飾り板とみられ、表面にヘラ描きの直弧文風の文様が描かれ、裏面はナデ調整している。表面にだけベンガラを塗布している。

土師器では、高坏と甕がある。**133**は大形高坏の口縁部で、口径22.4cmを測る。坏部下半はやや厚めで、しだいにうすくなる上縁部はわずかに外反している。内外面ともヨコナデ調整が顕著で、通常の高坏とは趣が異なる。胎土も細砂を多くまぜた良質のもので、いわゆる埴質である。色調は淡黄灰色である。**134**～**136**は小形の高坏の脚部片である。**134**・**135**は柱状部の内面に工具の調整痕がみられる。**136**の裾部は底径10.3cmを測り、屈曲部に穿孔がある。内外面ともナデ調整で、とくに外面は平滑にしている。いずれも硬質で、淡灰褐色を呈している。**137**の甕は口径14.3cmの口縁部片である。内弯ぎみに立ちあがり、上端に面をもつ。布留式の大形品とみられる。ヨコナデで仕上げているが、外面には指おさえの痕がある。これらは小形高坏や甕の形状から、布留式Ⅴとみられる。

焼土塊は２点(PLATE63c－**138・139**)を抽出し掲載している。どちらも切り藁を多く混ぜたもので、天井材とみられる。

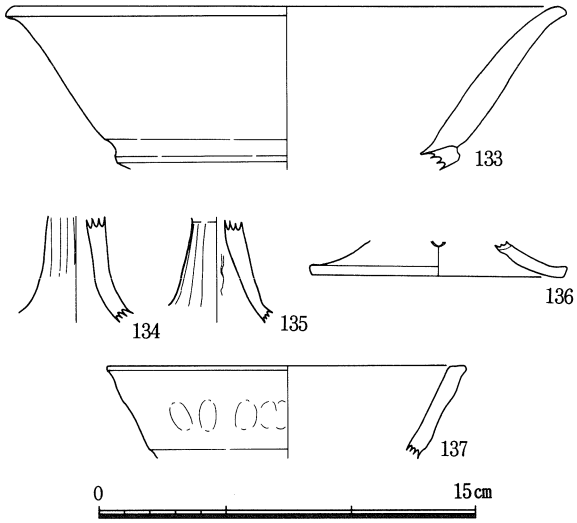


図64　３号窯 土師器 高坏133～136 甕137

注

1．埴輪の出し入れを考えると、ここに分焔柱がたっていたとは思われず、窯構築時に天井を支えるための柱を埋め込んでいたものであろう。１・２号窯は地滑りのために確かめられていない。

2．**2**のヨコハケは見掛け上Bb-1種であるが、それは中型円筒と同じ幅のハケ原体をタガの間隔がひろい大型Ⅱ類に使用した結果と考えれば、Bb-2種とすべきかも知れない。

3．西口陽一氏の教示によれば、この類例となる弥生時代中期の段状口縁鉢資料が、堺市菱木の狐池遺跡からも出土しているという。その資料は口縁部の成形に際して、あらかじめ段状部に相当する分量の粘土帯を立ち上がらせておき、そして直下の口縁部想定位置に樹皮を巻きつけ、粘土を折り返すといった手法を採っているものである。その目的のひとつは口径の大きな段状口縁を水平にしかも一気につくりあげることを意図したものと考えられ、簡便な割り付け作業の一手法とおもわれる。焼成するときには、この樹皮は埋め殺しのままで、狐池例では破断面に繊維状のものが認められるという。現段階では新池遺跡の当該資料を含めても、きわめて特異な好例というほかはない。なお弥生時代に蔓を綴紐として利用したものに山賀遺跡の筌があり、また石剣の柄を樺状の樹皮で巻いた資料などもよくしられているところである。

排水溝・土坑・ピット・灰原

排水溝は１号窯から南東約３ｍのところと３号窯の北西約2.5ｍのところで検出した(図65、PLATE11b・c)。どちらも埴輪窯とほぼ平行に掘削されていて、前者を東溝、後者を西溝と呼ぶ。 東溝と西溝の中心間の距離は約18.4ｍである。まず西溝は現存長約7.7ｍ、最大幅1.4ｍで、もっとも深いところでは0.9ｍを測る。溝の方向は全体として３号窯に平行するが、北半部については東に緩くカーブしているのが読み取れる。埋土は下層が茶灰色系の砂質土で、上層が黄灰色系の砂質土である。東溝は現存長約10.2ｍを測り、最大幅は0.9ｍ、深さは0.4ｍである。溝の延長部分は後世に削平されていて判然としないが、北側については西に緩くカーブしていて、１号窯の煙出し部の方向に向かうことが予測され、もとは１号～３号の窯を半環状に取り巻いていたと考えられる。また南側については、まっすぐ南の谷部へ伸長していくとおもわれ

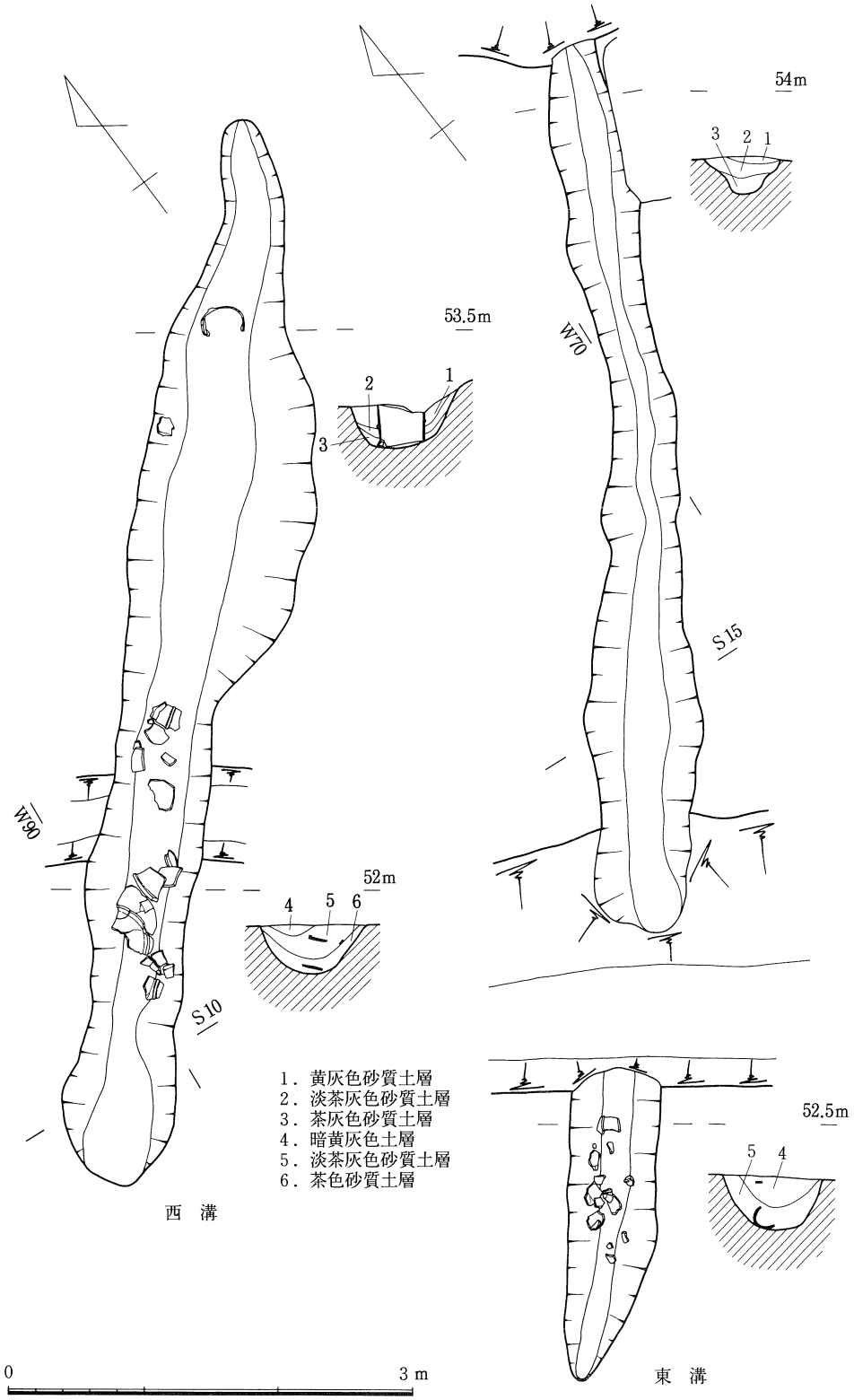

54m
3 2 1
53.5m
2 1
3
W70
S15
W90
52m
4 5 6
S10
1．黄灰色砂質土層
2．淡茶灰色砂質土層
3．茶灰色砂質土層
4．暗黄灰色土層
5．淡茶灰色砂質土層
6．茶色砂質土層
西 溝
52.5m
5 4
0
3 m
東 溝

図65 排水溝

る。埋土は、下層が茶灰色系の砂質土、上層が黄灰色系の砂質土で、西溝とほぼ同じである。遺物は南端部ちかくで、下層から埴輪片がややまとまって出土している。なお西溝が東溝より深くて大きくなっているのは北側から流れ込んでくる段丘上面の雨水を効率よくはかすためと考えられる。

遺物は北寄りで埴輪の基底部**9**、南半部で朝顔形埴輪の口縁部**12**などが出土していて、大振りのものが目立っている。

A群窯の前庭部はすでに調査時点において大きく削られて階段状に造成されていた(図17)ので、まとまりのある顕著な遺構は検出できず、かろうじて土坑1基と8カ所のピットおよび灰原の残欠を確認したにとどまった。

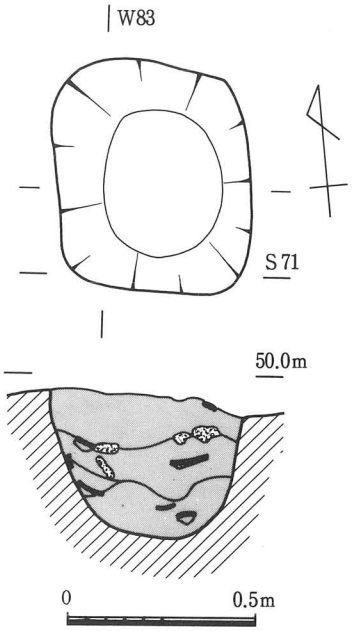


図66　1号土坑

1号土坑は2号窯の直前で検出した。直径0.5m、深さ0.4mの不整形なもので、内部には焼土と埴輪片がぎっしりと詰まっていた(図66)。ピット類は直径0.3～0.5m前後のもので、約8m四方の範囲のなかで検出した。覆い屋などの支柱穴とみられる。灰原は窯のすぐちかくに迫っている開析谷(比高差2～3m)に形成されていたが、大半は削平されていて、検出できたのは灰原底辺部の約7m四方の範囲である。

排水溝の遺物(図67～71・75、PLATE47・48・65、表48-5)

西溝と東溝にわけて記述する。西溝の埴輪には円筒・朝顔形・形象がある。円筒はいずれも中型とみられる。口縁部は2点で、どちらもA3類である。**1**は口径35.4cm、口縁部高は12.2cmを測るI類で、内外面ともヨコハケ調整している。胴部のタガは1類(**3・6・9・11**)、2類(**1**)、4類(**4**)があり、その間隔は12cm(**6・9**)である。**8**には割り付けのための1本のヘラ描き線がみられる。スカシ孔はいずれも円形である。外面のヨコハケ調整はBb-1種(**6・9**)とBc種(**4・11**)、内面はハケ調整とナデ調整がみられる。ヨコハケの種別と内面の調整はかならずしも対応していない。また**6**にみられるように胴部下半をハケ調整し、上半をナデ調整するものはめずらしい。**7**は粘土帯の接合面で剥がれているものである。ベンガラは**6**に認められる。基底部は3点あり、**9**と**11**の基底部高は12cm弱である。外面はBb-1種ヨコハケ(**9**)とBc種ヨコハケ(**10・11**)がみられ、内面は前者がハケ調整、後者がナデ調整である。接合法は**9**が左巻き、**10**が右巻きである。**11**の底面には板状の薄い圧痕がついている。

朝顔形は中型を3点検出した。**12**は丈高の口縁部をもつもので、口径は66.6cmを測る。端部の形はA1類で、外面は上半をタテハケ、下半部をヨコハケ調整し、内面も全面をハケ調整

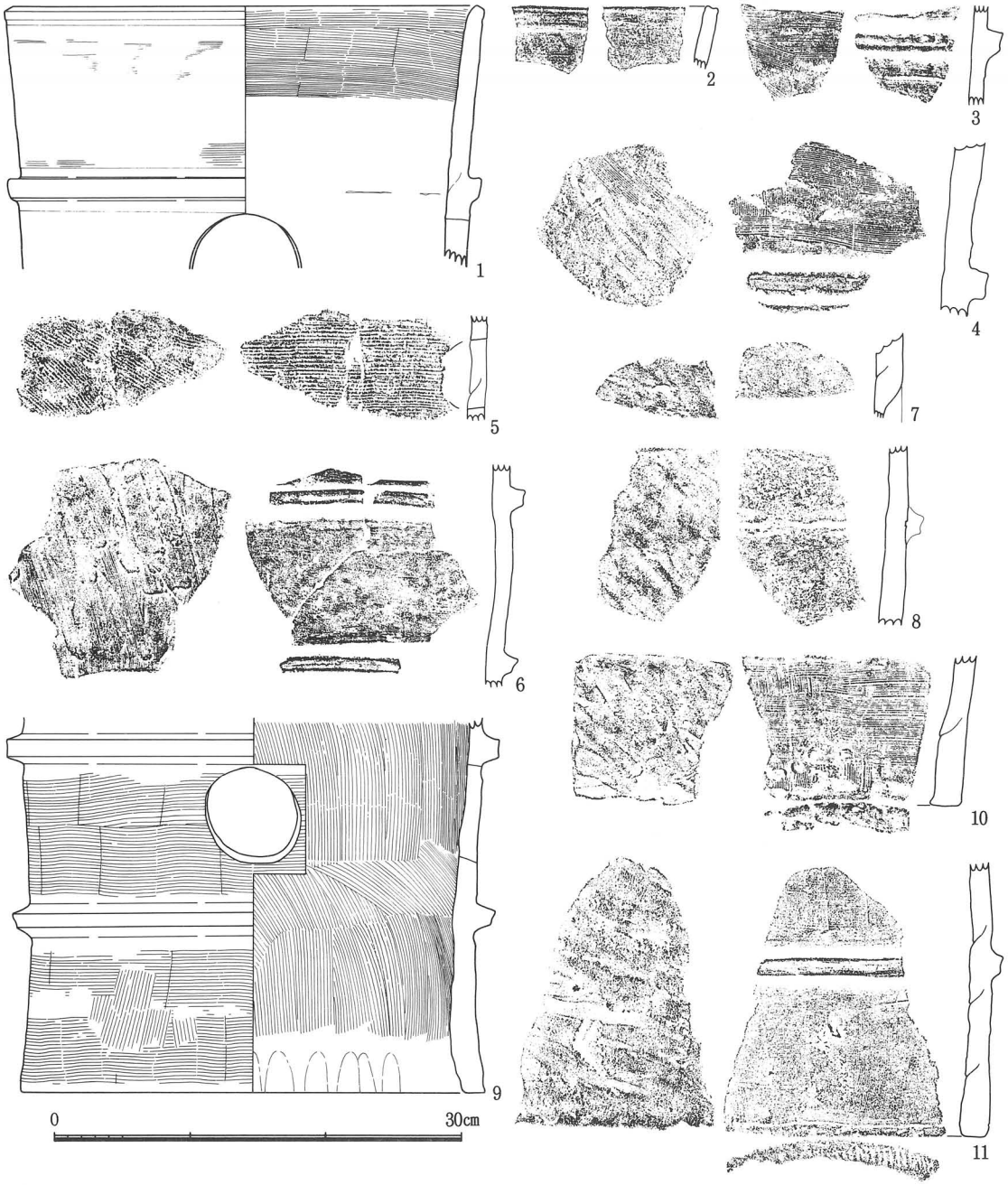


図67　排水溝(西溝) 円筒埴輪１～11

している。上縁部の接合に際しては、擬口縁部の上面にヘラ描きの斜向沈線を多数刻みつけて接着している(PLATE47)。肩部は不定方向のハケ調整をほどこし、内面はナデ調整している。上縁部内面には△形のヘラ記号がみられる。また**12**は３号窯床面出土の破片と接合している。**13**･**14**は肩部の破片で、調整手法は**12**と同じである。３点ともベンガラをほどこしている。

形象は２点出土している。**15**は網代の文様がみられるもので、家の一部かとおもわれる。**16**